

一 般 演 題  
(示 説)

8月22日(木)の部

### 132) 大学が行う新人看護師を対象とした看護技術支援とその評価

○津田智子<sup>1</sup>, 佐藤香代<sup>1</sup>, 安河内静子<sup>1</sup>, 田中美樹<sup>1</sup>,  
植橋明子<sup>1</sup>, 生野繁子<sup>2</sup>, 北川 明<sup>1</sup>, 松浦賢長<sup>1</sup>,  
安酸史子<sup>1</sup>

<sup>1</sup>福岡県立大学看護学部,

<sup>2</sup>九州看護福祉大学看護福祉学部

#### 【目的】

ケアリング・アイランド九州沖縄構想の看護技術支援小部会では、新人看護師の看護技術のレベルアップを目的に、連携大学13校で新人看護師を対象とした看護技術支援を行っている。本研究では、A大学における新人看護師を対象とした看護技術支援について分析し、今後の支援のあり方を検討することを目的とした。

#### 【研究方法】

対象：2011年8月～2012年3月、A大学で行った看護技術支援に参加した新人看護師34名

方法：専任の看護技術支援員が毎月1回(計8回)、5名程度の少人数制で2時間の技術支援を行った。実施した技術項目は、新人看護師のニーズが高い膀胱内留置カテーテル法、吸引等の計6項目である。実施後アンケート調査を行い、その内容を分析した。

〈倫理的配慮〉文書および口頭で研究目的・方法、秘密厳守、拒否の自由、成果発表について説明し同意を得た。なお、A大学の研究倫理委員会の承認を得て実施した。

#### 【結果】

対象の内訳は、看護系大学の卒業者が累計18名(52.9%)、3年課程卒業8名(23.5%)、2年課程養成所卒業6名(17.6%)、高等学校専攻科卒業が2名(5.9%)であった。参加動機(複数回答)は、「技術への不安」が26名(76.5%)と最も多く、次に「早く習得しなかった」が23名(67.6%)であった。支援前に対象者が感じていた技術の困難点は、膀胱内留置カテーテル法では「無菌操作」「尿道口と膣を間違えないか不安」、吸引では「清潔操作が曖昧、困難」「意識レベルが低い患者の口腔内吸引が困難」であった。支援員の指導は、全員が「よかった」と回答し、「丁寧で分かりやすかった」、「質問しやすかった」、「根拠の説明で理解が深まった」等の意見が挙げられた。技術は、全員が「習得できた」「まあ習得できた」と回答し、今後「活用できる」「まあ活用できる」と述べた。今回の技術支援と院内教育との相違は、「少人数で学びやすい」、「他者の評価を気にしなくてよい」、「ゆっくり演習できる」が挙げられ、大学に望むサポートとしては、技術支援、さらに解剖生理や疾患の勉強会、職場では言えない不安・不満を話せる場の提供等であった。

#### 【考察】

今回の技術支援では、対象の満足度が高く全員が技術レベルの向上を実感できた。大学で行う技術支援の利点として、根拠を踏まえた上で演習を行い、他者の評価を気にすることなくのびのびと学ぶことが出来る点が挙げられる。さらに異なる施設に属する新人看護師同士が、互いの不安を話す場の提供としても重要な意義があることも確認された。一方、今回はモデル人形による技術支援であったが、臨床現場により近い形での支援方法をさらに工夫していくことが課題である。

### 133) ハンドマッサージのリラクゼーション効果の検証

○岡本佐智子<sup>1</sup>, 渋谷えり子<sup>2</sup>, 江守陽子<sup>3</sup>

<sup>1</sup>日本保健医療大学, <sup>2</sup>埼玉県立大学, <sup>3</sup>筑波大学大学院  
人間総合科学研究科

#### 【目的】

ハンドマッサージは、実施に特別な設備を必要とせず、衣服の着脱が不要で、重篤な患者にも行うことができる看護技術である。しかし先行研究では、用いるマッサージの手法は様々で、科学的に実証した研究は少ない。昨年、著者らは主観的に「心地よい」と感じるハンドマッサージの圧と実施時間について検討し、結果を得た(日本看護研究学会、第38回学術集会発表)。そこで本研究は、著者らが開発したハンドマッサージを用い、そのリラクゼーション効果について、自律神経活動と心理状態の変化を評価指標として検証を試みた。

#### 【研究方法】

2012年5月～6月に、公募により研究協力の得られた健康な成人女性52名を対象に、ハンドマッサージを実施し、実施前と実施後に血圧、脈拍、皮膚温とリラクゼーション指標として用いられるRE尺度にて評価した。血圧、脈拍は右前腕部で電子血圧計(テルモES-H55)を使用し、皮膚温は額部でサーモフォーカス(日本テクニメッド)を使用し測定した。統計解析はSPSS 19.0 for WindowsにてWilcoxonの符号付順位検定を実施。有意水準5%で判定した。

#### 【ハンドマッサージの実施方法】

本研究において試行したハンドマッサージは、公益社団法人アロマ環境協会の実施手順を参考に、著者らが受け手の評価を調査・分析し、独自に開発した方法で実施した。マッサージは指先から肘、上腕60～70mmHg、手指100mmHgの強さで、潤滑剤に無香料低刺激のオイル(成分:ミネラルオイル・酢酸トコフェロール/ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社)を使用し、両手に対して15分間、1名の実施者が手技を修得の上、行った。

#### 【倫理的配慮】

紙面と口頭で、目的と方法、研究協力は任意であること、本人が特定されないように取り扱うことなどを説明の上、署名にて同意を確認した。なお、本研究は日本保健医療大学倫理委員会の承認を得て実施した(第24-2号)。

#### 【結果】

ハンドマッサージ実施前と実施後の比較では、実施後が有意に「収縮期血圧」が低く( $p=0.000$ )、「拡張期血圧」が低く( $p=0.017$ )、「皮膚温」が高くなった( $p=0.000$ )。また、「脈拍」は有意差がなかったものの、ハンドマッサージ実施前より低下した。RE尺度の得点について、ハンドマッサージ実施前より実施後は、有意に「のんびりしていた」( $p=0.000$ )、「体の力が抜けていた」( $p=0.000$ )、「安心してた」( $p=0.000$ )、「解放的な気分だった」( $p=0.000$ )の項目が高くなった。

#### 【考察】

ハンドマッサージによって交感神経活動が実施前より低下した状態を示すとともに、心理的にもリラクゼーション状態を示した。このことから、本研究で試行したマッサージは、リラクゼーションをもたらすと考えられた。

### 134) 肘関節の屈曲が血圧測定値に及ぼす影響

○松本恵美<sup>1</sup>, 福本尚子<sup>2</sup>, 上田雪子<sup>3</sup>, 留畑寿美江<sup>3</sup>  
<sup>1</sup>神戸大学医学部附属病院, <sup>2</sup>山口大学医学部附属病院,  
<sup>3</sup>山口大学大学院医学系研究科

#### 【目的】

肘関節に可動域制限がある場合には肘関節が屈曲した状態で血圧測定せざるを得ない。そこで肘関節の屈曲が血圧測定値に及ぼす影響を検証した。

#### 【研究方法】

1. 対象者：循環器疾患および上肢の関節可動域制限がない20歳代の女性21名とした。
2. 方法：マンシェットの締めつけは直径1cmのペン2本が入る程度とし、右肘を110度屈曲固定し水銀血圧計を用いて測定した。5分間の安静後に締めつけをペン4本分にして測定した。測定者は研究者の2名であり、実験前に二股聴診器を用いて測定値が誤差2mmHg以内になるまで手技の統一を図った。
3. 分析方法：データは平均値±標準偏差で示す。関連2群間比較にはWilcoxon検定を用い、有意水準は5%未満とした。
4. 倫理的配慮：対象者に調査の趣旨等を文書と口頭で説明し承諾書への署名を得た。山口大学大学院医学系研究科保健学専攻医学系研究倫理委員会の承認を得て実施した。

#### 【結果】

対象者の平均年齢22±1歳、身長157±4cm、BMI20±2kg/m<sup>2</sup>であった。収縮期血圧はコントロール条件96±7mmHg、RC2(右肘関節屈曲・マンシェットの緩みペン2本)95±8mmHg、RC4(右肘関節屈曲・マンシェットの緩みペン4本)96±8mmHgであった。右肘関節の屈曲と伸展間、マンシェットの緩みの程度においていずれも有意な差はなかった。拡張期血圧はコントロール条件58±6mmHg、RC2は61±8mmHg、RC4は63±8mmHgであった。コントロールより肘関節を屈曲したRC2の方が拡張期血圧は有意に高かった。コントロールとRC4ではRC4の方が有意に高かった。マンシェットの締めつけを変えたRC2とRC4との間に有意な差はなかった。

#### 【考察】

1. 肘関節の屈曲・伸展の違いによる血圧測定値の変動：マンシェットの締めつけが同じ場合、肘関節の屈曲および伸展での収縮期血圧は差がなく、拡張期血圧においては屈曲時の方が高く測定されることが分かった。肘関節を屈曲させた場合に拡張期血圧が高くなったのは、肘関節の屈曲により上腕動脈の血流が一過性に低下したため上腕部の血管抵抗が増大したためではないかと考えられる。2. マンシェットの締めつけの強さによる血圧測定値の変動：マンシェットの締めつけが強いほど収縮期および拡張期血圧は高くなると予想されたが、マンシェットを緩く巻いた場合の収縮期血圧に変動はなく拡張期血圧のみが高くなった。マンシェットの締めつけが緩いと測定者はマンシェットの圧が低いと感覚的に知覚し、通常よりも圧を負荷した可能性が推察される。そのため本来の生体反応以上に外部からの負荷による影響で血圧が高くなった可能性が考えられる。

### 135) 両利き用クリップタイプ箸を用いた手指の巧緻性の検討

○福本尚子<sup>1</sup>, 松本恵美<sup>2</sup>, 上田雪子<sup>3</sup>, 留畑寿美江<sup>3</sup>  
<sup>1</sup>山口大学医学部附属病院, <sup>2</sup>神戸大学医学部附属病院,  
<sup>3</sup>山口大学大学院医学系研究科

#### 【目的】

箸は母指の内旋、手指関節の屈曲伸展により操作される。本研究は手指の巧緻性を箸及び両利き用福祉用具を用いて検証した。

#### 【研究方法】

1. 対象者：上肢の関節可動域制限のない右利きの女性24名とした。
2. 使用用具：両利き用の福祉用具「楽々お箸クリップタイプ(株式会社コラボ)」(長さ22.5cm, 重量24g)を使用した。
3. 測定方法：2分間に箸または福祉用具を用いて、いくつ豆を移動できるかを左右それぞれ箸または福祉用具を用いて2回ずつ測定した。24名の手技毎の豆の個数の平均値を算出した。
4. 分析方法：左右間及び用具間の比較には、Mann-Whitney U検定を用いた。有意水準は1%未満とした。
5. 倫理的配慮：対象者に口頭と文章で研究の趣旨、目的、方法や個人情報守秘性などを説明し、同意書への署名によって同意とした。

#### 【結果】

##### 1. 左右間の豆の個数の比較

箸を右手で用いた豆の個数は、1回目50±9個、2回目51±9個であり、左手では、1回目18±7個、2回目20±7個であった。福祉用具を右手で用いた豆の個数は、1回目52±11個、2回目53±9個であり、左手では、1回目35±8個、2回目36±8個であった。右手での豆の把持が有意に多かった。

##### 2. 福祉用具と箸の比較

右手で福祉用具を用いた豆の個数は、1回目52±11個、2回目53±9個であり、箸では、1回目50±9個、2回目51±9個であった。右手では、箸と福祉用具の豆の把持に有意差は見られなかった。左手で福祉用具を用いた豆の個数は、1回目35±8個、2回目36±8個であり、箸は、1回目18±7個、2回目20±7個であった。左手では、福祉用具使用での豆の把持が箸より有意に多かった。

#### 【考察】

利き手である右手で移動できた豆の個数は左手より有意に多く、また箸と福祉用具の豆の個数に有意差はなかった。利き手側の巧緻性は高いため箸と福祉用具どちらを用いても豆の把持に違いはなかった。非利き手である左手では、箸より福祉用具の方が豆の個数が有意に多かった。非利き手での箸の操作は、中指の近位で箸を把持する。そのため、中指の屈曲伸展の可動性が小さくなることで箸の上下運動の幅が狭くなり、示指が箸を下方に押し下げる力を増大させる必要がある。同時に、母指の屈曲伸展動作を大きくすることで中指の動きを補うため、箸の固定が安定しなかったと考えられる。また、箸にクリップを装着することで、バネ作用により箸先を開閉させる母指と中指の第一関節の伸展運動や示指の中手指節間関節の屈曲運動は軽度の動作で可能になると考えられ、本研究で使用した福祉用具は箸の操作性を補完したと推測される。

#### 【結論】

本研究で用いた福祉用具は日常で協調性動作を行うことが少ない非利き手の手指の屈曲伸展運動を補完することがわかった。

136) タクティールケアの生理機能および心理的側面に及ぼす効果 (第一報) : 自律神経・脳活動に及ぼす影響

○鈴木みずえ<sup>1</sup>, 木本明恵<sup>2</sup>, 中島怜子<sup>3</sup>, 長谷川拓也<sup>4</sup>, 中込敏寛<sup>2</sup>

<sup>1</sup>浜松医科大学看護学科, <sup>2</sup>日本スウェーデン福祉研究所, <sup>3</sup>元浜松医科大学医学系研究科修士課程, <sup>4</sup>浜松医科大学医学系研究科博士課程

【研究目的】

タクティールケアはソフトマッサージの一種で, スウェーデンで開発された皮膚を柔らかく撫でるように触れる手法を用いて安心感や心地良さを引き起こすことから, わが国でも高齢者保健医療福祉の現場で導入されている。著者らはタクティールケアによって認知症高齢者の認知症行動心理症状 (BPSD) の一つである攻撃性の改善を報告した。これらによって臨床によるタクティールケアの効果が明らかになったが, その脳神経系に及ぼすメカニズムに対する効果は十分明らかではない。本研究の目的は健常女性を対象に心拍変動および脳波を用いてタクティールケアが自律神経・脳活動に及ぼす効果を明らかにした。

【研究方法】

平成24年8月~9月に研究同意を得た健常女性20名を研究対象者として, クロスオーバー比較試験法を用いて, タクティールケアの介入群とタッチケアのコントロール群を比較した。研究倫理: 本研究の倫理に関しては浜松科大学医の倫理委員会にて承認を受けた。対象者には研究の説明を行い, 研究同意の承諾を得た。タクティールケアを実施する介入群には左手にオイルを用いたタクティールケア, タッチケア方法を実施するコントロール群には左手にタッチケアをそれぞれ実施した。脳波および心拍変動に関して, 介入前中後の脳波, 心拍変動をそれぞれ10分間測定した。測定は脳波心拍変動リアルタイム解析プログラム (GMS社) を用いて, 脳波スペクトル解析と心拍変動のスペクトル解析による自律神経機能評価を分析した。なお, 本研究では介入前中後ともに, 変化の激しい最初と最後の3分間を除き, 最も安定した中間の4分間を用いた。解析にはPASW StatisticsのDunnett検定を用いて介入前と介入中・介入後を比較した。

【結果・考察】

2回の介入に参加し, 測定が全て可能であった対象者は12名 (平均年齢 $21.00 \pm 1.28$ ) であった。なお, 1回しか参加できなかった者, どちらかに月経など体調不良の者の合計8名を対象から除いた。脳波では睡眠中の脳波とも言われる第一周波数帯 ( $\delta$ 波) では介入前 $36.05 (\pm 10.33)$  (%) と比べて介入後 $51.23 (\pm 7.70)$  (%) と有意に増加した。しかし, 第三周波数帯 ( $\alpha$ 波) は有意に低下していた。心拍変動ではHF (副交感神経の指標) が介入前 $292.69 (\pm 190.44)$  に比べて介入後 $699.87 (\pm 547.45)$  と有意に増加していた。TF (全周波数パワー値) も同様に介入後有意に増加していた。入眠時に $\alpha$ 波が減少し,  $\delta$ 波が増加することからタクティールケアは入眠につながる精神的安楽の効果や副交感神経機能の増加, 自律神経に関する健康状態の改善が示唆された。

137) タクティールケアの生理機能および心理的側面に及ぼす効果 (第二報) : 健康関連QOL・気分に及ぼす影響

○木本明恵<sup>1</sup>, 鈴木みずえ<sup>2</sup>, 中島怜子<sup>3</sup>, 長谷川拓也<sup>4</sup>, 中込敏寛<sup>5</sup>

<sup>1</sup>日本スウェーデン福祉研究所, <sup>2</sup>浜松医科大学地域看護学講座, <sup>3</sup>元浜松医科大学医学系研究科修士課程 (看護学専攻), <sup>4</sup>浜松医科大学医学系研究科博士課程, <sup>5</sup>日本スウェーデン福祉研究所

【研究目的】

タクティールケアはソフトマッサージの一種で, スウェーデンで開発された皮膚を柔らかく触れる手法であり, 安心感や心地良さを引き起こすことから, わが国でも高齢者保健医療福祉の現場で導入されるようになった。著者らは継続的にタクティールケアの効果について研究を行っているが, 健康および気分に関する効果に対する研究は十分明らかではない。本研究の目的は健常女性を対象に健康関連QOLおよび二次元気分尺度を用いて, タクティールケアが健康および気分に関する効果について明らかにした。

【研究方法】

平成24年8月~9月に研究同意を得た健常女性20名を研究対象者として, クロスオーバー比較試験法を用いて, タクティールケアの介入群とタッチケア方法のコントロール群を比較した。研究倫理: 本研究の倫理に関しては浜松科大学医の倫理委員会にて承認を受けた。対象者には研究の説明を行い, 研究同意の承諾を得た。タクティールケア介入群には, 左手にタクティールケア, コントロール群には左手にタッチケアをそれぞれ実施した。健康関連QOLはSF-8を用いて, 身体機能 (PF), 日常役割機能 (RE) (身体), 体の痛み (BP), 全体的健康感 (GH), 活力 (VT), 社会生活機能 (SF), 日常役割機能 (RE) (精神), 心の健康 (MH), 身体的サマリースコア, 精神的サマリースコアを評価した。二次元気分尺度は, 気分の活性度, 安定度, 快適度, 覚醒度を評価した。対象者にF-8および二次元気分尺度をタクティールケアおよびコントロール介入前後に記入を依頼した。解析にはPASW Statisticsを用いて介入前後を対応のあるt検定で比較した。

【結果・考察】

2回の測定に参加し, 測定が全て可能であった対象者は12名 (平均年齢 $21.00 (\pm 1.28)$ ) であった。タクティールケア介入でSF-8では全体的健康感 (GH), 活力 (VT), 心の健康 (MH), 精神的サマリースコアが介入前と比べて有意に増加した。二次元気分尺度は気分の活性度, 安定度, 快適度の3項目が有意に増加し, 覚醒度は $-0.75 (\pm 1.96)$  から $-4.00 (\pm 2.09)$  と有意に低下した。コントロール群では心の健康, 精神的サマリースコアが介入前に比べ介入後に有意に増加した。二次元気分尺度は気分の活性度, 安定度, 快適度の3項目が有意に増加した。タクティールケアとタッチの両方において精神的健康や気分の活性, 安定性, 快適性の増加が認められた。しかし, タッチでは認められなかったタクティールケアの特徴としては, 全体的な健康や活力の回復, 気分の鎮静化を引き起こす効果が示唆された。

### 138) 看護技術の構成要素からみた陰部洗浄演習後と基礎看護学実習後の理解の変化

○鶴田晴美<sup>1</sup>, 長谷川真美<sup>1</sup>, 根岸京子<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 東都医療大学ヒューマンケア学部看護学科

#### 【目的】

演習後と基礎看護学実習終了後の、陰部洗浄の技術を支える構成要素の理解を比較し、学内演習に補足すべき内容を明らかにする。

#### 【研究方法】

(1) 対象：A大学2年次生106名。(2) 調査時期：平成24年7月(演習終了後)平成24年12月(実習終了後)。(3) 調査方法：自記式質問紙調査。看護技術の構成要素を、〈必要性と適応患者〉〈対象への説明〉〈感染予防を踏まえた洗浄方法〉〈石鹸の泡立て方・ガーゼ使用方法〉〈羞恥心への配慮〉〈新しいオムツへの交換方法〉の6項目とした。評価は、3点「よくわかった」、2点「少しわかった」、1点「わからなかった」の3段階とした。(4) 分析方法：項目別に記述統計量を算出。演習後と実習後の比較は、Wilcoxonの符号付順位検定で分析した。統計分析には、SPSS for windows 19.0Jを用い、有意水準は5%とした。(5) 倫理的配慮：研究の趣旨・目的、参加の自由意思、研究参加の有無と成績は一切関係しないことを説明し、回収BOXを設置し、調査票の回収をもって同意とみなした。

#### 【結果】

同意の得られた学生92名のうち、基礎看護学実習で陰部洗浄を経験した56名を対象とした。「よくわかった」のみに焦点化し述べる。〈必要性と適応患者〉は、「よくわかった」演習後(89.3%)、実習後(85.7%)であった。〈対象への説明〉は、「よくわかった」演習後(51.8%)、実習後(73.2%)、〈感染予防を踏まえた洗浄方法〉は、「よくわかった」演習後(85.7%)、実習後(83.9%)であった。〈石鹸の泡だて方、ガーゼ使用方法〉は、「よくわかった」演習後(83.9%)、実習後(71.4%)であった。〈羞恥心への配慮〉は、「よくわかった」が演習後(66.1%)、実習後(80.4%)、〈新しいオムツの交換方法〉は、「よくわかった」が演習後(46.4%)、実習後(73.2%)であった。項目別に演習後と実習後のWilcoxonの符号付順位検定を行った結果、〈対象への説明〉( $p < 0.01$ )、〈新しいオムツの交換方法〉( $p < 0.01$ )で有意差があった。

#### 【考察】

演習後の理解で、「よくわかった」が80%に達していない項目は、〈対象への説明〉〈羞恥心への配慮〉〈新しいオムツの交換方法〉の3項目であったが、実習後は〈対象への説明〉〈新しいオムツの交換方法〉が有意に高かった。実習後は全ての項目が70%以上に到達したことから、対象に応じた経験の重要性が示された。しかし、実習での経験率が全体の60%程度であることから、実習で経験できなかった学生への対策が必要である。一方、演習後と実習後で変化がみられない項目は、〈必要性と適応患者〉〈感染予防を踏まえた洗浄方法〉の2項目で、知識と技術の要点を踏まえた学習となれば、モデル使用でも習得可能な要素であることが明らかになった。

### 139) 洗髪における毛髪の長さ別にみたすすぎの湯量—界面活性剤残留濃度による検討—

○工藤千賀子<sup>1</sup>, 渡部菜穂子<sup>1</sup>, 對馬明美<sup>1</sup>, 葛西詩織<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 弘前学院大学看護学部看護学科,

<sup>2</sup> 津軽保健生活協同組合健生病院

#### 【目的】

清潔をもたらす看護技術である「洗髪」を実施する際の看護者の労力と経済性を最小限にするため、1回の洗髪に必要な湯量を予め把握しておくことが必要であると考え。しかし、洗髪の湯量に関する研究は少ない。そこで、毛髪の長さ別に、洗髪におけるすすぎに必要な湯量を明らかにすることを目的とした。

#### 【研究方法】

実験は、健康な青年期の男女を対象とし、A大学看護学実習室で実施した。使用したシャンプーは、日本シャンプー分析協会の分析結果に基づき、低刺激な界面活性剤を含みコストパフォーマンスが高い「スーパーマイルド(資生堂)」を10%に希釈し湯煎して用いた。毛髪の長さ別使用量は、20cm未満で30ml、20~40cm未満で60ml、40cm以上で90mlとした。洗髪車を用い、頭髪を3分間洗浄後、実験者の手の泡と洗髪槽の泡をタオルで拭き取った後温湯ですすぎ、排水の泡が肉眼的に見えなくなった時点から、排水を採取した。採取した汚水の界面活性剤残留濃度を「陰イオン界面活性剤測定セット(共立科学研究所)」を用い測定した。界面活性剤残留濃度が0.2ppm以下になった時点の湯量をすすぎの湯量とした。分析は、毛髪の長さ別に泡が肉眼的に見えなくなった湯量と界面活性剤残留濃度が0.2ppmになった湯量およびすすぎの総湯量の平均値を算出し、比較をした。倫理的配慮として、弘前学院大学倫理審査委員会の承認を得て、対象者には研究目的と方法、個人情報保護や研究参加の自由を保障することについて文書と口頭で説明し、同意を得た。

#### 【結果】

対象者は女性10名で、毛髪の長さ別では、20~40cm未満の者(以下A群とする)が4名、40cm以上の者(以下B群とする)が6名であった。肉眼的に泡が見えなくなった湯量の平均値は、A群 $2.3 \pm 0.21$ 、B群 $4.2 \pm 0.71$ 、界面活性剤残留濃度が0.2ppmになった湯量の平均値は、A群 $6.7 \pm 1.51$ 、B群 $7.8 \pm 0.71$ であった。すすぎに要した総湯量の平均値は、A群 $9.8 \pm 2.01$ 、B群 $12.5 \pm 2.01$ であった。それぞれの湯量の平均値をt検定で比較した結果、肉眼的に泡が見えなくなった湯量において差が認められた( $p < 0.01$ )。

#### 【考察】

毛髪の長さが40cm以上の長い群では、20~40cm未満の群に比べると、肉眼的に泡が見えなくなるまでの湯量は約2倍必要である。また、毛髪の長さに関わらず、シャンプーの界面活性剤残留濃度が、水質基準による水道水の陰イオン界面活性剤含有量と同様の0.2ppmになるまでには、肉眼的に泡が見えなくなってから約7~81の温湯を必要とし、十分にすすぐ必要があることが示唆された。界面活性剤の性質から、今後は、汗や皮脂量など頭皮や毛髪の汚染度とすすぎの湯量の関連も検証する必要があると考える。

#### 140) 月経随伴症状に対する温罨法の効果

○近藤美幸<sup>1</sup>, 江上千代美<sup>1</sup>, 長坂 猛<sup>2</sup>, 田中美智子<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>福岡県立大学看護学部, <sup>2</sup>宮崎県立看護大学

##### 【目的】

月経随伴症状の自覚のある者に対して, 温罨法を用いた際の生理学的指標の変化を捉えることで, 温罨法が月経随伴症状を緩和するメカニズムの一部を明らかにすることを目的とした。

##### 【方法】

月経随伴症状の自覚がある女性12名を対象とし, 月経1日目から3日目の期間に実施した。実験は気温 $24^{\circ}\text{C} \pm 0.3^{\circ}\text{C}$ の環境下で行った。実験はコントロール条件及び温罨法条件の2条件とした。温罨法は花王めぐりずム蒸気温熱シートを下腹部に用いた。測定項目は, 表面皮膚温, 腋窩温, RR間隔, 血圧, 唾液内生理活性物質(コルチゾール, アミラーゼ, プロスタグランジンE2), 主観的評価(温冷感覚, 快適感覚, 経時的痛み変化)とした。10分間安静仰臥位を保った後, そのままの体位で各値の測定を開始し, 1時間後に終了した。RR間隔のデータからローレンツプロット解析を行い, L/Tを交感神経活性の指標,  $\text{Log}(L \times T)$ を副交感神経活性の指標とした。各測定項目について, 開始から15分おきの値を時間経過と条件を因子におき二元配置分散分析を行った。加えて条件を因子として対応のあるt検定を, 時間を因子として一元配置分散分析を行い, 多重比較法としてDunnnettの方法を用いた。本研究は所属機関の倫理委員会の承認を得て実施した。対象者に研究の趣旨について口頭と文書で説明を行い, 同意を得て行った。

##### 【結果】

手背・足背部表面皮膚温では, 15から60分間でコントロール条件より温罨法条件が高い値で推移した。血圧, 自律神経活性, 唾液内生理活性物質について有意差は認められなかった。温冷感覚は, 温罨法条件で0分時と比較して45分時と60分時に有意な上昇が認められた(Dunnnett  $p < 0.05$ )。快適感覚は, 温罨法条件で0分時と比較して30分時と60分時に有意な上昇が認められた(Dunnnett  $p < 0.05$ )。経時的痛み変化は, 60分時にコントロール条件よりも温罨法条件の値が有意に低かった( $p < 0.05$ )。足背部表面皮膚温を $31^{\circ}\text{C}$ 以上の群と $31^{\circ}\text{C}$ 未満の群に分け, 温罨法条件の各値を比較したところ, 0分時では腋窩温と腹部表面皮膚温は $31^{\circ}\text{C}$ 以上の群が $31^{\circ}\text{C}$ 未満の群より低く, 痛みは $31^{\circ}\text{C}$ 以上の群が $31^{\circ}\text{C}$ 未満の群より高い値であった。60分時において腋窩温, 腹部表面皮膚温は $31^{\circ}\text{C}$ 以上の群が $31^{\circ}\text{C}$ 未満の群より高く, 痛みは $31^{\circ}\text{C}$ 以上の群の方が $31^{\circ}\text{C}$ 未満の群より軽減していた。

##### 【考察】

主観評価では, 加温によって全身が温かく, かつ快適となった。これらによって痛み閾値が低下し, 心因性の痛みが低下した可能性がある。また, 腋窩温及び体幹部の表面皮膚温が低下している場合に痛みは強く, 温罨法の加温によって腋窩温及び体幹部の表面皮膚温が上昇するほど痛みが軽減する可能性がある。これは, 体幹部の温度が低いと月経時の痛みが強く生じることが示され, 冷えとの関係が考えられた。

#### 141) 看護場面における看護師と看護学生の眼球運動から類推される危険認知の比較

○江上千代美<sup>1</sup>, 田中美智子<sup>1</sup>, 近藤美幸<sup>1</sup>, 福田恭介<sup>2</sup>  
<sup>1</sup>福岡県立大学看護学部, <sup>2</sup>福岡県立大学人間社会学部

##### 【目的】

医療の高度化・複雑化に伴い, 安全な看護の提供がより一層重要されており, さまざまな教育が看護学生のみならず看護専門職を含めて行われてきた。その教育は看護提供場面に潜むさまざまな危険を看護技術や業務との関係で認識させ, 間違いや不適切な行為が, 患者にどれほど重大な結果をもたらすかを理解させ, 看護業務や技術における危険認識力と危険回避力を養うことを目標としたものなどである。我々はこれまで危険認知力や危険回避力向上を目指したシュミレーションスキルアッププログラム開発に向けて, 看護場面を見ているときの対象者の眼球運動を手がかりに危険認知力の検討を行ってきた。その結果, 講義や実習を終了した4年生は他の学年より危険箇所を優先的にみて, 危険と認知し, なおかつ, 危険と認知するまでの時間も短縮することが確認できた。そこで, 本研究では, 危険な看護場面を見たときの看護師と看護学生の危険認知や危険回避行動を比較するために眼球運動指標を用いて検討した。

##### 【方法】

参加者は10年以上の看護師経験をもつ看護師11名(Ns群)と看護大学4年生14名(学生群)である。眼球運動測定器はアイマーク・レコーダ(nac社:EMR-8)を使用した。参加者には危険な看護場面として療養生活および診療の補助技術場面32枚の呈示写真をみせた。1枚の呈示時間は5秒間とした。危険と感じたらアイマーク備え付けCUEボタンをすぐに押すように指示して開始した。危険認知はCUEボタンが押されたときの眼球定位箇所から解析し, 回避行動は実験終了後, 危険認知した呈示写真について「どうすると危険は回避できますか?」と口頭で尋ね, ビデオに録画した。なお, 本学会では療養生活援助として移乗介助2場面, 採血場面, 血圧測定場面の合計4課題について発表する。

##### 【倫理的配慮】

対象には研究の目的や方法などを説明し, 自由意思で随時拒絶または撤回できること, プライバシー保護には十分注意することなどを説明し, 参加の同意を得た。本研究は所属機関の研究倫理委員会の承認を得て実施した。

##### 【結果】

全ての課題におけるNs群のCUEボタン押し回数(平均1.2)は学生群(平均0.5)より多く, Ns群(平均0.5sec)の方が学生群(平均0.9sec)より短い時間で危険と判断できていた。危険回避行動ではNs群(平均1.2)は学生群(平均0.2)より, 適切な回避行動の報告数が多かった。

##### 【考察】

Ns群は学生群よりCUEボタン押し回数が多く, なおかつ, 速く危険と認知でき, 危険回避行動においてもNs群は学生群より適切であったことから, 学生群の危険認知と危険回避行動は卒業後の経験により向上することが示唆された。今後は医療安全教育が危険認知や危険回避行動へ及ぼす効果について検討する予定である。

## 142) 長期療養有歯顎者の口腔内細菌叢に影響する要因

○道重文子<sup>1</sup>, 原 明子<sup>1</sup>, 川北敬美<sup>1</sup>, 仲前美由紀<sup>2</sup>

<sup>1</sup>大阪医科大学看護学部,

<sup>2</sup>国際医療福祉大学福岡看護学部

### 【目的】

口腔ケアは、口腔疾患や嚥下性肺炎の予防のために重要であり、口腔内細菌叢は、歯の状態や全身状態の影響を受ける。長期療養者に対する適切な口腔ケア法を検討するために口腔内細菌叢に影響する関連要因を探索した。

### 【方法】

対象者は、医療療養型病院に入院中の療養者で、代諾者により研究への同意の得られた有歯顎者20名である。診療録より、病名および治療内容、ADL等の基本情報を収集し歯の状態を診査し、2012年8月に、口腔ケア実施前の午前中に1名の同一者が口腔内の乾燥度を観察後、拇指と示指で両口角をはさみ5回口唇を中央に寄せるようにマッサージ後に左口角頬側歯肉部（第1大臼歯部）にシードスワブの綿棒を挿入し3往復後10秒間留置し採取した。綿棒は、検体輸送容器内に戻し、冷所保存後、採取翌日に、総菌数はBHI血液寒天培地、ぶどう菌数はマンニット食塩培地、緑膿菌はNAC培地、カンジダはクロモアガーカンジダ培地に塗抹し、それぞれ所定の培養条件で規定時間培養後、コロニーカウントを行い、生菌数を測定した。細菌数は1綿棒あたりの検出数を示す。

### 【倫理的配慮】

大阪医科大学研究倫理委員会の承認を受けた。対象者は、高次脳機能障害や認知症のため本人からの同意を得ることができないため、保護者に文書と口頭にて身体的負担がかからないことを説明し同意を得た。

### 【結果】

対象者の平均年齢は、80.1±10.13歳（最高99歳、最低56歳）であった。そのうち3名が気管切開により呼吸管理が行われ、胃瘻による栄養管理が13名、経口摂取者は3名であった。現在歯数の平均は、14.1±7.6本（最高28本、最低4本）であり、健全歯数の割合は、29.6%であった。8人は健全歯が0本であった。総細菌数の平均は、3.68×10<sup>6</sup> cfuであった。総細菌数が最も多かったのは、経口摂取者で14.72×10<sup>6</sup> cfuであり、カンジダアルビカンスも検出された。緑膿菌が検出されたのは、7名（35.0%）であり、気管切開者4名のうち3名から検出された。ぶどう球菌が検出されたのは、5名であり、うち2名からは緑膿菌も検出され、舌苔付着者、開口障害者、口腔乾燥者であった。カンジダアルビカンスが検出されたのは、経口摂取者の2名であり口腔乾燥が見られた。

### 【考察】

今回対象とした有歯者の口腔ケアは、1日1回、オキシドールを1.5倍希釈したものかマウスウォッシュを使用してブラッシング後、綿棒で拭きとりが行われ、口腔衛生状態は良好であった。未処置歯が多数見られ、歯周炎を併発していたが、総細菌数との関係を見出すことはできなかった。病原菌である緑膿菌、ぶどう球菌、カンジダアルビカンスの検出者は、気管切開や口腔乾燥者であり、合併症を予防するためにこれらの対象者に適した口腔ケア法の検討が必要である。

## 143) 冬季の皮膚乾燥を予防するケア方法の検討 —皮膚水分量の季節比較—

○岡田ルリ子<sup>1</sup>, 宮腰由紀子<sup>2</sup>, 高瀬美由紀<sup>2</sup>, 藤井宝恵<sup>2</sup>

<sup>1</sup>愛媛県立医療技術大学, <sup>2</sup>広島大学大学院

### 【目的】

低温低湿の冬季は、皮膚乾燥による皮膚バリア機能低下を生じ易い。そこで、皮膚乾燥予防ケア検討の基礎資料を得る目的で、冬季と夏季の皮膚水分量を比較した。

### 【方法】

健康女性6名（年齢22.3±5歳）を対象に、冬季（H22年12月～翌1月、室温21.3±1.4℃・湿度50.6±4.2%）と夏季（H22年8月、室温25.3±0.8℃・湿度54.0±1.8%）の角層水分量（片側前腕内側肘窩から長軸方向2cm×8cm範囲内の異なる5箇所）の平均値・皮膚表面温（前腕内側肘窩と手関節の中間部）・水分蒸散量（前腕内側肘窩より約20cm末梢側）を、30分間の環境馴化後、5分毎に測定した。分析は、測定開始後15～30分間の平均値をWilcoxonの符号付順位検定で季節差を比較し、有意水準はP<0.05とした。

### 【倫理的配慮】

協力者へは事前に書面と口頭で研究の目的・方法・自由意思による参加と途中撤回保証等を説明し、書面で同意を得た。本研究は愛媛県立医療技術大学研究倫理委員会の審査・承認を得た。

### 【結果】

各測定項目の季節比較（表）では、角層水分量が、冬季は中央値（四分位範囲）が22.6（9.1）auで、夏季38.9（14.3）auの約58%に減少した（P=0.028）。皮膚表面温も、冬季は30.4（4.7）℃で夏季33.5（1.4）℃に比べて約3℃の低下を示した（P=0.027）。水分蒸散量には、季節較差を認めなかった。

### 【考察】

冬季の角層水分量は、夏季に比べ有意に減少し、皮膚表面は明らかに乾燥している、と言える。皮膚血流を反映する皮膚表面温も有意に低下し、低温環境での皮膚血管の収縮が皮膚血流量を減少させたと推測できる。筆者らは、角層水分量と皮膚表面温との正の相関関係について既に報告しており、皮膚表面温の上昇、つまり皮膚血流量の増加が角層への水分供給をもたらすと考えている。以上から、皮膚血流量を増加させる部分浴などの温熱刺激は、冬季の皮膚乾燥を予防する可能性をもつと考える。

表 皮膚水分の季節比較

	角層水分量 (au)	皮膚表面温度 (°C)	水分蒸散量 (g/m <sup>2</sup> ·h)
冬季	22.6 ( 9.1)	30.4 (4.7)	7.3 (2.5)
夏季	38.9 (14.3)	33.5 (1.4)	8.4 (3.6)

Wilcoxon signed-rank test \* : P<0.05 Median (quartile range)

#### 144) 眼への温熱刺激による自律神経反応及び主観的評価

○田中美智子<sup>1</sup>, 長坂 猛<sup>2</sup>, 江上千代美<sup>1</sup>, 近藤美幸<sup>1</sup>, 榊原吉一<sup>3</sup>

<sup>1</sup>福岡県立大学, <sup>2</sup>宮崎県立看護大学, <sup>3</sup>金沢工業大学

##### 【目的】

温熱刺激は副交感神経の活動を促進することでリラックス感をもたらす働きがあると報告されている。眼の温熱刺激は、眼精疲労に効果的であると言われている。感覚に対する反応は高齢者で低下すると言われているため、この反応は年齢によっても違いがあると考えられる。そこで、今回、成人に加え、高齢者を対象に、眼への温熱刺激に対する反応を主観的評価とともにRR間隔から自律神経反応を解析し、検討した。

##### 【研究方法】

健康成人男女8名(年齢22.6歳)及び地域で生活している高齢者男女15名(年齢67.3歳)を被験者として、眼に温熱刺激をする温罨法条件と温熱刺激をしないコントロール条件の2つの実験を別の日に行った。温熱刺激は、蒸気ホットアイマスク(めぐりズム, 花王)を用いた。実験は、室温25~26.7℃, 湿度54~67%の環境下の実験室で行った。対象は、心電図を測定する心拍モニター(Polar RS800Cx)を胸部に装着した。測定は仰臥位とし、10分間の安静後、温罨法条件ではホットアイマスクを、コントロール条件ではアイマスクを眼に貼用し、10分間、この状態を維持した。その後、ホットアイマスクもしくはアイマスクを除去し、15分間そのままを臥床した。主観的評価の測定は、安静状態開始から5分毎に測定した。主観的評価は、覚醒度、快不快及び温度感覚について視覚的アナログ尺度を用いて測定した。自律神経系の解析は自律神経系の活性をSDNN, 副交感神経系指標をrMSSD, ローレンツプロット法を用いて交感神経系の指標をL/T, 副交感神経系の指標をLogL×Tとした。

##### 【倫理的配慮】

対象には研究目的や方法について書面にて説明を行い、同意が得られたものを対象とした。この研究は所属の倫理委員会の承認を得て行った。

##### 【結果】

高齢者のRR間隔は両条件ともに時間経過に伴って延長し、コントロール条件の方が温罨法条件よりも高く推移したものの、両者に差は認められなかった。若年者のRR間隔は両条件ともにホットアイマスク及びアイマスク貼用で延長が見られたが、除去後に一旦、短縮し、その後再び延長した。高齢者のL/Tは温罨法条件で貼用時減少したが、コントロール条件では罨法後、安静状態より約20%高くなった。若年者では温罨法条件で約10%の増加が見られた。快不快は高齢者と若年者ともに温罨法条件で貼用により快の方向へ傾いた。全身の温度感覚は高齢者では両条件で貼用中に暖かく感じ、若年者は温罨法条件で暖かく感じ、コントロール条件では変化が認められなかった。

##### 【考察】

RR間隔及び自律神経系の反応において高齢者と若年者で違いが見られた。主観的評価に関してはほぼ同様の反応を示したが、変化の程度に違いが認められた。

#### 145) ドレーン・チューブ固定のための看護ケアアルゴリズムの開発 -看護師のアセスメントに焦点をあてて-

○唐津ふさ<sup>1</sup>, 杉田久子<sup>1</sup>, 西村歌織<sup>1</sup>, 黒川藤美<sup>2</sup>

<sup>1</sup>北海道医療大学看護福祉学部看護学科,

<sup>2</sup>株式会社アルケア

##### 【目的】

本研究はドレーン・チューブ固定のための看護ケアアルゴリズムを開発することをめざした研究の一部である。今回は、ドレーン・チューブ挿入部位を固定するに至る看護師のアセスメントの視点を明らかにすることを目的とした。

##### 【研究方法】

研究参加者: 看護師として施設勤務経験のある大学院生5名

研究期間: 平成24年8月

データ収集・分析方法: 胃チューブ, 胸腔ドレーン, 腹腔ドレーン, 尿管カテーテルそれぞれを挿入したモデル人形に対して、テープ固定のための物品選択から固定終了までの、手技・動作・固定方法の参加観察を行い、終了後にアセスメントの視点に焦点をあててインタビューを実施した。それぞれフィールドノート, 逐語録を作成し、質的帰納的に内容を分析した。

倫理的配慮: 研究代表者の所属大学倫理委員会の承認を得た。また、参加者へは文書と口頭にて説明を行い、承諾を得た。

##### 【結果】

参加者の背景: 女性5名で、年齢は30~48歳(平均40.6歳)、臨床経験年数は7.5~22年(平均15.7年)であった。

分析結果: “ドレーン・チューブの抜去を防ぐ”ことに着目し、皮膚の状態、体動の程度や認知機能にアセスメントの視点をあて、テープの選択や固定方法の検討につなげていた。また、“皮膚への負担を避ける”ことに着目し、今後の挿入期間を見通しに視点をあて、長期に渡る場合は確実に固定する方法を選択していた。その一方で、皮膚や粘膜を保護するための方法も視野に入れながら固定方法を決定していた。更に抜去を防ぐだけでなく、“挿入中の安楽さを確保する”ことに着目し、患者の下着の着方や好み、ドレーン・チューブが不必要に動いて不快にならないような視点から、固定方法を選択していた。すべてのアセスメントの視点の根拠は、それぞれの参加者がこれまでに経験した患者の状況や病棟の文化などによって確立されていた。

##### 【考察】

治療目的の達成のために、抜去しないような固定をするためのアセスメントの視点をもつ一方で、皮膚への負担や患者の違和感の軽減をはかり、挿入中の患者の安楽さを保持できるように視点をもつなど、治療と患者の生活の両側面にアセスメントの視点をおいていた。ドレーン・チューブ挿入部位によるアセスメントの視点に相違はないが、そこからアセスメントをどのように発展させていくかには、挿入部位の特性のみならず、個人の経験による影響が大きかった。以上のことから、アセスメントの多くは経験則に基づくものであり、ドレーン・チューブ固定のためのケアが共有化・可視化されにくい現状が伺えた。

今後、データ数を重ね、アセスメントの視点のアイテムプールを増やし、アルゴリズムの開発につなげたい。



## 146) 手の加温が高齢者の睡眠へ与える影響の検討

○岩根直美<sup>1</sup>, 水田真由美<sup>1</sup>, 鹿村眞理子<sup>1</sup>, 前田祥子<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>和歌山県立医科大学保健看護学部

### 【目的】

高齢者の睡眠を促す技術として、就寝前の手の加温の有効性について客観的評価を用いて明らかにする。

### 【研究方法】

対象者は本研究に同意し、不眠がなく末梢循環障害がない女性高齢者5名。研究時期は2013年1月～2013年2月、住環境は室温 $20 \pm 3$ ℃、湿度30～40%で対象は全て生活支援施設に入居している。測定はアクチグラム（米国AMI社製）を非利き手に装着した。加温を行う日と手の加温しない日の各3日間を行い、クロスオーバーデザインでデータ収集した。アクチグラムでは夜間睡眠時間、睡眠効率、入眠潜時、中途覚醒を測定し、効果判定は、加温の有無により比較した。手の加温方法は前腕部にめぐりズム蒸気の温熱シート<sup>®</sup>（花王社製品）を30分間使い、就寝前2時間の19時～20時の時間帯に実施した。加温用具は対象者へ装着する前、40℃に加温した条件を確認して使用した。倫理的配慮として、A大学倫理委員会の承認を得た。対象者には研究目的と方法、個人情報保護および研究参加の自由などについて文書と口頭で説明し、同意を得た。

### 【結果】

対象者の平均年齢 $86 \pm 9$ 歳であった。アクチグラムによる夜間の睡眠時間は手の加温なしでは $244.9 \pm 152.1$ 分である。手の加温ありでは $279.2 \pm 111.2$ 分と手の加温ありの方が手の加温なしより夜間の睡眠時間が延長している。睡眠効率では、手の加温なしは $84.9 \pm 6.2\%$ 、手の加温ありは $87.8 \pm 6.5\%$ であり、手の加温ありの方が手の加温なしより睡眠効率が上昇している。入眠潜時では、手の加温なしは $60.4 \pm 45.9$ 分、手の加温ありは $54.6 \pm 45$ 分であり、手の加温ありの方が手の加温なしより入眠するまでの時間が短縮されている。中途覚醒では、手の加温なしは $10 \pm 7.9$ 回、手の加温ありは $7.9 \pm 3.9$ 回であり、手の加温ありの方が手の加温なしより中途覚醒回数は減少している。全ての項目で有意差は認めていないが、高齢者全員において、入眠にかかるまでの時間である入眠潜時が短縮しており、個人差はなかった。

### 【考察】

本研究では、夜間の睡眠時間、睡眠効率、中途覚醒には、高齢者の手の加温が良眠な効果をもたらす結果ではなかった。しかし、5人のうち睡眠時間が約3倍以上に増えた高齢者も存在した。この結果から、手の加温は何らかの条件を満たす高齢者には効果的であることが考えられる。また、入眠潜時では高齢者全員が時間短縮した結果であり、対象者を増やすことで入眠効果を明らかにすることができる。本研究は文部科学省科学研究費基盤研究(c)の助成を受けた研究の一部である(課題番号23593462)。

## 147) 臨床看護師との協働による看護技術教育の評価

○竹下美恵子<sup>1</sup>, 滝内隆子<sup>1</sup>, 小松妙子<sup>1</sup>, 岡本千尋<sup>1</sup>, 渡邊郁子<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>岐阜大学医学部看護学科

### 【目的】

A大学基礎看護学分野では、平成22年度よりA大学医学部付属病院臨床看護師との協働による看護技術教育を実施している。目的は看護実践能力の教育と臨床との乖離を改善し、学生が看護技術の原理・原則の修得に加えて臨床での看護技術の適用場面・患者への配慮等を学習することである。臨床看護師との協働による看護技術教育の実践報告及びその評価に関する研究は少ない。本研究は、臨床看護師との協働による看護技術教育の評価を行うことを目的とする。

### 【研究方法】

対象：平成24年度前学期に基礎看護技術を受講したA大学医学部看護学科2年生77名。調査期間・方法：平成24年7月に自己記入式質問紙調査を実施。内容：『授業開始時の臨床看護師の自己紹介』3項目、『看護技術の指導』8項目、『授業終了前の臨床看護師との振り返り』4項目の計15項目を「そう思う：4」から「全くそう思わない：1」の4段階で回答を求めた。分析方法：単純集計。

### 【倫理的配慮】

研究の目的、研究協力は自由意思で、協力しない場合、学業等不利益はない等を書面と口頭で説明し書面により同意を得た。

### 【結果】

回収率100%。『授業開始時の臨床看護師の自己紹介』の3項目（「看護技術の臨床における適応場面の理解の深まり」[看護技術の実施に伴う患者への配慮の理解の深まり] [初対面による緊張感の軽減]）は、「そう思う」「少しそう思う」の割合が約90%であった。『看護技術の指導』8項目のうち「看護技術の患者への配慮についての理解の深まり」[看護技術の工夫・コツについて理解の深まり] [看護技術の上達のポイントの理解の深まり]等5項目は、「そう思う」「少しそう思う」の割合が93%以上であった。一方、「教員と臨床看護師の指導内容の違いに迷う」[毎回臨床看護師が変わることへの緊張]の2項目は、「そう思う」「少しそう思う」の割合は順に55.9%、39.0%であった。『授業終了前の臨床看護師との振り返り』4項目のうち「看護技術の工夫・コツについての疑問解決」[看護技術の患者への配慮についての疑問解決]等3項目は「そう思う」「少しそう思う」の割合が84%以上であった。

### 【考察】

教育の目的である看護技術の臨床での適応場面、患者への配慮等を学習することは、これらの項目の理解が深まった者の割合が高かったことより効果があったと評価できる。これは、最初に臨床看護師が学生に自己紹介する際、演習予定の看護技術に焦点をあてて臨床での適用場面（対象、配慮・工夫）を学生がイメージできるよう具体的に説明していること、引き続き小グループに別れて学生と臨床看護師が直接、意見交換できる時間を設けていること、演習終了前にも小グループ別に学生が演習内容を振り返って疑問や上手にできるコツ等を、直接質問できる時間を設けていることなどが影響していると考えられる。

148) 看護技術の学内演習に臨床看護師が参加する成果・課題 - 2003~2012年の文献を通して -

○小西真人<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 岐阜大学大学院医学系研究科看護学専攻

【目的】

看護技術の学内演習に臨床看護師が参加することは、学生の看護技術修得の向上、実習に取り組みやすくなるなどの効果があることが「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書」(厚生労働省, 2011)に提示されている。そこで、文献をとおして看護技術の学内演習に臨床看護師が参加する成果・課題を明らかにする。

【研究方法】

1. 分析対象文献の抽出『医中誌WebVer.5』を検索ツール、検索期間を2003~2012年とし、「看護」・「基礎」・「教育」・「協働」・「連携」・「協力」をキーワードとして検索し、本研究のテーマと関係の深い文献を10件抽出した。2. 分析方法10件の分析対象文献から看護技術の学内演習に臨床看護師が参加する成果と課題を学生、臨床看護師別に一文章一意味内容を1コードとして抽出する。次に類似したコードのカテゴリー化を行い、命名した。なお、コードの抽出及びカテゴリーの内容妥当性はスーパーバイズを受けて担保した。

【結果】

10件の分析対象文献から、学生への成果・課題として153件のコードが抽出され9カテゴリー・17サブカテゴリーに分類できた。また臨床看護師への成果・課題として83件のコードが抽出され6カテゴリー・19サブカテゴリーに分類できた。(表1参照)

【考察】

学内演習に臨床看護師が参加することは臨床体験を活かした技術指導に伴う成果がある一方で、面識のない人が指導することに伴う学生の緊張などが課題として指摘されており、学生には過度な緊張を与えないよう演習の準備や展開を工夫する必要があることが示唆された。また臨床看護師は学内演習に参加することで看護技術や看護技術の内容や指導内容・方法についての学びがある一方で、学生への指導内容・方法に不安を感じる事が課題として指摘されており、事前の打ち合わせや学内演習時の臨床看護師への配慮などが必要であることが示唆された。

表1 臨床看護師が参加する看護技術の学内演習の成果・課題

		カテゴリー	サブカテゴリー
学 生	成 果	看護技術の修得 (45)	臨床を踏まえた看護技術の学び (41) アドバイスに基づいた看護技術の適用 (4)
		実習への安心・期待・学び (19)	実習指導者とのコミュニケーション (9)
			実習指導者との関わりによる安心感 (6)
			実習で活用できる学び (2)
			実習への期待 (2)
		臨床看護師の丁寧・優しい指導 (16)	臨床看護師の丁寧な指導 (12) 臨床看護師の優しい指導 (4)
		充実した演習 (15)	演習の満足感 (10) 臨床看護師の参加による良い緊張感 (5)
		患者との関わり方の理解 (13)	患者との関わり方の理解 (13)
		学習意欲の向上 (8)	学習意欲の向上 (8)
		臨床の状況の理解 (8)	臨床の状況の理解 (8)
	(132) その他 (8)	その他 (8)	
	課 題	臨床看護師の参加による演習への不満 (21)	演習展開への不満 (10) 臨床看護師に対する強い緊張感 (6) 臨床看護師への不満 (5)
		(153) (21)	
臨 床 護 士	成 果	看護技術、指導方法・内容の学び (30)	看護技術の指導方法の学び (11) 実習指導に活かせる指導経験の学び (8) 看護技術の指導内容の学び (4) 看護技術の基本の学び (4) 後輩指導に活かせる指導経験の学び (3)
		学生の理解・期待 (22)	学生の技術力の理解 (7)
			学生への期待感 (5)
			学生の授業態度の理解 (4)
			学生の知識の程度の理解 (3)
			学生の緊張感の理解 (3)
		自分自身の振り返りの機会 (7)	自分自身の振り返りの機会 (7)
		教員・学生との連携の促進 (5)	教員との連携の促進 (3) 臨床・学校間の連携の促進 (1) 学生とのコミュニケーションの促進 (1)
			(70) その他 (6)
		課 題	参加したことでの不安・不満 (13)
	(83) (13)		

149) 生理指標測定による安楽な病室環境に関する検討

○渡邊生恵<sup>1</sup>, 杉山敏子<sup>2</sup>, 河村真人<sup>2</sup>, 菅原尚美<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 東北大学看護教育・管理学分野,

<sup>2</sup> 東北福祉大学保健看護学科

【目的】

同室内に他者のいる環境で更衣を行う際の対人距離、年齢と生理指標の関連を明らかにする。

【方法】

対象は男性20歳代4名, 30-40歳代6名, 女性20歳代7名, 30-40歳代3名であった。2床室を再現した部屋(図)にて、対象者と他者間の異なる対人距離における、更衣時の心拍数、自律神経活動、血圧を測定・解析した。対象者の左前胸部に心電計を装着し、心拍変動の周波数解析を行い低周波成分(以下, LF)、高周波成分(以下, HF)を抽出し、HFを副交感神経活動の指標として、LF/HFを交感神経活動の指標として用いた。対人距離は、カーテンを境界とし、A=50cm, B・C=200cm, D=350cmとした。更衣はいすに座りもう1枚のパジャマの上着への着替えとし、各距離における更衣を更衣距離A~Dとした。また同距離における安静時を安静距離A~Dとした。A~Dの順番はカウンターバランスを図った。6分の測定前安静後、A~Dにおける5分間の安静と5分間の更衣をくり返した。心拍数、HF、LF/HFについて安静および更衣開始後3分間の平均値と更衣動作直後の血圧値を従属変数とし、男女別に距離、年齢の2要因分散分析を行った。なお本研究は東北大学大学院医学系研究科の倫理審査委員会の承認を得て倫理的に配慮し実施した。

【結果および考察】

心拍数では、男性で年齢と更衣距離に交互作用がみられ、更衣距離による心拍数の変化は年齢により違う可能性が示された。男性の拡張期血圧では、年齢、更衣距離に主効果がみられ、30-40歳代で高値であり、また距離AではCよりも高値であった。女性では、更衣時の心拍数、収縮期、拡張期血圧において年齢の主効果がみられ、年齢による生理的な差異と考えられた。

本研究は文科省科研費(若手研究B, K021792167)による成果である。

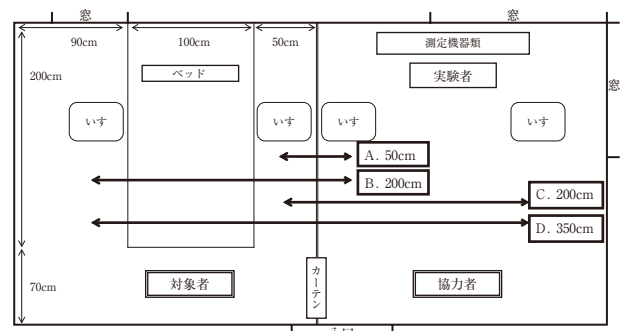


図. 実験環境(広さ12.7㎡, このうち対象者側は6.5㎡)

## 150) 研修前看護師の移乗介助に使用する補助具に関する認識状況

○西田直子<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 京都府立医科大学医学部看護学科

### 【目的】

看護師の腰痛予防に関する調査の結果、身体的につらい作業で一番多いのが移乗介助であった。そこで、腰痛予防のための出前研修会前の看護師の移乗介助に使用する補助具の認識を調査した。

### 【方法】

対象者は、A病院の看護師で研修会に参加した脳外科病棟、整形外科病棟、混合内科病棟の39名、勤務年数平均は12.4±11.7であった。調査項目は、『抱え上げない介助』『ノーリフティング』、各補助具の認知を3件法、認識を4件法で尋ねた。分析はSPSSVer.16を用いて単純集計した。倫理的配慮は、本学の倫理審査委員会の承認を得、情報管理に配慮した。

### 【結果】

“〈抱え上げない介助〉〈ノーリフティング〉の言葉を聞いたことがあるか”では“初めて聞いた”73.7%，“スライディングシートを知っているか”では“見たことがない”51.3%，“スライディングボードを知っているか”では“見たことがない”38.9%，“リフトを知っているか”では“見たことがない”26.5%であった。“スライディングシート”において〈強く思う・やや思う〉が“早く導入して欲しい”で92.1%，“腰の負担を減らせると思う”97.4%，“患者様も楽になると思う”89.4%，“患者さんの褥創予防につながる”68.4%，“ケアにゆとりができる”81.6%，“使い方が難しい”34.2%，“手間や時間がかかる”23.7%，“患者様に危険がないか”49.4%であった。“スライディングボード”において“早く導入して欲しい”91.6%，“腰の負担を減らせると思う”91.9%，“腰の負担を減らせると思う”で83.8%，“患者さんの褥創予防につながる”で62.2%，“ケアにゆとりができる”で72.0%，“使い方が難しい”で58.6%，“手間や時間がかかる”27.0%，“患者様に危険がないか”45.9%であった。“介護用リフト”において“早く導入して欲しい”で61.8%，“腰の負担を減らせると思う”で88.2%，“患者様も楽になると思う”で85.3%，“患者さんの褥創予防につながる”で61.8%，“ケアにゆとりができる”で64.7%，“使い方が難しい”で76.4%，“手間や時間がかかる”70.6%，“患者様に危険がないか”82.3%，“患者様同意が得られるか心配”50.0%，“いいのか悪いのかよくわからない”65.7%であった。

### 【考察】

移乗介助時の補助具において“スライディングシート”“スライディングボード”“介護用リフト”では“腰の負担を減らせると思う”“患者様も楽になると思う”“患者さんの褥創予防につながる”など肯定的認識が高いが，“介護用リフト”では“使い方が難しい”“いいのか悪いのかよくわからない”が高かった。病院で働く看護師では“介護用リフト”に関する否定的な認識が高いと考える。

## 151) 成人女性における背部タクティールマッサージの生理学的・心理学的効果

○藤田佳子<sup>1</sup>、木内千晶<sup>2</sup>、阿部由香<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 三重県立看護大学、<sup>2</sup> 日本保健医療大学

### 【目的】

健康な成人女性を対象に背部マッサージを行い、生理学的・心理学的にどのような効果があるのかを明らかにする。

### 【研究方法】

期間は平成24年8月～12月。対象者は健康な20歳以上の成人女性で、クロスオーバー試験を用い、コントロール群とマッサージ介入群に分類した。実験環境は温度・湿度を一定に保った実験室を使用し、音楽を流した。対象は同一の寝衣を着用し（背部を露出シズボン着用した状態）、ベッド上で安楽な腹臥位を保持してもらった。

介入群には次の手順で実施した。実験開始前は10分間安静を保持し、その後背部にタクティールマッサージを10分間実施（100～200mmHgの圧力で背中全面を軽擦）する。終了後は20分間安静を保持する。コントロール群は腹臥位になり音楽のみを聴取する。

測定は、生理学的側面（10分毎に体温、心拍、血圧、呼吸数、SPO<sub>2</sub>）、心理的側面（マッサージ介入前後でPOMS短縮版、日本語版Brief Fatigue Inventory（以下BFIと記す））について調査した。解析は群間比較、群内比較を用い分析した。なお、実験に際し所属大学の倫理審査委員会の承認を得ている。

### 【結果】

対象者の平均年齢は21.1歳であった。

#### 1) コントロール群とマッサージ介入群の群間比較

体温、心拍、血圧、呼吸数に有意差はなかったが、SPO<sub>2</sub>は介入群においてマッサージ終了後20分で有意に上昇した（ $p < .05$ ）。心理学的変化については両群で有意差はなかった。

#### 2) コントロール群内の比較

生理学的変化について比較した結果、音楽前を基準として音楽直後、音楽終了後10分、音楽終了後20分で全項目において有意差はなかった。しかし、心理学的変化の比較では、POMS短縮版のうち緊張-不安、抑うつ、疲労感、混乱の項目とBFIが音楽後に有意に減少した（ $p < .05$ ）。

#### 3) マッサージ介入群内の比較

生理学的変化について比較した結果、体温、血圧、心拍数、呼吸数において有意差はなかった。しかし、SPO<sub>2</sub>は、マッサージ直前と比較して、マッサージ直後、マッサージ終了後20分で有意に上昇した（ $p < .05$ ）。心理学的変化の比較では、POMS短縮版のうち緊張-不安、敵意-怒り、疲労感、混乱の項目とBFIがマッサージ後に有意に減少した（ $p < .05$ ）。

### 【考察】

成人女性への背部マッサージの生理学的効果は、呼吸補助筋の筋緊張が緩和し胸郭が拡張しやすくなり、1回換気量が上昇したといえる。心理学的効果は、緊張-不安、疲労感、混乱といったネガティブな感情を軽減し、倦怠感を軽減することが明らかになった。

## 152) 助産師の卒後教育に関する調査報告

○山内まゆみ<sup>1</sup>, 伊藤幸子<sup>2</sup><sup>1</sup>札幌市立大学看護学部, <sup>2</sup>旭川医科大学医学部看護学科

## 【目的】

助産師の卒後教育充実を目的に、北海道・東北圏助産施設における助産師に対する卒後教育状況を基礎調査した。

## 【研究方法】

対象施設は北海道・東北圏の助産施設591施設（北海道：131, 東北圏：460）であった。調査時期はH24年度11月で、調査方法は調査協力の有無回答用返信はがきによる。調査項目は助産師総数と経験10年目までの助産師数、助産師から看護師への役割交替の有無、助産師の卒後教育システム状況、看護系大学に期待する卒後教育であった。倫理的配慮は、事前に札幌市立大学の倫理審査を受けた。

## 【結果】

郵送数591施設（病院：490, 助産所：101）で、返信は227施設（病院：194, 助産所：33）からあり、回収率38.4%であった。有効回答は設問に記載があった112施設、有効回答率49.3%であった。助産師総数1,436名、10年目までの助産師数は540名（37.6%）、そのうち助産所勤務者は11名で10年目までの者は3名であった。助産師から看護師への役割交代があるかの回答は、1）意図的にある：21, 2）ない：48, 3）本人の希望時のみ実施：13, 4）その他：17の施設数であった。卒後教育システムについての設問では、1）助産師のみで実施：5, 2）看護師とともに実施：59, 3）特別な卒後教育はない：24, 4）必要ない：1, 5）その他：5の施設数であった。また、16施設が看護系大学に期待する卒後教育を記述し、その内容から、看護実践能力の向上、知識・技術の向上等、11カテゴリーが抽出できた。

## 【考察】

キャリア構築には、知識・スキルの獲得という点から特定領域10年の活動が重要とされ、助産師業務が継続できる環境の保障は重要である。助産師業務継続可能な環境と推測できる施設は、看護師への役割交替がなく、希望時は役割交替ができる施設と推察でき、約54%が相当した。卒後教育システムの状況は、助産師の卒後教育がある施設が4%にとどまり、50%以上の施設が看護師と共に卒後教育を実施する状況であった。卒後教育が設定されていない等の施設割合も22%を占めたことから、卒後教育における施設の考え方にばらつきがあることも分かった。H23年2月に「新人看護職員ガイドライン」(厚労省)が示されたが、助産師の卒後教育整備は課題である。看護系大学に期待する卒後教育は、知識や技術面などすぐに支援可能な事項から、臨床と共同で卒後教育プログラムを開発すべき看護実践能力・応用力といった事項に及ぶことも把握できた。今後は臨床助産師の業務実態の調査を進め、卒後教育を受講する当事者の希望を加味した看護系大学が支援できる卒後教育プログラムの開発を推進する。本研究はH23年度科学研究費助成事業基盤研究(c)(課題番号：23593302)の一部である。

## 153) 看護系短期大学生の3年間の情動知能の変化

○中島正世<sup>1</sup>, 金子直美<sup>1</sup>, 長嶋祐子<sup>1</sup><sup>1</sup>横浜創英大学

## 【目的】

看護系短期大学生の3年間の情動知能の変化を明らかにする。

## 【方法】

対象者は、短期大学の看護学科学生54名中、3年間通して回答の得られた37名(68.52%)で女性31名、男性6名である。調査方法は、年次毎に情動知能の尺度として内山ら<sup>1)</sup>が標準化したEQS (Emotional Intelligence Scale: 情動知能尺度: 以下EQS略す)を自記式質問紙法で調査した。EQSは、自己対応、対人対応、状況対応の3領域、9つの対応因子、計65項目を用い、各項目を5段階評定法(全くあてはまらない~非常によくあてはまる: 0-4点)で求め、対応因子と領域を得点化して分析した。分析は、統計ソフトSPSS11.0で基本統計と3年間の情動知能の変化をFriedman検定後、差が有意な項目をWilcoxon検定後、Bonferroniの調整を行った。倫理的配慮は、A短期大学倫理審査会で承認を得て、個人のプライバシーの厳守、研究のデータや結果を研究目的以外で使用しないこと、結果を論文で公表することを説明し、同意を得た。

## 【結果】

EQS 3領域の1年次~3年次の平均値は、対人対応得点が高く、2年次に3領域が上昇し、3年次に1年次よりもやや下降した。しかし、3領域での変化は、有意な差が認められなかった( $p=ns$ )。EQSの9つの対応因子中、Cronbachの $\alpha$ 係数が0.7以上で内的整合性が認められた5項目“自己動機づけ”、“共感性”、“愛他心”、“対人コントロール”、“リーダーシップ”の3年間の変化をみた。その結果、愛他心( $\chi^2=7.72, df=2, p<.05$ )は1年次から2年次に上昇し、3年次に有意に下降した( $Z=2.54, p<.05$ )。リーダーシップ( $\chi^2=6.21, df=2, p<.05$ )は、1年次から2年次にかけて有意の上昇し( $Z=2.95, p<.05$ )、3年次に下降した。

## 【考察】

情動知能の3領域での年次差がなかったのは、筆者の先行結果<sup>2)</sup>のEQSの1年次から2年次の変化で個人の増減が大きく、集団として差がなかった結果と同様であった。個人の変動が激しいのは、大学生文化の特質の青年の傷つきやすい感受性や正義感からくる社会適応の困難や意義申し立て、傷の共有からつくられる反抗・対抗文化という特質<sup>3)</sup>が情動知能の増減に影響していると考えられる。対応因子の“愛他心”が、2年次から3年次に下降したのは、2年次の臨床実習後で他者を思いやる気持ちと看護師を目指した義務感から他者への関心期が、3年次に1年間の長い領域実習を終えて、看護師国家試験を目前とし、自己への関心期へと変遷したことが影響している。また、“リーダーシップ”で1年次から2年次に上昇したのは、先行結果<sup>2)</sup>と同じであった。

## 【引用文献】

1) 内山, 他, EQSマニュアル, 実務出版, (2001). 2) 中島, 他, 第42回日本看護学会論文集, 看護教育, p 3-6, (2012). 3) 江川, 他, 最新教育キーワード, 時事通信社, p276 (2009).

154) 基礎看護学実習の看護学生の睡眠時間および人間関係、実習記録の負担感の現状

○澤田和美<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 横浜創英大学看護学部看護学科

【目的】

基礎看護学実習の看護学生に影響を与える睡眠時間および人間関係と実習記録の負担の現状を明らかにすることを目的とした。

【研究方法】

対象者：研究の同意を得られたA短期大学生1年生35名。実習方法：2週間で患者を1人受け持ち看護過程展開と日常生活援助を実施。測定項目と方法：1. 睡眠時間, 2. 実習での負担感 1) 患者との関係 2) 指導者との関係 3) グループメンバーとの関係 4) 記録に関する主観的な負担感をVASスケールにより測定。分析方法：1. 睡眠時間, 各負担感の平均値算出, 一元配置分析と多重比較 2. 睡眠時間および各負担感の相関関係 (ピアソンの相関係数)

【倫理的配慮】

学生には個人の匿名性を確保し, 学生個人に何らの不利益もないことを口頭と文書で説明。

【結果】

1. 睡眠時間および各負担感の比較 睡眠時間の平均値は4.89時間で, 10日間の平均値に有意差はなかった。患者との関係の負担感平均値は28.9mmであった。最高値は初日の46.5mm, 最低値は最終日の10日目の20.0mmで, 初日は最終日と比較して有意に高かった ( $p < .05$ )。指導者との関係の負担感平均値は32.8mmであった。最高値は実習2日目の37.4mm, 最低値は8日目の30.8mmであり10日間で有意な差はなかった。グループメンバーとの関係の負担感平均値は18.1mmであった。最高値は実習初日の23.6mmで最低値は5日目の14.7mmであった。実習期間中で有意な差はなかった。記録の負担感の平均値は74.0mmで最高値は実習8日目の80.9mmであった。最低値は初日の63.6mm, 実習中で有意差はなかった。2) 実習中の人間関係および記録の負担感の差 記録の負担感が74.0mmと一番高く, 患者, 指導者, グループメンバーとの関係の負担感と比較してすべてで有意に高かった ( $p < .01$ )。実習で関わる人との関係性では, グループメンバーとの関係の負担感が18.0mmと最も低く, 患者, 指導者との関係の負担感と比較して有意に低かった ( $p < .01$ )。患者との関係と指導者との関係の負担感の間には統計的に有意差はなかった。

2. 睡眠時間と各負担感との関係 睡眠時間と記録負担感との間に相関関係はなかった。患者との関係と指導者との関係, グループメンバーとの関係の負担感の間に比較的強い相関があった ( $r = .65, .62; p < .01$ )。指導者との関係とグループメンバーとの関係の負担感の間にも強い相関があった ( $r = .68, p < .01$ )。指導者との関係, 記録の負担感との間に弱めの相関関係があった ( $r = .32, p < .01$ )。

【考察】

基礎看護学実習では記録の負担感が大きく, 睡眠時間の長短より, 指導者が影響する傾向が明らかになった。初日で患者との関係に負担感が高いが実習の進行とともに負担感が軽減することが明らかになった。患者, 指導者メンバーなど人間関係は実習の経過とともに低下する共通の傾向が示唆された。

155) 看護学生1年次と2年次の職業アイデンティティの変化

○松浦江美<sup>1</sup>, 堀川新二<sup>1</sup>, 中村真理子<sup>2</sup>, 藤野裕子<sup>3</sup>, 藤本裕二<sup>4</sup>, 楠葉洋子<sup>5</sup>

<sup>1</sup> 活水女子大学看護学部看護学科, <sup>2</sup> 福岡女学院看護大学看護学部看護学科, <sup>3</sup> 長崎県立大学看護栄養学部看護学科, <sup>4</sup> 佐賀大学医学部看護学科, <sup>5</sup> 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科

【はじめに】

看護師のキャリア発達において, 自らの職業とどう取り組むかという職業的アイデンティティの獲得は重要であり, 学生時代からの支援の必要性が指摘されている。我々は, これまで職業モデルがいる学生ほど職業アイデンティティが有意に高いことを明らかにした。そこで本研究は, 1年次と2年次の職業アイデンティティの変化を明らかにすることを目的とした。

【方法】

6つの看護大学生1年次444名, 2年次280名を対象に質問紙調査を行った。うち, 男性と23歳以上を除く1年次377名 (有効回答率84.9%), 2年次228名 (有効回答率81.4%) を分析対象とした。調査項目は, 1. 基本的属性項目: 年齢, 職業モデルの存在 2. 職業アイデンティティ: 藤井ら (2002) の医療系大学生用職業的アイデンティティ尺度 (4因子32項目7件法) を使用した。対象学生に研究の趣旨および方法, 研究参加の任意性や拒否・中断は学業成績と一切関係なく, 不利益を被らないことを説明した。調査票は無記名とし, 個人の特ができないこと, 研究以外の目的では使用しないことを文書および口頭で説明した。A大学の倫理委員会の承諾を得て実施した。

【結果】

対象者の属性は, 1年次の平均年齢は18.9歳, 2年次の平均年齢は19.8歳であった。職業アイデンティティの平均値は, 2年次の方が有意に高かった。また, 下位尺度平均値では職業モデルありがすべての項目で有意に高かった。(表1参照)

【考察】

2年次は専門分野の学習が多くなってくため, 職業アイデンティティが高まったと考えられる。また, 看護学生の職業アイデンティティ形成のためには, 職業モデルの存在を意識した教育の重要性が示唆された。

表1. 職業モデルの有無による学年別職業アイデンティティ

	平均値		医療職の選択と成長への自身 P		医療職観の確立 P		医療職としての自負 P		社会への貢献の志向 P		
	モデルあり	モデルなし	モデルあり	モデルなし	モデルあり	モデルなし	モデルあり	モデルなし	モデルあり	モデルなし	
1年次 (N=337)	4.42	4.97	4.54 **	5.08	4.62 **	4.69	4.16 **	4.59	4.26 *	5.65	5.32 *
2年次 (N=228)	4.71	4.75	4.09 **	4.81	4.22 **	4.40	3.74 **	4.51	3.75 **	5.45	4.82 **

† 独立したサンプルのt検定 \* $p < 0.01$  \*\* $p < 0.001$   
 † 対応のあるサンプルのt検定 † $p < 0.001$

## 156) 看護大学2年生の職業モデルと職業アイデンティティの関連

○藤野裕子<sup>1</sup>, 楠葉洋子<sup>2</sup>, 松浦江美<sup>3</sup>, 堀川新二<sup>3</sup>,  
藤本裕二<sup>4</sup>, 中村真理子<sup>5</sup>

<sup>1</sup>長崎県立大学看護栄養学部看護学科, <sup>2</sup>長崎大学大学院  
医歯薬学総合研究科, <sup>3</sup>活水女子大学看護学部看護学科,  
<sup>4</sup>佐賀大学医学部看護学科, <sup>5</sup>福岡女学院看護大学看護学  
部看護学科

### 【はじめに】

看護専門職には職業アイデンティティの確立が重要で、看護基礎教育の時から職業アイデンティティの確立を目指した教育が必要である。我々は、看護大学入学後の1年生を対象とした先行調査で、職業モデルや家族の看護経験がある学生の方が職業アイデンティティが高いことを明らかにした。そこで、本研究では看護大学入学後1年を経た2年次生を対象として、職業モデルの実態を調査し、職業アイデンティティとの関連を明らかにした。

### 【方法】

6つの大学の看護学生(2年生)228名(有効回答率81.4%)を対象に質問紙調査を行った。男性と23歳以上を除外した。調査項目は、年齢・職業モデルの存在と内訳・家族への看護経験・医療系大学生用職業的アイデンティティ尺度(藤井ら, 2002: 4因子32項目7件法)を使用した。対象学生に研究の趣旨および方法、参加の任意性や拒否・中断は学業成績と一切関係なく、不利益を被らないことを説明した。調査票は無記名とし、個人を特定しないこと、研究以外の目的では使用しないこと、結果の公表等について文書および口頭で説明した。A大学の倫理委員会の承諾を得て実施した。

### 【結果】

対象者の平均年齢(SD)は19.8(0.5)で、職業モデルがある人107名(45.1%)、家族への看護経験がある人103名(43.5%)であった。職業モデルがある人の内訳として、多い順に家族・親類が65人(37.6%)、実習先看護職が30人(17.3%)、実習以外の看護職20人(11.6%)、実習指導教員18人(10.4%)、メディア・書籍18人(10.4%)等であった。職業アイデンティティ合計平均点(SD)は141.4(30.8)点で、職業モデル有無別の平均点は順に152.4(26.5)点、131.0(31.0)点で有意な差があった( $p < 0.001$ ,  $t$ 検定)。家族・親類がモデルの職業アイデンティティ平均点(SD)は148.7(24.7)点で、それ以外の人は157.1(28.3)点であった( $p = 0.09$ )。

### 【考察】

看護学生2年生にとって職業モデルの存在は、職業アイデンティティに影響していることが明らかになった。最も多い職業モデルは家族・親類であったが、それ以外の方がモデルの学生と比べて職業アイデンティティ得点が低い傾向が見られ、臨床教育を含めた学習体験におけるモデルの存在の方が、職業アイデンティティに影響することが示唆された。

## 157) 看護大学2年生の志望動機と職業アイデンティティの関連

○堀川新二<sup>1</sup>, 楠葉洋子<sup>2</sup>, 藤野裕子<sup>3</sup>, 中村真理子<sup>4</sup>,  
藤本裕二<sup>5</sup>, 松浦江美<sup>1</sup>

<sup>1</sup>活水女子大学看護学部看護学科, <sup>2</sup>長崎大学大学院医歯  
薬学総合研究科, <sup>3</sup>長崎県立大学看護栄養学部看護学科,  
<sup>4</sup>福岡女学院看護大学看護学部看護学科, <sup>5</sup>佐賀大学医学  
部看護学科

### 【はじめに】

看護専門職には職業アイデンティティの確立が重要で、看護基礎教育から職業アイデンティティの確立を促進する教育が必要である。我々は、看護大学入学後の1年生を対象とした先行調査で、職業モデルや家族の看護経験がある方が職業アイデンティティが高いことを明らかにした。そこで、本研究では看護大学入学後1年を経た2年次生を対象として、志望動機に焦点を絞り職業アイデンティティとの関連を明らかにした。

### 【方法】

6つの大学の看護学生(2年生)228名(有効回答率81.4%)を対象に質問紙調査を行った。男性と23歳以上を除外した。調査項目は、年齢、看護師志望動機尺度(石川ら, 1993: 5因子16項目5件法)、医療系大学生用職業的アイデンティティ尺度(藤井ら, 2002: 4因子32項目7件法)を使用した。分析は、アイデンティティ総合点と志望動機下位尺度毎の得点との関係をPearsonの相関係数を用いて分析した。有意水準は5%とした。対象学生に研究の趣旨および方法、参加の任意性や拒否・中断は学業成績と一切関係なく、不利益を被らないことを説明した。調査票は無記名とし、個人を特定しない、研究以外の目的では使用しない、結果の公表について文書および口頭で説明した。A大学の倫理委員会の承諾を得て実施した。

### 【結果】

対象者の平均年齢(SD)は19.8(0.5)で、職業アイデンティティ合計平均点(SD)は141.4(30.8)点であった。看護師志望動機下位尺度平均点は、社会的貢献3.5(0.6)点、職業的魅力3.6(0.3)点、主観的条件2.7(0.6)点、資格や安定4.2(0.1)点、経済的条件2.8(1.2)点で、職業アイデンティティと有意な関連があったのは、社会貢献、職業的魅力、主観的条件であった( $p < 0.01$ )。

### 【考察】

看護学生2年生の看護師志望動機のうち、資格・安定性の得点が最も高かったが、職業アイデンティティとの関係はなく、社会的貢献、職業的魅力等の方が有意な関係があった。不況下にあっても看護職のライセンスを有していると就職率が高く、看護師になるという覚悟がないまま入学してくる人の志望動機になっている場合が多いことが推察される。看護師志望動機が資格・安定や経済的条件だけの学生には、アイデンティティを高めていく教育的関わりが特に重要であることが示唆された。

## 158) 看護学生の職業アイデンティティに影響する要因

○藤本裕二<sup>1</sup>, 堀川新二<sup>2</sup>, 松浦江美<sup>2</sup>, 藤野裕子<sup>3</sup>,  
中村真理子<sup>4</sup>, 楠葉洋子<sup>5</sup>

<sup>1</sup>佐賀大学医学部看護学科, <sup>2</sup>活水女子大学看護学部看護学科, <sup>3</sup>長崎県立大学看護栄養学部看護学科, <sup>4</sup>福岡女学院看護大学看護学部看護学科, <sup>5</sup>長崎大学大学院医歯薬学総合研究科

### 【はじめに】

看護師のキャリア発達において、職業アイデンティティの獲得は重要で、学生時代からの支援が必要である。現在は学生の志望動機も様々で、看護師になるという覚悟がないまま入学してくる学生も少なくない。そのため、職業アイデンティティの獲得が重要課題になっている。先行研究において、自己効力感と職業アイデンティティの関連が指摘されたが、自己効力感だけでなくその他様々な関連要因の存在が考えられる。そこで、本研究では看護師のキャリア発達において、重要な看護学生の職業アイデンティティについて影響を及ぼす要因を明らかにすることを目的とした。

### 【方法】

九州管内の6つの大学の看護学生(2年生)280名を対象に質問紙調査を行った。うち、男性と23歳以上を除外した228名(有効回答率81.4%)を分析対象とした。平均年齢は19.8±0.5歳であった。調査項目は、職業アイデンティティに関連する要因を、特発性自己効力感、看護師志望理由、社会的スキル尺度、職業モデルの存在、家族への看護経験、医療関係者の有無で構成し独立変数とした。職業アイデンティティとは、個人の職業における意識や感覚であり、特発性自己効力感とは、個人がある状況において必要な行動を効果的に遂行できる可能性の認知を指す。職業アイデンティティを従属変数としステップワイズ法による重回帰分析を行い、より説明力を持つ分析モデルを探索した。対象学生に研究の趣旨及び方法、研究参加の任意性や拒否・中断は学業成績と一切関係なく、不利益を被らないことを説明した。調査票は無記名とし、結果は数値化して処理を行うため個人の特定ができないこと、研究成果について公表すること、研究以外の目的では使用しないことを文書および口頭で説明した。A大学の倫理委員会の承諾を得て実施した。

### 【結果】

職業アイデンティティに影響していた要因は「職業モデルの存在」「看護師志望理由」「特発性自己効力感」が有意な変数として採択され42.3%が説明された。

### 【考察】

職業モデルの存在は自己の将来像をイメージしやすく、職業アイデンティティに影響していたことが考えられる。看護師志望動機が強く、自己効力感が高い学生程、職業アイデンティティに影響していた。基礎看護教育においては、自己効力感に焦点を絞った教育方法の重要性が改めて示唆された。

## 159) 「看護の統合と実践」受講による看護技術経験状況の変化

○毛利貴子<sup>1</sup>, 光木幸子<sup>1</sup>, 占部美恵<sup>1</sup>

<sup>1</sup>京都府立医科大学医学部看護学科

### 【目的】

A大学では、臨地実習終了時に厚労省資料をもとに大学独自で作成した看護技術到達度チェックリストを用いて看護技術経験状況を調査している。近年臨地において、学生が経験できる看護技術は減少傾向にあり、卒業後高度な看護実践能力を求められる臨地とのギャップが危惧されている。A大学では、看護実践能力向上を目的として4年生後期に「看護の統合と実践」を開講している。本科目受講生の、看護技術経験状況の変化を明らかにすることで演習の有効性を検証し、卒業前の学生に必要な看護技術習得のための演習のあり方について考察する。

### 【方法】

4年生69名中授業を選択した17名を対象に、自己記入式質問紙をME機器の理論と操作(輸液ポンプ、低圧持続吸引器の取り扱い等)、看護技術演習(口腔ケアと口腔内吸引、血糖測定とインスリン皮下注射)、シミュレーション教育(狭心症発作時の対応)終了後に配布した。調査内容は、A大学で使用している「看護技術経験状況チェックリスト」のうち、本科目に関連する53項目について、「一人で実施できる」～「未経験かつ知識もない」の9段階で尋ねた。分析にはウィルコクソン符号付順位和検定を用い、受講前(4年生前期の臨地実習終了後)のデータと比較した。倫理的配慮として、研究概要および参加は自由意志であり成績に影響しない等説明し、書面にて同意を得た。

### 【結果】

17名全員より回答を得た。単独で実施できるレベル1では、「患者を誤認しないための防止策を実施できる」他3項目にて得点が向上した( $p < 0.05$ )。指導のもと実施できるレベル2では、「経口薬服薬後の観察ができる」他3項目( $p < 0.05$ )、「酸素吸入療法が実施できる」「12誘導心電図の援助ができる」他2項目( $p < 0.01$ )、学内演習で実施できるレベル3では「輸液ポンプの基本的操作ができる」( $p < 0.05$ )「低圧持続吸引器の操作ができる」( $p < 0.01$ )、知識としてわかるレベル4では「針刺し事故後の感染防止対策が実施できる」( $p < 0.05$ )、「低圧持続吸引中の患者の観察ができる」他2項目で有意に向上した( $p < 0.01$ )。

### 【考察】

本科目は、e-learningを用いた予習、複数の臨地事例設定や臨床看護師による指導を取り入れ、より実践的に看護を学ぶ場として構成している。本調査の結果から、口腔吸引・口腔ケアやインスリン皮下注射など侵襲やリスクを伴う技術の経験が向上し、12誘導心電図、輸液ポンプなど臨地でよく用いられるME機器取り扱いの経験状況が向上したことが明らかになった。また、レベル1でも針刺し事故や患者誤認の防止など、臨床実践で重要なリスクマネジメント能力を向上できたことも示された。卒業、就業に向けての動機づけを高めつつ、基本的手技と実践能力の向上を図るには適切な時期、内容であったと考える。

160) ポートフォリオを用いた主体的学習態度獲得を支援するための教育評価 第1報 独自性欲求の学年比較

○嶋澤順子<sup>1</sup>, 久保善子<sup>1</sup>, 高島尚美<sup>1</sup>, 北 素子<sup>1</sup>,  
高橋 衣<sup>1</sup>, 佐竹澄子<sup>1</sup>, 櫻井美代子<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>東京慈恵会医科大学医学部看護学科

【研究背景と目的】

A大学では、学生が主体的学習態度を獲得することを促す教育の実施を重視し、その教育方略の一環として平成24年度より在学中にポートフォリオを用いて実施する演習科目を開始した。この科目では、学生自身が看護職になるものとしての将来像や学びへの関心を具体化しながら自己・他者理解を深め、ポートフォリオのビジョン・ゴールを記述した。そこで、科目の学習効果を分析することにより、学生が主体的学習態度を獲得するための教育のあり方を明らかにすることを目的に研究を行った。本報告では、学習効果の分析準備として、学生の主体的学習態度を方向づける独自性欲求の特徴を学年間比較により明らかにした。

【方法】

対象：A大学1～4年学生169人である。調査方法：学年ごとの授業時間外に無記名自記式質問紙調査を実施し、一定期間内に学生自身が所定場所に投入することにより回収した。調査時期：平成24年4月。調査内容：独自性欲求尺度(岡本, 1985)、対象者の基本属性である。独自性欲求尺度は、自分の性質、能力等が他人と異なっていたと感じる欲求が強いほど得点が高くなる尺度であり、学生の主体性の一側面を評価するものである。分析：学年ごとに基礎的集計を行った後、尺度で得られた総得点および構成因子別得点を学年間で比較した。差の検定にはBonferroni法による多重比較を行った。倫理的配慮：所属大学の倫理委員会の承認を得て行った。

【結果】

回収数は1年生42人(100%)、2年生40人(100%)、3年生36人(94.7%)、4年生40人(100%)であり、すべてを分析対象とした。独自性欲求尺度の総得点の平均値は、2年生が最も高く73.5点で1年生が最も低く70.2点であった。総得点の比較では、学年間に有意な差は認められなかった。因子別による比較では、因子2(他人からの批判に対する態度)では1年生は3年生より、因子7(規則に対する態度)では4年生は1年生より、因子8(社会習慣に対する態度)では3年生および4年生は1年生より有意に高かった。

【考察】

学年間の比較から推察される学生の独自性欲求の特徴は、1. 1年生は他人からの批判に耐えることができる、他者と違っていても自身を肯定できるなど他者からの批判や個別化において独自性が高い。2. 入学直後の学生よりも在学期間が経過した学生の方が既存の規則や社会の慣習に従うことにあまり肯定的でなくこれらに縛られたり従ったりしたくない傾向にある。と考えられる。そのため、教育プログラムとして、学生が自らの考えを自由に述べ他者を尊重しながら討議できる機会の設定および、既存の規則や慣習に対して自らの考えをもつ力を育む必要性が示唆された。

161) ポートフォリオを用いた主体的学習態度獲得を支援するための教育評価 第2報 学習による主体性の変化

○久保善子<sup>1</sup>, 嶋澤順子<sup>1</sup>, 高島尚美<sup>1</sup>, 北 素子<sup>1</sup>,  
高橋 衣<sup>1</sup>, 佐竹澄子<sup>1</sup>, 櫻井美代子<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>東京慈恵会医科大学

【目的】

ポートフォリオを用いて実施する演習科目(看護総合演習1)の学習効果を明らかにするために、履修前後の学生の主体的学習態度を分析した。

【方法】

対象：平成24年度に看護総合演習1を履修したA大学1年生42人である。調査方法：当該科目の履修前後に無記名自記式質問紙調査を行い、個人データが一致するように学生には同一のパスワード記述してもらった。調査時期：履修前は平成24年4月、履修後は同年7月。調査内容：履修前後では独自性欲求尺度(岡本, 1985)および対象者の基本属性、履修後には本演習のSpecific Behavioral Objectives(以下SBO)を調査した。分析：SBOは記述統計量、独自性欲求尺度は履修前後の得点について対応のあるt検定を行った。倫理的配慮：所属大学の倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】

履修前の質問紙の回収数は42人(回収率100%)、履修後の回収数は40人(回収率95.2%)。履修前後のパスワードが一致した学生29人(一致率69.4%)の独自性欲求得点では因子3, 5, 総得点において履修前よりも履修後の得点が統計的に有意に高くなっていった(Fig.1)。SBOは9が最も高く、次いで11, 6の得点が高かった(Fig.2)。

【考察】

本演習の学習効果として、1. 因子3の結果より、看護専門職になる者としての目標を見出し、社会貢献をしようという意識に繋がっていること、2. 因子5より、自ら進んで事をなすという主体性に関する得点が高くなっており、自分の意思によって判断・行動する態度が涵養されていること、3. 独自性欲求総得点より、他者とは異なる自分を意識し自己を明確に持つ力が備わったこと、4. SBOより、グループワークの効果およびポートフォリオの有効性が推察されること、より本演習の目的に即した学習効果が得られていたことが示唆された。

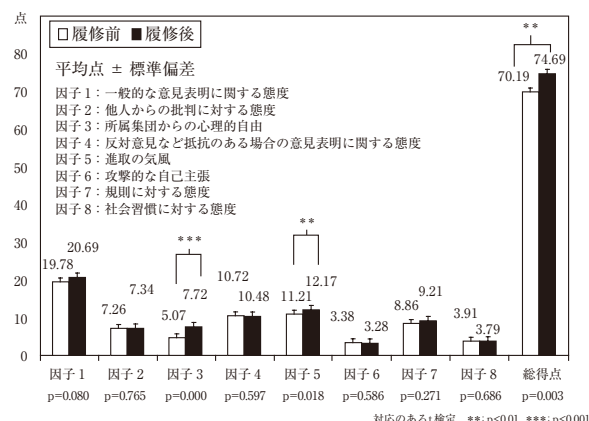


Fig.1 履修前後の独自性欲求得点 (N = 29人)

Specific Behavioral Objectives(SBO)

- 看護を学ぶ者としての将来像や関心のありかを説明できた。
- 1を深めるために、適切な情報を集めることができた。
- 情報を整理、統合し、説明することができた。
- 収集した情報を基に、取り組む課程を決定できた。
- 課程に取り組むための行動計画を立てることができた。
- 行動計画に基づいて、自己の立場で選択し、考え、感じ、行動することができた。
- 自らの情報を振り返り、その内容を表現することができた。
- 履修を通して、自分の変化(成長)を感じることができた。
- 他者の学びを知ることで、学びや学ぶ内容の多様性に気づき、深めることができた。
- グループメンバーとして主体的に課題に取り組み、グループに貢献することができた。
- 演習での学びを活用しながら、自分の将来像(ビジョン)を描くことができた。
- ビジョンを明確にするためのゴールを設定できた。

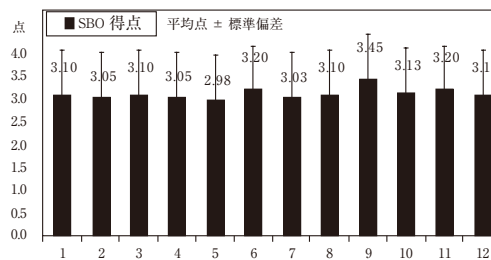


Fig.2 履修後のSBO得点 (N = 40人)



162) 生命倫理受講後の“いのちの尊さ”と“患者のQOL”の学習関心度 -2011と2012年度の看護学生の比較-

○川本起久子<sup>1</sup>, 柴田恵子<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>九州看護福祉大学看護学科

【目的】

生命倫理を受講した年度が異なる看護学生を対象に“いのちの尊さ”と“患者のQOL”についての関心度の違いから、講義への評価を明らかにする。

【研究方法】

1) 対象：2011及び2012年度の生命倫理受講後のA大学看護学科1年生(以下2011年度生A, 2012年度生Bと示す)。2) 調査日：Aは2011年7月22日, Bは2012年7月21日に実施した。3) 方法：質問紙は、2008年度の生命倫理受講生の学びを基に独自作成したいのちの尊さ11項目(5件法), 患者のQOL 7項目(5件法)と生命倫理学習経験等の7項目で構成した。5件法は得点が高いほど関心が高いことを示す。4) 倫理的配慮：A大学倫理審査委員会の承認を得た(23-006)。質問紙配布は一括し、個別に所定場所に提出したものを回収した。5) 分析：いのちの尊さ・患者のQOLの項目毎に平均得点を算出し、比較はIBM SPSS Statistics 19にてt検定を行った。

【結果】

1) 回答状況：A117, B115のうち同意の得られたA106(回収率90.6%), B89(77.4%)。有効回答数(回答率)はA105(99.1%), B85(95.5%)。2) 属性：平均年齢は, A19.0±1.7歳, B18.3±1.1歳。3) いのちの尊さ：平均得点から, Aは「死について」, Bは「生命の誕生について」と「死について」が最も高かったが, AはBの最高得点よりも4項目高かった。4) 患者のQOL：平均得点から, AB共に「患者の意思を尊重する」が最も高かった。5) 全項目：ABの有意差はなかったが, 「生命の始まりからいのちの尊さについて」以外の項目全てBがAよりも平均得点が低かった。

【考察】

“いのちの尊さ”をAB共に「死」, またBは「生命の誕生」という生死から学んでいた。“患者のQOL”はAB共に「患者の意思の尊重」を学び, 看護学生は患者の思いを重視していた。ABの有意差はなかったが, Bは全体的に平均得点が低下しており, 関心度を高める教育内容の必要性が伺えた。

表1. “いのちの尊さ”と“患者のQOL”の学習における項目別平均得点と標準偏差

項目/調査対象		A (n=105)	B (n=85)
いのちの尊さ	生そのものについて	4.16±0.89	4.07±0.75
	生きることに	4.37±0.82	4.14±0.77
	生命の誕生について	4.37±0.82	<b>4.36±0.68</b>
	日常生活について	3.86±0.81	3.73±0.86
	家族の存在について	4.30±0.86	4.12±0.84
	死について	<b>4.57±0.65</b>	<b>4.36±0.77</b>
	老いについて	3.85±0.79	3.81±0.76
	生命の危機について	3.99±0.84	3.84±0.86
	生命の始まりからいのちの尊さについて	4.27±0.78	4.28±0.68
	患者の思いについて	4.41±0.70	4.22±0.76
患者のQOL	個別性の違いについて	4.22±0.77	4.04±0.73
	その人にあった日常生活	4.26±0.72	4.09±0.75
	患者の意思を尊重する	<b>4.57±0.59</b>	<b>4.41±0.60</b>
	患者の自立	4.14±0.70	4.13±0.69
	患者の回復	4.20±0.71	4.19±0.65
	患者が治療を受容する	4.17±0.77	4.06±0.78
	周囲の支えがある	4.36±0.70	4.23±0.70
家族の意思を尊重する	4.16±0.83	4.00±0.73	

\* : P<0.05

163) 介護老人保健施設の看護管理者が捉えている現任教育の現状と課題

○齊藤敦子<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>人間総合科学大学保健医療学部看護学科

【目的】

介護老人保健施設(以下「老健」とする)での, 看護職に対する現任教育の現状と課題を明らかにし, 老健の看護職に対する現任教育のあり方を検討するための一助とする。

【研究方法】

研究参加者：関東地区にある老健に勤務している看護管理者2名。研究方法：研究参加者に, インタビューガイドに基づいた半構造的面接を概ね70分実施し, 逐語録を作成して質的帰納的に分析した。調査時期は, 2012年6月である。倫理的配慮：研究参加の依頼文書を郵送し, 研究参加への同意書に署名・捺印のうえご返送いただいた。

【結果】

研究参加者は, 2名とも40歳代の女性であった。両施設とも看護職に対する現任教育として, 他職種と合同の研修を不定期に実施しており, 外部研修(伝達講習も実施)にも参加させていた。1か所では, 看護職独自の研修も実施していた。インタビューからは, 現任教育のあり方として「現場では, 判断が一番求められる。まず気づいてから判断できる力を, 研修で身に付けさせたい」「他職種と合同の研修では, ディスカッションすることで自分の立場がわかってくるという利点がある」「研修は, 気付く場になりたい。モチベーションを高く持って, 研修にも日々の業務にも臨んでもらいたい」等の考えが語られた。また, 必要となっている研修テーマとしては「認知症の方が増えており, 認知症に関しての研修が必要」「施設で一番怖いのは, 感染である。スタンダードプリコーションの意識付けが, 大事だと思っている」と語られた。さらに, 「職種によって, 研修に対するモチベーションに違いがある」「予算の確保が, 難しい」「看護師には, 病院ではなく施設(生活の場)で働いていることをもっと自覚してもらいたい」「老健では, 医療に関する経験が十分に積めない。だから, 医療機関での教育が必要だと思う」等の課題が語られた。

【考察】

老健は, 医療と福祉の中間施設であり, 在宅や他の高齢者施設への橋渡しの役割を有する。また, 医療機関の在院日数の短縮化の影響を受け, 医療依存度の高い利用者が増えている。そのような状況下で看護職は, 多様な知識や技術が求められる, 人員や予算不足もある中で現任教育の充実が求められている。今回のインタビューからは, 認知症がある利用者への対応や感染予防など日々の業務に直結した内容の研修の必要性が語られた。さらに, 他職種との合同の研修では, 全職種のスタッフが同じようにモチベーションを高く維持し, ディスカッションすることで各々の専門性が明確になり, 質の高いサービスの提供に繋がること示唆された。老健は, 医療機関に比べ看護技術力の向上が図りにくい環境ではあるが, ベテラン看護職が新人看護職へ技術の伝承を行う機会を設ける等, 看護職独自の研修も必要と考える。

## 164) 看護学生の基礎体温測定から健康意識を高める要因

○明地由紀子<sup>1</sup>、石田和子<sup>2</sup>、田中優子<sup>3</sup>

<sup>1</sup>北里大学保健衛生専門学院保健看護科、<sup>2</sup>新潟県立看護大学、<sup>3</sup>南魚沼市立ゆきぐに大和病院

### 【目的】

月経は女性の身体生理的機能であるが、月経に関する悩み等を抱えている学生が多い。そこで、基礎体温測定の経験から、自分の健康状態を知ること、看護学生の健康意識を高める要因について検討することを目的とした。

### 【研究方法】

対象は、A看護専門学校2年生の女子で、平成22年度55名、平成23年度49名である。3か月間、基礎体温の測定を行い、そこから自分の健康を知り学んだことや感じたことについて想記してもらった。データ分析は、内容分析の手法に基づいて行った。倫理的配慮は、当学院の倫理委員会の許可を得て行い、対象者には、研究の目的・内容について説明した。

### 【結果】

同意を得られた84名中2名が過去にBBTを測定した経験があったが、他の82名は全くの初心者であった。対象者は独身で19歳から28歳である。ほとんどが実家から離れて1人暮らしをしていた。提出されたBBTグラフは、BBT 2相性は60名(71%)、BBT 1相性は13名(15%)、BBT 1相性2相性混在は3名(4%)、判定不能は8名(10%)であり、女子学生84名分について分析した。その結果、基礎体温測定から健康意識を高める要因として【経験】【願望】【環境】【知識】【継続力】の5つのカテゴリーが生成された。成長・発達する中で、私たちは、様々な「環境」の中で生活している。その「環境」の中で「経験」・「願望」・「知識」・「継続力」が、影響・関連しながら健康意識を高めていくことが明らかとなった。

### 【考察】

「経験」は、自らの〔身体・精神的症状〕や〔体調の変化〕から、現在の〔健康状態〕を判断し、対処方法が導きだされていると推測できた。このことから経験することが健康への意識づけにおいて重要であることが示唆された。「願望」は、青年期の大きな特徴であり、〔旅行や美へのあこがれ〕〔結婚や出産〕〔体調に合わせた生活〕など生活に密着したものであることがわかった。「環境」は、〔内部環境〕である月経周期と〔外部環境〕である食生活や睡眠等が深く関わって、健康に影響を与えていることを、BBT測定からも再認識できた。BBTが2相性でない約30%の学生は、〔外部環境〕との関連について、自らの生活を振り返るきっかけになった。「知識」は、〔体験からの知〕を得ることで〔生活の見直し〕ができ、自らの身体に〔関心を持つ〕ことができ、〔体調管理〕へと保健行動に繋がったことがわかった。「継続力」は、何事も直ぐには結果が出るとは限らない。しかし3か月間、基礎体温測定を継続したことで、〔気づき・発見〕や〔意欲〕が生まれ、自らの健康状態の理解に繋がり、継続の力になった。

## 165) 臨床実習指導者研修会参加者の実習指導に関する認識(その1) 参加動機による実習指導能力の認識の違い

○奥百合子<sup>1</sup>、岩田浩子<sup>1</sup>、末永 香<sup>1</sup>、長井栄子<sup>1</sup>、坂下貴子<sup>1</sup>、和野千枝子<sup>1</sup>、上田由喜子<sup>1</sup>、堀井素子<sup>1</sup>、星野聡子<sup>1</sup>

<sup>1</sup>城西国際大学 看護学部

### 【目的】

A大学看護学部は臨床実習指導者を対象に臨床実習指導者研修会を開催した。本研究目的は、臨床実習指導者研修会への参加動機によって、実習指導能力の認識にどのような違いがあるのかを明らかにすることである。

### 【研究方法】

研修の全日程参加予定32名を対象とし研修会開始前に質問紙調査を実施した。調査内容は、実習指導経験者複数名と検討し独自に作成した実習指導能力37項目について、実習指導の重要性および自身への備わりを各々5段階評価(非常に備わっている5点~全く備わっていない1点)にて尋ねた。また参加動機(上司の指示と上司の指示以外)も尋ねた。分析方法はSPSS for Windows Ver20.0Jを用い、上司の指示群と上司の指示以外群の各項目において平均値の差異があるのかをt検定により比較した。倫理的配慮として城西国際大学地域福祉・医療研究センター倫理審査委員会の承認を得た。対象者には文書と口頭にて調査目的、個人情報保護、調査への参加自由の保障などを説明した。

### 【結果】

欠損値があった回答を除き有効回答は27名(有効回答率84.3%)であった。実習指導能力37項目の全体平均(上司の指示群15名、上司の指示以外群12名)は実習指導の重要性 $4.61 \pm 0.36$ 点(4.59 $\pm$ 0.4点、4.64 $\pm$ 0.32点)、自身への備わり $2.98 \pm 1.07$ 点(2.68 $\pm$ 1.2点、3.35 $\pm$ 0.74点)であり、各々有意な差は認められなかった。実習指導能力について、実習指導の重要性では「担当する実習の目的を知る」(t(13) = 2.28, p < .05)、自身への備わりでは「実習指導方法の概要把握」(t(19.7) = 2.26, p < .05)、「実習指導要綱に目を通す」(t(21) = 2.69, p < .05)、「学生の看護計画がスタッフに浸透される働きかけ」(t(23.8) = 2.10, p < .05)、「学生と患者の関係が構築できる調整」(t(24.3) = 2.88, p < .01)、「実習に関する看護物品の確認」(t(24.6) = 2.73, p < .05)の各項目において、上司の指示以外群の平均値は上司の指示群に比べて有意に高かった。

### 【考察】

実習指導能力のうち、自身への備わりは実習指導の重要性に比べて得点が低く、指導における重要性を認識しているものの、指導能力は自身にあまり備わっていないと認識していることが推察された。実習指導能力37項目中6項目において、上司の指示以外群の平均値は上司の指示群に比べて高値を示し、これらは学生の実習が円滑に進められるための実習環境の整備と指導方法に関することであった。上司の指示群が上司の指示以外群に比べて低値を示した理由として、実習指導未経験による実習指導への興味が低い可能性が考えられ、研修会参加を通して実習指導方法修得に向けた動機付けの必要性が示唆された。

## 166) 臨床看護実践における新人看護師が語る知の様相

○杉田久子<sup>1</sup>, 唐津ふさ<sup>1</sup>, 西村歌織<sup>1</sup>

<sup>1</sup>北海道医療大学看護福祉学部

### 【目的】

本研究の目的は、新人看護師が臨床実践経験を通して知識や技術をどのように意味づけし、「知」を表現するのかを明らかにすることである。

### 【研究方法】

1. 研究参加者：急性期医療を中心とするA市中核病院に勤務する新人看護師4名。

2. 研究方法：平成24年10月および12月の2回、テーマ設定に基づく「看護実践を語る会」のグループインタビューを実施した。実施前には看護場面の想起を目的とした看護実践の記述、実施後には語りの内容を醸成・展開する目的で個人面接を行った。グループインタビューの内容は逐語録を作成し、質的帰納的に内容を分析した。なお、本研究における「知」の様相は、看護実践の語りを共有する交流を通して意味づけられた「知」のあり様をいう。

3. 倫理的配慮：研究代表者の所属A大学倫理委員会および実施施設の倫理審査の承認を受け、参加者には研究の趣旨、匿名性の確保、自由意志に基づく参加、利益・不利益を明記して説明を行い、同意の署名を得た。

### 【結果】

「看護実践を語る会」に参加した新人看護師は、4名（男性2名、女性2名）で年齢は21～23歳であり、全員が看護専門学校卒業後の就業であった。勤務部署は内科病棟1名、救急部1名、手術部2名であった。グループインタビューは計2回実施し、1回当たり約60分、総計125分であった。語りのテーマは、第1回に印象に残る対象との関わり、第2回に実践を通して自分が変化したことを設定した。新人看護師が語る「知」の様相は、8つのカテゴリで表現された看護実践の知と12のカテゴリで表現された自己成長の知であった。看護実践の知は、患者や先輩看護師との関わりから、看護師としての自立や自律を見いだす知の様相であり、「時間と密度のやりくり」、「先輩のふるまいからの気づき」から表現された。新人看護師は、多重課題に対応しきれず思うようにできないもどかしさを経験していた。しかし患者へのはたらきかけを試行錯誤し、短時間で密度の濃いやりとりが実践できた実体験が試練を乗り越える糧となり、やりがいや責任感を自ら獲得し達成感を得ていた。自己成長の知は、入職当初は自分のことだけで精一杯な「自分との戦い」であり、入職8ヶ月目で「周りへの気配り」ができるが、その一方で「2年目看護師との格差」、「同期と比べて焦る思い」のように自己の到達点の模索を示す知の様相であった。同僚や先輩看護師と大きな隔たりを認識し、目標を見失いそうになるあやふやさがあり、他者評価を気にしつつも、先輩に守られている感覚を自覚していた。

### 【考察】

結果から、新人看護師の経験知として看護実践の知、個人知として自己成長の知の様相が明らかとなった。新人看護師にとって先輩看護師との関係性、関わりの深さや助言が自立や自律を促すに重要なことが示された。

## 167) 臨地実習での移動援助技術の実施頻度と困難さ

○相原ひろみ<sup>1</sup>, 青木光子<sup>1</sup>, 野島一雄<sup>2</sup>, 野本百合子<sup>1</sup>

<sup>1</sup>愛媛県立医療技術大学保健科学部看護学科、

<sup>2</sup>愛媛県立医療技術大学保健科学部臨床検査学科

移動援助を実施する際、看護学生は転倒のリスクを感じながら実施している。1年次に学生同士で援助を学習する時点から、臨地実習を経て様々な経験を積んでいく。移動援助を学習する過程で、移動援助を実施する頻度や困難さを感じているかを明らかにし、基礎教育で必要な実践的な教育内容を検証する基礎データにすることを目的に本研究に取り組んだ。

### 【目的】

「体位変換」「移動・輸送」の授業で教授する援助技術および臨地実習で実際に経験する移動援助技術の実施頻度と困難さを明らかにする。

### 【方法】

期間：平成24年12月。対象：A大学看護学科4年生60名。  
データ収集方法：1年次に学習した移動援助技術の項目について、臨地実習で経験した移動援助技術の経験の頻度と困難さについて、自記式質問紙を用いてデータ収集を行った。分析方法：移動援助動作16項目について、難易度を「すごく簡単」を1、「出来ない」を7とする7段階で点数化した。実習での実施頻度を「実施しない」を1、「かなり実施」を5とする5段階で点数化し記述統計量を算出した。

### 【倫理的配慮】

対象者に研究の目的と方法、任意性、学業成績と無関係なこと、匿名性の確保、本研究以外でのデータの不使用、関連する看護系の学会等における研究成果の公表等の説明を文書と口頭で行った。愛媛県立医療技術大学倫理委員会の承認を得て行った（承認番号12-027）。

### 【結果】

回答は53名から得られた（回収率88%）。16項目の援助動作のうち、難易度が高かったのは「上方向への移動（回転を活用）」4.45、「ベッド端座位から車いす移動」4.25、「ストレッチャーからベッド（バスタオル使用）」4.24であった。難易度と実施頻度の相関が高いのは「横方向への水平移動（回転を活用）」-0.44、「車いすで段差越え」-0.42、「ストレッチャーからベッド（バスタオル使用）」-0.38であった。「ベッド端座位から車いす移動」は難易度が4.25、実施頻度3.72と共に高いが、相関係数0.03であった。

### 【考察】

難易度が高い動作の共通点として、対象の位置を大きく移動させる動作が上位を占めた。これらの動作には、転倒のリスクが伴うことを実感していることが示唆された。ベッド端座位から車いす移動は、難易度も実施頻度も高いが相関はないことから、実施頻度は高く経験していても難しいと感じる学生と、実施したから出来るようになり簡単だと感じる学生がいる可能性が示唆された。一方で、難易度と実施頻度の相関がある「車いすで段差越え」-0.42の結果から、バリアフリーの病院では、段差を越えるような援助は実施機会が少ないことが明らかになった。実施頻度が少ない動作であっても、実施は困難であることから看護技術として身につける必要があると考える。

## 168) 新人看護師における看護実践能力向上のプロセス

○伊藤 愛<sup>1</sup>, 樋貝繁香<sup>2</sup>, 石嶋真季<sup>3</sup>, 上田理絵<sup>4</sup>

<sup>1</sup>自治医科大学附属さいたま医療センター, <sup>2</sup>群馬県立県民健康科学大学看護学部, <sup>3</sup>筑西市役所, <sup>4</sup>自治医科大学附属病院

### 【目的】

新人看護師の看護実践能力向上のプロセスを明らかにすることを目的とした。

### 【研究方法】

1. 研究デザイン: 質的帰納的研究。2. 対象者: A大学附属病院二年目看護師17名。3. データ収集方法: インタビューガイドを用いた半構成的面接法。4. 分析方法: 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ。5. 倫理的配慮: 対象者に研究の趣旨や方法, 匿名と守秘の保証, 拒否の自由や学会発表することなどについて説明し書面で同意を得た。所属施設の倫理審査委員会の承認を得た。

### 【結果】

1. 対象者の概要: 対象者は, 平均年齢23.3歳の計17名であった。所属部署は, 内科系が7名と多く, 次に外科系が4名であった。インタビュー時間は, 平均61.8分であった。2. 逐語録より看護実践能力向上に関する語りを抽出して分析した。以下カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを〈 〉で示す。新人看護師の看護実践能力向上のプロセスは, 【先輩看護師との対象理解の共有】から始まり, 【患者の反応や症状の変化に対応した日常生活援助の実施】を経て, 【予測可能な患者への自立した看護実践】が可能となっていた。このプロセスを辿るための支援には【先輩看護師との対象理解の共有】の段階では, 看護実践の場を共有した先輩との振り返りを通し〈患者の反応の理解〉〈観察点の理解〉が可能となった。【患者の反応や症状の変化に対応した日常生活援助の実施】の段階では, 看護実践の見守りを行っている先輩との振り返りを通し〈意図的な情報収集の必要性の理解〉〈患者の反応や症状の変化への根拠づけ〉が可能となり, 【学習と実践の繋ぎ】【学習課題の明確化】がなされた。そして, 新人看護師の【自分自身の行動や思考への気づき】へと繋がっていた。【自分自身の行動や思考への気づき】は, 自身での看護実践の振り返りや学習の積み重ねとなり, 〈少し先の患者の症状変化への予測〉〈フィジカルアセスメント能力の向上〉により【予測可能な患者への自立した看護実践】へと導いていた。また, 新人看護師の看護実践を支えるものは, 同期との振り返りやマニュアル活用による準備時間の削減による【気持ちと時間の余裕による視野の広がり】があった。看護実践能力の向上とともに先輩看護師との振り返りの時間は減少し, 自身で看護実践を振り返る時間が増えていった。

### 【考察】

新人看護師は, 看護実践の場を共にした先輩との振り返りを通して, 自分自身の行動や思考を客観的に捉えることができるようになり, それにより看護実践能力が向上するプロセスを辿っていた。新人看護師の看護実践能力向上には, 看護実践能力に応じて学習と実践を繋ぎ, 学習課題の明確化が行われるような振り返りが重要である。

## 169) 精神看護学の授業におけるチーム基盤型学習 (TBL) の有効性について

○平上久美子<sup>1</sup>, 鈴木啓子<sup>1</sup>, 伊礼 優<sup>1</sup>, 鬼頭和子<sup>1</sup>

<sup>1</sup>名桜大学人間健康学部看護学科

### 【目的】

チーム基盤型学習 (TBL) は学習者が能動的に参加できる学習方法であり, 効果的コミュニケーションや協働を学ぶことが求められる看護教育において, その有効性が注目されている。著者らは精神看護学の講義に導入し, その有効性について質的に分析検討した (平上ら, 2012) が, 今回, TBLを導入した授業における個人テスト (IRAT) と個人テスト後に同じ問題を仲間と解くグループテスト (GRAT) の得点比較および学生自身による授業評価からその学習成果を明らかにしたい。

### 【研究方法】

精神看護学概論を受講しているA大学看護学生81名のうち, 研究協力の同意が得られた者を対象とし, IRAT得点とGRAT得点の比較, および独自に作成した質問項目と自由記述をデータとし単純集計および質的分析を行った。質問項目はTBLによる知識の獲得, 個人とチームへの責任, 能動的参加, 責任性, 判断力, さらに満足感, 参画度などを含む10項目 (5段階リッカートで回答) を作成した。倫理的配慮として対象者には成績評価終了後, 研究の主旨を説明し, 協力の自由意思と参加への拒否権, 拒否しても不利益はないこと, 成績評価には一切関係ないこと, 匿名性の保持, 守秘義務, 結果の公表, データの管理・破棄を適切に行うこと等について文書を用いて口頭で説明し, 同意書で承諾を得た。

### 【結果】

対象者は79名だった。12問 (1問1点) の平均点は, IRAT・GRATそれぞれ8.5点, 10.4点であり, チーム得点が個人得点以上であった学生は96.3%であった。授業評価として, 予習をして臨んだ, 知識の獲得・既習の知識の確認が出来た, 課題を解く際に既習の知識を活かした, 個人とチームの学習に対する責任性を感じた, 仲間同士で刺激しあう活発なディスカッションができた, 個人と仲間の能力を大いに発揮する必要があった, 仲間と協力して根拠をもって答えを決定できた, 個人としてチームへのコミットメントは高かった, 授業に満足した, 授業に積極的に参加した, の全項目において, 非常にそう思う・そう思うが94%以上であった。自由記述については, 「楽しい, もっとやりたい」など「楽しみ・能動性」に関するものが72%, 「あやふやな点, 課題や弱点が分かった」などの「自己洞察」に関するものが57%だった。「好き仲間なので嬉しかったが, 最下位で悔しかった」などのコメントもあった。

### 【考察】

個人よりチーム得点が高かったことは常盤ら (2012) の報告と一致し, 学習効果が示唆された。学生は協同学習 (安永, 2010) の有用性を体得し, 学習過程に楽しさや悔しさなどの感情を伴うことで授業に深く参画していたことなど, TBLの有効性が確認された。自己の学習課題の明確化や, 責任や判断力を伴う能動的参加などから学生が手応えを得ていたことが示唆された。

## 170) 看護技術学習方略尺度の開発

○三吉友美子<sup>1</sup>, 細田泰子<sup>2</sup>, 星 和美<sup>2</sup>

<sup>1</sup>藤田保健衛生大学医療科学部看護学科,

<sup>2</sup>大阪府立大学看護学部

### 【目的】

看護技術の修得には学生が授業時間外に行う自己学習が不可欠であり、学生が用いる学習方略が技術修得に影響すると推測する。看護技術の修得過程で学生が用いる学習方略を診断するための「看護技術学習方略尺度」を開発し、その信頼性と妥当性を検討することを目的に研究を行った。

### 【看護技術学習方略尺度案の作成】

グループインタビューと先行文献を参考に設問項目案を作成し、看護技術教育経験者による表面妥当性の検討を経て、看護技術学習方略4カテゴリー(メタ認知的方略, リソース方略, 学習内容に対する方略, 情緒・動機づけ方略)89項目を作成した。次に、基礎看護技術教育の経験者を対象に、これらの項目と概念との関連を content validity index at the item level を用いて検討した。さらに中部・近畿地方の学校養成所11校の769名を対象にした調査を経て、5下位尺度25項目からなる看護技術学習方略尺度案を作成した。

### 【方法】

調査1：日本全国の学校養成所のうちリストアップ可能な633校から無作為抽出した238校に調査を依頼し、承諾の得られた88校の682名を対象に、2010年4月～5月に看護技術学習方略尺度案を用いて郵送調査を行った。探索的因子分析による構成概念妥当性の確認とCronbachの $\alpha$ 係数(以降、 $\alpha$ 係数と記す)を用いた信頼性の検討を行った。

調査2：研究者が勤務しない学校養成所の看護学生213名を対象に、2010年9月～11月に留め置き調査を行った。テスト・再テスト法により信頼性を検討した。さらに、「メタ認知的方略尺度」を用いて基準関連妥当性を検討した。倫理的配慮：大阪府立大学看護学部の研究倫理委員会の承認を得て実施した。対象者には文書で研究の目的・方法、参加しなかった場合の不利益は無いことを説明し、自由意思による調査への参加を依頼した。

### 【結果】

調査1では、310名から有効回答(有効回答率45.5%)を得た。探索的因子分析(主因子法, プロマックス回転)を実施し、因子負荷量0.30以上を条件に項目を削除した。その結果、学習の計画・目標, 振り返りを示す〔計画・調整〕と、他学生との学習を示す〔ピア学習〕, 知識の見直しなどのわからないことの解決志向を示す〔認知的志向〕, 学習に気持ちを向ける〔情動調整〕の4下位尺度17項目からなる「看護技術学習方略尺度」を確定した。各因子の $\alpha$ 係数は0.67～0.78であり、尺度全体では0.82であった。調査2では、169名から有効回答(有効回答率79.3%)を得た。テスト・再テスト法の信頼性係数は0.69であり、「メタ認知的方略尺度」とのPearsonの相関係数は0.55であった。

### 【考察】

「看護技術学習方略尺度」は構成概念妥当性および $\alpha$ 係数, テスト・再テスト法の信頼性係数, 基準関連妥当性の視点から一定の信頼性と妥当性を保持していると判断できた。

## 171) 看護学生の学年進行によるコミュニケーション・スキルと相互作用不安

○北宮千秋<sup>1</sup>

<sup>1</sup>弘前大学大学院保健学研究科

### 【目的】

看護学生のコミュニケーション・スキルと相互不安作用の学年進行および男女別特性を見いだすことを目的とする。

### 【方法】

看護学を専攻する2～4年生80名を対象に自記式質問紙調査を実施した。2年前期から4年前期までの臨床実習の期間, 2年前期・後期, 3年前期・後期各1回, 4年前期4月・6月・8月の3回, 計7回の調査を行った。調査内容は、コミュニケーション・スキル(藤本ら2007, 7段階評定(得点範囲6-42))と自尊感情(山本ら1982), 人と相互作用することで生じる主観的対人不安感である相互作用不安(IAS: Leary1990), 性別, 年齢などとした。個人の期間変化を捉えるため, 1回目の調査時にランダム番号の記載されたカードを学生に渡し, 自由に選んだカードの裏に学生の学籍番号を記載してもらい, 学生に配布と回収を依頼した。カードは封筒に入れて密閉し保管した。倫理的配慮として, 学生には研究の趣旨を説明, 成績とは無関係であり, 個人が特定されないことを紙面および口頭で説明をした。回収は留置により行った。

### 【結果】

7回すべての調査への協力が得られたのは, 58名(男性6名, 女性51名)であり, 1回目の調査の平均年齢は19.6±2.3(平均±標準偏差)歳であった。コミュニケーション・スキルの時期変化は有意であり( $p<0.01$ ), 3年前期に一時低下( $M=25.4, 14-36$ )するものの, 4年4月( $M=27.1, 16-40$ )に有意に上昇していた。性別と時期に交互作用が存在し, 男女のコミュニケーション・スキルの時期による変化パターンは異なっていた。自尊感情についても, 時期変化は有意であった( $p<0.01$ )が, 性別の違いによる違いはみられなかった。また, 相互作用不安については時期に( $p<0.05$ )に差がみられた。性別による差がみられ( $p<0.05$ ), 男女の変化パターンは異なっていた( $p<0.05$ )。

### 【考察】

対象の男女の数の違いがあるため比較には限界があった。しかし, コミュニケーション・スキルは男女差がありながらも, 4年8月には同レベルへ移行していることが特徴的であった。また, コミュニケーション・スキルと自尊感情が学年進行により上昇していることが明らかとなった。学年進行により自尊感情である自己の能力や評価が上昇していくことが認められた。相互作用不安は実習との関連が考えられ, 臨床実習が本格的に開始する3年10月に相互作用不安が低くなっていた。その後の上昇は, 臨地実習から地域に宿泊を伴う実習, 就職試験を控えてと, 安定した人間関係から新たな人とのかかわりが増えてくることが考えられた。

## 172) 在宅看護実習における看護学生の実習経験・評価に関する分析

○松尾 泉<sup>1</sup>, 高田まり子<sup>1</sup>

<sup>1</sup>弘前学院大学看護学部看護学科

### 【目的】

本研究は、看護学生の実習記録内容を中心に、実習経験・評価の分析を通じて、在宅看護実習の学習効果を明らかにすることを目的とした。

### 【方法】

調査方法：A看護大学4年次生のうち、2012年5月～7月に在宅看護実習を実施した者で、本調査に同意を得られた学生の実習記録を基礎データとした。実習方法：臨地実習を効果的に行うため、1週間の在宅看護実習のうち、実習3日目に受持ち事例の看護計画立案と確実な技術を提供するための詳細なシミュレーションを実施した。調査内容：訪問対象者・受持ち事例の概要、見学・実施した援助内容、および実習到達度（各実習目標の到達度を、できる～できない、の4段階評価で得点化）。分析方法：定量データを単純集計し $\chi^2$ 検定及び残差分析により変数間の差を比較した。実習到達度は自己評価と指導者評価について、各項目の平均点及び標準偏差値を求め、対応のあるt検定を実施し、学生・指導者間の平均点の差を比較した。

### 【倫理的配慮】

調査の趣旨、参加の自由、匿名性の尊重と、研究結果は関連学会に公表することを口頭及び文書で説明し同意を得た。本調査はA大学倫理審査委員会の承認を得て実施した。

### 【結果・考察】

同意の得られた41名（有効回答率97.6%）の実習記録を分析対象とした。訪問対象者の概要は、訪問件数206（平均5.2）のうち、約75%は介護保険を利用していた。このうち要介護度3以上の割合は62.6%で看護協会の全国調査結果58.9%に比べ多かった。対象者の主な疾患は、認知症16.5%・精神疾患13.9%・運動器疾患12.6%・脳血管疾患11.7%であった。在宅療養を取り巻く保健医療福祉の変化を反映し、ケアハウス・グループホームなど多様な生活の場で看護が提供されていた。見学および実施した496の援助内容の内訳は、バイタルサインの測定、清潔・排泄（浣腸・排便）など日常生活援助が約70%、服薬指導・運動訓練など指導教育が約25%であった。対象の健康レベルは急性期から慢性・終末期まで幅広く、人工呼吸器・ストーマ・中心静脈点滴（栄養法・化学療法）などの在宅医療を経験していた。受持ち事例への援助内容は、ROM訓練、排便など排泄援助や清潔援助、気分転換の活動であった。在宅療養の場で固有の生を支えるための創意工夫や、既習の医療機関における実習内容との比較・考察が出来ていた。また、多様な援助を見学に留まらず実践することで、確実な援助技術の習得と客観的な評価ができ、看護実践能力が向上した。実習後の評価得点は、学生 $83.9 \pm 3.4$ 、指導者 $81.8 \pm 2.7$ で有意差は見られなかった。今後は、実践能力の向上を可視化できるよう評価方法を工夫する必要がある。

## 173) 卒後2年目看護師の看護実践の現状と課題

○樋貝繁香<sup>1</sup>, 伊藤 愛<sup>2</sup>, 上田理絵<sup>3</sup>, 石嶋真季<sup>4</sup>, 石田寿子<sup>5</sup>

<sup>1</sup>群馬県立県民健康科学大学看護学部, <sup>2</sup>自治医科大学附属さいたま医療センター, <sup>3</sup>自治医科大学附属病院, <sup>4</sup>筑西市役所, <sup>5</sup>天理医療大学医療学部看護学科

### 【目的】

新人看護師教育から卒後2年目看護師（以下、2年目看護師とする）への移行時期の教育は希薄になる施設が多く、2年目看護師に対する継続教育には課題が多いと考える。そのため、継続教育に向けた基礎資料とするため2年目看護師の看護実践の現状と課題を明らかにすることを目的とした。

### 【研究方法】

研究デザインは質的帰納的研究である。調査期間は平成22年4月～8月であった。研究対象は、A大学附属病院に勤務する2年目看護師17名で、半構造的面接法によるインタビュー調査を行った。インタビューで得られたデータを逐語録に起こし、文脈に沿いながら抽象度をあげ、段階を経てカテゴリー化し、カテゴリー間の関連性を検討した。信頼性の確保のため、メンバー間で確認を行いながら進めた。倫理的配慮としては所属施設の倫理委員会の承認を得て、研究の趣旨を説明し、任意性と撤回の自由、個人情報の保護を保障し、書面にて同意を得た。

### 【結果】

1. 研究参加者の属性：平均年齢は23.3歳、17名全員が看護学部を卒業していた。所属は内科系が7名と最も多かった。2. 分析結果：2年目看護師の看護実践の現状について分析した。研究参加者は常に【看護実践への自信】と【看護実践への不安】の間を揺らいでおり、《宙ぶらりんな状態》を中核とした状態であった。【看護実践への自信】では、〈何度か経験したケアができる自信〉〈少し先が予測できる自信〉〈優先順位の判断への自信〉で構成されていた。この自信は自律した看護実践を導き【気持ちのゆとり】が生まれ〈全体を見渡す視野の広がり〉〈看護の楽しさ〉を感じていた。一方、【看護実践への不安】は〈ひとり立ちへの重圧〉〈重症患者を受け持つ責任の重さ〉〈仕事量と自分の力量のギャップ〉があった。また、【看護実践への不安】は【疲労感の助長】へと繋がっていた。【宙ぶらりんな状態の支え】は、〈振り返りを中心とした指導の継続〉〈先輩看護師からの見守り〉〈同期との思いや体験の共有〉〈同期同士での仕事のサポート〉であった。

### 【考察】

2年目看護師が少しずつ自律できるような見守りと共に、ピアサポートの必要性が明らかとなった。また、【気持ちのゆとり】により、これまで自己を中心とした看護実践から、病棟全体の動きを視野に入れた動き方が意識されるが、この視野の広がりには複数患者の受け持ちやリーダー業務を担う上で、重要な能力となる。そのため、【看護実践への不安】を軽減し、【看護実践への自信】が高められるよう、先輩看護師は振り返りの重要性を理解し、指導を行う必要があると示唆された。

## 174) 看護系大学生の物理学習状況から考える効率的な看護技術教授法

○柴田綾子<sup>1</sup>, 箕浦哲嗣<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 椋山女学園大学看護学部看護学科,

<sup>2</sup> 愛知県立大学看護学部看護学科

### 【目的】

本研究は、物理学の知識と看護技術の関係を明らかにすることによって、看護技術教育で留意すべき物理法則や物理学の考え方を明確化し、効率的な看護技術の教授法を導出することを目的としている。

### 【方法】

臨床看護師および看護系大学の1年生を対象とした。臨床看護師に対しては、厚生労働省が示す新人看護職の看護技術についての到達目標を基に、13領域の看護技術の中から、物理学の知識との関連性について問い、学生に対しては、臨床看護師の調査結果から看護技術を実施する際に必要となると考えられている物理学の知識を、実際に高校時代にどの程度学習しているかについて調査した。両調査ともWebサーバを使用した。量として得られたデータの分析にはSPSS Statistics 20, 自由記載より得られたデータにはKHcoder 2を用いてテキストマイニングを施し、看護技術教育に必要と考えられる物理学の単元の教授法を検討した。なお本研究は、愛知県立大学倫理委員会の承認を得て実施し、個人情報収集しないこと、研究協力への参加は自由であることおよび不参加による不利益等は生じないことを十分説明し、回答をもって同意を得た。

### 【結果及び考察】

臨床看護師37名から回答が得られ、「心電図モニター, 12誘導心電図の装着, 管理」, 「洗浄, 消毒, 滅菌の適切な選択」, 「体位ドレナージ」, 「バイタルサインの観察と解釈」, 「人工呼吸器の管理」, 「吸引」, 「静脈血採血と検体の取扱い」, 「体位変換, 褥そう予防」, 「歩行介助, 移動の介助, 移送」および「ベッドメイキング」の技術に関して、物理履修者と未履修者との間に有意な差が認められた。また、自分自身より経験の浅い看護師が未熟と感じる場面を問うた自由記載の回答をテキストマイニングした結果、「体位ドレナージ」, 「人工呼吸器の管理」, 「吸引」, 「静脈血採血と検体の取り扱い」および「体位変換, 褥そう予防」の5つの看護技術に関しては、該当する物理学の知識を有している方がより確実に実践できる可能性が明らかとなった。上記調査結果を基に学生対象の調査票を作成し、359名を対象に調査した結果、74名から回答が得られた(有効回答率20.6%)。物理履修者と未履修者に分け、物理学の単元ごとに理解度を調査したところ21単元中13単元で有意な差が認められた。さらに各単元を理解度の高低で二分したところ、「物理未履修学生に十分習得させるべき単元」, 「特に物理との関連に留意しなくても良い単元」および「物理の原理原則から教え直す必要のある単元」の3パターンに分類でき、効率的に看護技術を教授する方法を示すことができた。今後の課題として、データの信頼性, 妥当性の観点からさらに大規模な調査をおこなう必要があると考えられる。

## 175) 地域在住者を対象としたヘルスアセスメント教育における学生の学び

○渡邊裕子<sup>1</sup>, 井川由貴<sup>1</sup>, 平田良江<sup>1</sup>, 茂手木朱美<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 山梨県立大学看護学部

### 【目的】

本学のヘルスアセスメント教育では、1年次に修得する「ヘルスアセスメント基礎論(以下, 基礎論)」での学びを基盤に、2年次には「対象特性を考慮したアセスメント理論の実際(技術)」について学習することを目的に、地域在住の高齢者及び成人(以下, 地域在住者)の協力を得た実践的な学内演習を取り入れている。本研究では、地域在住者を対象とした実践的なヘルスアセスメント教育における学生の学びを分析し、今後の課題を明確にする。

### 【研究方法】

対象者は看護系大学の2年生100名。2年後期開講の「ヘルスアセスメント実践論(以下, 実践論)」で、41名の地域在住者の協力を得て、1名の対象者に学生2~3名でヘルスアセスメントを実践した。演習終了時に学生が記載した「講義・演習を通して最も学べたこと」を分析対象とし、研究協力に同意の得られた90名の自由記述をカテゴリ化した。

### 【倫理的配慮】

研究協力については、講義が全て終了した時期に、研究目的, 調査内容・方法, 協力の任意性・協力の有無が成績評価に影響しないこと・匿名性等の倫理的配慮事項について記載した文書と口頭で説明し同意書による同意を得た。

### 【結果・考察】

90名の104記録単位を分析した結果、「最も学べたこと」として【全人的理解(55.6%)】、【対象者と実際に接する大切さ(25.6%)】、【ヘルスアセスメントとは(20.0%)】、【学ぶ姿勢(6.7%)】、【個別性の理解(5.6%)】、【患者指導の重要性(2.2%)】の6カテゴリが抽出された。最も多かった【全人的理解】は、〈全人的の意味(4)〉〈全人的理解の意味(14)〉〈全人的な看護とは(8)〉〈多角的にみることの大切さ(24)〉の4サブカテゴリから構成された( ( )内は記録単位数)。演習で【全人的理解】の大切さと難しさを実感したことで、基礎論で学習した言葉の理解を深めていた。また、【対象者と実際に接する大切さ】では、〈紙上情報の限界(3)〉と〈五感を使って得られる情報の多さと大切さ(20)〉を実感しており、paper patientでは得られない醍醐味を学んでいた。

本科目では、基礎論での学びを具体的に活用しながら、少人数でリアルな状況で演習できたことで、【ヘルスアセスメントとは】では、〈ヘルスアセスメント時の姿勢・ポイント(12)〉も体得していた。本科目は基礎看護学実習に先行して開講するため、科目の位置づけにおける役割が大きい。学生は実習をイメージしながら、より真剣に事前学習や演習に取り組んでおり、さらに演習直後の臨地実習では1名の患者を受け持って看護過程を展開することから、その学習効果は高いと考える。今後は、実習を通してさらに学びが深められるような科目間の連携を強化していくことと、地域在住者の協力を得た演習が継続して実施できる体制づくりの充実が課題である。

176) 英語教育に対する看護教員の認識および取り組みに関する調査【第1報：看護教員の意識】

○高間木静香<sup>1</sup>、漆坂真弓<sup>1</sup>、北島麻衣子<sup>1</sup>、會津桂子<sup>1</sup>、  
工藤せい子<sup>1</sup>、齋藤久美子<sup>1</sup>、野戸結花<sup>1</sup>、  
米内山千賀子<sup>1</sup>、葛西敦子<sup>2</sup>、齋藤美紀子<sup>3</sup>、秋元安子<sup>4</sup>  
<sup>1</sup>弘前大学大学院保健学研究科、<sup>2</sup>弘前大学教育学部、<sup>3</sup>  
弘前学院大学看護学部、<sup>4</sup>財団法人双仁会厚生病院附属  
看護専門学校

【目的】

本調査では、看護学生に対して英語を取り入れた教育を行うことに対する看護教員の意識、取り組みの実態および課題を明らかにする。

【研究方法】

A県内の看護教員を対象に、2012年10～12月に無記名自記式質問紙調査を行った。質問項目は、対象者の属性、英語を取り入れた教育に関する教員の考え、教員自身の英語に対する取り組み、現在実施している英語を取り入れた教育についてである。統計処理にはSPSS11.5J for windowsを用いて、t検定、 $\chi^2$ 検定を行い、有意水準は5%とした。本研究は弘前大学大学院医学研究科倫理委員会の承認を得て行った。

【結果】

質問紙配布数157部のうち、回収数56部（回収率35.7%）、有効回答数54部（有効回答率96.4%）であった。対象者の所属機関は、大学35名（64.8%）、短期大学7名（13.0%）、専修学校7名（13.0%）、各種学校5名（9.3%）であった。英語を取り入れた教育を行うことの必要性について、51名（94.4%）が「大変必要」「やや必要」と考え、理由として「患者とのコミュニケーション」「医療用語の読解」「エビデンスに基づいた看護を学ぶ」「グローバルな視点を持つ」を挙げていた。看護学生の英語力の現状と卒業時到達目標について各4段階評価で回答してもらい比較した結果、全ての項目で現状の評価が有意に低かった。英語を取り入れることの困難さに対しては、41名（76.0%）が「大変感じている」「やや感じている」と答え、理由には「英語力がない」「苦手意識」「教育のノウハウがない」「時間的余裕がない」「学生の基礎学力の低下」等を挙げていた。教員自身の英語力について現状と目標（各4段階評価）を比較すると、全ての項目で現状の評価が有意に低かった。目標とする英語力の程度では、「一般的英会話能力」「一般的な文章作成」「英語文章の読解力」「医療関連文章の読解力」「医療に関する文章作成」「プレゼンテーション力」の項目で、大学の教員が有意に高かった。

【考察】

大多数の看護教員が、様々な対象者とのコミュニケーション、専門用語や外国文献の読解のために、看護学生に英語教育は必要と考え、英語力の向上を望んでいた。しかし、所属する教育機関を問わず、教員の英語力の自己評価は低かった。英語を取り入れた教育を行う難しさには、教員自身の英語力不足や苦手意識のほか、時間的余裕がない、教育のノウハウが分からない、学んだ英語を活用する場がない等の課題が明確になったことから、今後さらに検討を重ね英語を取り入れる手がかりを得る必要がある。

177) 英語教育に対する看護教員の意識および取り組みに関する調査【第2報：看護教員の取り組み】

○漆坂真弓<sup>1</sup>、高間木静香<sup>1</sup>、北島麻衣子<sup>1</sup>、會津桂子<sup>1</sup>、  
工藤せい子<sup>1</sup>、齋藤久美子<sup>1</sup>、野戸結花<sup>1</sup>、  
米内山千賀子<sup>1</sup>、葛西敦子<sup>2</sup>、齋藤美紀子<sup>3</sup>、秋元安子<sup>4</sup>  
<sup>1</sup>弘前大学大学院保健学研究科、<sup>2</sup>弘前大学教育学部、  
<sup>3</sup>弘前学院大学看護学部、<sup>4</sup>財団法人双仁会厚生病院附属  
看護専門学校

【目的】

本調査では、看護学生に対して英語を取り入れた教育を行うことに対する看護教員の意識、取り組みの実態および課題を明らかにする。

【研究方法】

A県内の看護教員を対象に、2012年10～12月に無記名自記式質問紙調査を行った。質問項目は、対象者の属性、英語を取り入れた教育に関する教員の考え、教員自身の英語に対する取り組み、現在実施している英語を取り入れた教育についてである。統計処理にはSPSS11.5J for windowsを用いて、t検定、 $\chi^2$ 検定を行い、有意水準は5%とした。本研究は弘前大学大学院医学研究科倫理委員会の承認を得て行った。

【結果】

質問紙配布数157部のうち、回収数56部（回収率35.7%）、有効回答数54部（有効回答率96.4%）であった。対象者の所属機関は、大学35名（64.8%）、短期大学7名（13.0%）、専修学校7名（13.0%）、各種学校5名（9.3%）であった。教員自身が英語に触れる機会は、「ほぼ毎日」5名（9.3%）、「週1回以上」13名（24.1%）、「月1回程度」10名（18.5%）であった。看護学生に対し英語を取り入れた教育を実施している教員は12名（22.2%）であり、所属機関別の比較では有意な差はなかった。実践内容には、「病名や症状、検査等の臨床用語の英語表記」「英語論文を読む」「看護の内容を英語で紹介する」等があった。英語力向上のために教員自身が行っていることは、「英語論文を読む」30名（55.6%）、「英会話の勉強」21名（38.9%）、「特にしていない」17名（31.5%）の順に多かった。所属機関別の比較では、「英語論文を読む」「国際学会で発表する」の項目において大学の教員が有意に多かった。今後英語力向上のために行うとしていることでは、「英会話」「TOEICを受ける」「外国人と交流する」「インターネットの活用」等を挙げていた。中には「現状の学習を継続する」という意見や、「現状では難しい」「必要性を感じていない」という意見もあった。

【考察】

第1報で報告したように94.4%の教員が英語の教育が必要と考えていた一方、実践状況は22.2%と多くはなかった。しかし、教員は英語に触れる機会を持ったり、語学力向上のために英会話学習をしたりと、自己研鑽を積んでいた。特に大学教員はより高い英語力を身に付けることを望み、英語に触れる機会を多く持つ、英語論文を読む、国際学会で発表するなど、学術的な面での英語力向上に努めていた。大学と大学以外の所属機関別の分析で有意な差がみられた理由には、両者の教育目標及び教育課程の相違があると推測される。



## 178) 看護師の看護実践能力向上に対する取り組み後の変化

○原 明子<sup>1</sup>, 川北敬美<sup>1</sup>, 松尾淳子<sup>1</sup>, 道重文子<sup>1</sup>

<sup>1</sup>大阪医科大学看護学部

### 【目的】

看護師の看護実践能力を向上させるために病院ごとに様々な取り組みがなされている。今回、看護部に所属する教育担当者（以下、看護実践師長という）が数ヶ月に渡り各病棟をラウンドし、一部の看護師が行っている看護ケアのアドバイスをを行った。介入を通して病院全体の看護実践能力がどのように変化したのか介入前後で比較した。

### 【研究方法】

調査期間は2011年9月～2012年9月。対象は350床を有するA病院の看護師で、自記式質問紙調査法による調査を行い（1回目配布数330部）、看護実践師長による病棟ラウンドを行った。病棟ラウンドは、看護実践師長2名が各病棟1名ずつ日勤帯に看護師1～3名の看護実践場面を観察し、気付いた点のアドバイスを行った。その後、自記式質問紙調査法による調査を行った（2回目配布数305部）。質問紙は、1）基本属性、2）クリティカルシンキング志向性尺度：30項目7件法、3）看護実践能力自己評価尺度（CNCSS）：「実施の頻度」および「達成の程度」各64項目4件法（以下、看護実践能力という）である。調査は、研究の趣旨が書かれた用紙と質問用紙を封筒に入れ、看護部を通し看護師に配布した。各部署に回収箱を2週間設置し、回収されたものによって同意が得られたこととした。分析は、介入前後のクリティカルシンキング志向性、看護実践能力の平均点の比較をt検定で、クリティカルシンキング志向性と看護実践能力との間はピアソンの積率相関係数で求めた。本研究はA病院の倫理委員会の承認を得て行った。

### 【結果】

アンケート回収数は、1回目176名（回収率53.3%）、有効回答数149名（回答率84.7%）、2回目229名（回収率75.1%）、有効回答数185名（回答率80.8%）であった。1回目の平均年齢35.6±11.97歳、看護師平均経験年数12.4±8.26年、2回目の平均年齢35.6±8.50歳、看護師平均経験年数11.9±8.18年であった。クリティカルシンキング志向性の平均点は、1回目136.7±19.45点、2回目135.8±18.99点で差はなかった。看護実践能力「実施の頻度」の平均点は、1回目189.2±26.10点、2回目186.5±25.64点、「達成の程度」の平均点は、1回目174.8±29.53点、2回目176.0±29.21点で差はなかった。クリティカルシンキング志向性と看護実践能力「実施の頻度」、「達成の程度」との間では正の相関があった（2回目  $r = .443$ ,  $P = < .001$ ;  $r = .445$ ,  $P = < .001$ ）。

### 【考察】

介入前後のクリティカルシンキング志向性と看護実践能力に差がみられなかったことについて、個人の行動の変化は、知識や態度の変化以上に時間や困難さを増すことから、介入直後の調査では結果として表れなかったことが考えられる。しかし、看護ケアへのアドバイスという個人行動への刺激を行うことが、組織全体への影響をもたらすことが推測される。

## 179) 看護師教育の教育課程別比較による学生の技術経験状況と自信度

○椎葉美千代<sup>1</sup>, 新地裕子<sup>1</sup>, 福澤雪子<sup>1</sup>

<sup>1</sup>福岡女学院看護大学看護学部看護学科

### 【目的】

看護大学を卒業した看護師は技術力に課題があり、就職後1年以内の早期離職率が高いことが指摘されている。本研究では、教育課程別に看護学実習における技術経験状況および卒業時の技術の自信度を明らかにし、大学における技術教育について検討した。

### 【研究方法】

九州沖縄、中国、関西、関東地方の最終学年の学生309名（大学7施設75名、3年課程養成所8施設85名、2年課程養成所7施設70名、高等学校5年一貫8施設79名）に、自己記入式質問紙調査を、2011年1月15日～3月15日に実施した。「看護師教育の技術項目と卒業時の到達度」を参考に、看護学実習において実施または見学ができる13項目109種類の技術について、経験は2件法、自信度は0～100の10間隔のスケールを用いて調査した。Kruskal WallisおよびScheffの多重比較検定を用いて教育課程別の技術経験と自信度を項目別に比較し、Mann-WhitneyのU検定を用いて大学と他の3課程の技術経験と自信度を種類別に比較した。技術経験と自信度の関係についてはSpearmanの順位相関係数を求めた。質問紙に協力の自由、匿名性の保持、情報の管理等について説明した文書を添付し、郵送法による返信をもって同意とした。本研究は、所属していた大学の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

### 【結果】

質問紙の回収は231名（74.8%）、有効回答は228名（73.8%）であり、内訳は大学48名（64.0%）、3年課程養成所68名（80.0%）、2年課程養成所49名（70.0%）、高等学校5年一貫63名（79.7%）であった。看護技術の項目別の比較では、13項目中12項目に有意差を認め（ $p < 0.01$ ）、技術経験・自信度ともに大学が低く、3年課程養成所が高かった。2年課程養成所と高等学校5年一貫の技術経験に差は認めなかった。2年課程養成所の自信度は3年課程養成所と同様に高く、高等学校5年一貫の自信度は大学に次いで低かった。看護技術の種類別比較では、109種類中47種類が技術経験・自信度ともに有意差を認め（ $p < 0.05$ ）、大学が他の3課程より低かった。経験の差が大きかった技術は「病態・機能に合わせた口腔ケアの計画立案」「ベッドからストレッチャーへの移乗」「失禁患者のケア」等であった。全課程の技術経験と自信度の相関は $r = 0.349$ であり、大学においては $r = 0.412$ であった。

### 【考察】

大学は他の3課程に比べて、卒業時の技術経験・自信度ともに低いことが明らかになった。大学の学生の技術経験と自信度には正の相関を認めており、学内演習や看護学実習における学生の技術経験の機会を増やす必要があると考えられた。大学の看護学実習における技術教育は、他の3課程と比べて経験の差が大きかった技術の学習状況を見直すことによって充実を図ることができると示唆された。

## 180) 臨地実習指導者養成講習会におけるプロジェクト学習の試み -5年間のまとめ-

○堀 良子<sup>1</sup>

<sup>1</sup>北里大学看護学部看護学科

### 【目的】

本研究の目的は、5年間実施した中堅指導者層看護師に対する「クリティカルシンキング」や「コンピテンシー」を志向したプロジェクト学習法の成果と課題を探ることである。

### 【研究方法】

対象と方法：A県臨地実習指導者養成講習会の「看護技術の検証とその実践的計画」の単元で、日頃実践している看護技術に関する疑問や関心を抱いているテーマを取り上げ、同じ関心を持つ参加者がチームを組んで現実の看護に活用できる成果を得ることを目標としたプロジェクト学習を行い、受講者延べ224名を対象に調査した。

期間：平成19年～23年の8月～9月、1回3～6時間を間隔をあけ4回に分け実施した。

調査方法：鈴木敏恵<sup>1)</sup>のプロジェクト学習の方法と評価法を参考に、学習後の自己評価として〈プロジェクトへの意思〉や〈自主性とコラボレーション〉など33項目を5段階で尋ね、学んだことを自由に記述してもらった。これらを実験得点とテキストマイニング法を取り入れた分析により記述した。内容をまとめて発表することについては受講者の同意を得て行った。

### 【結果】

挙げられた看護技術のテーマは、「褥瘡予防の体位変換」「信頼関係を築くコミュニケーション」「感染予防の口腔ケア」「蒸拭タオル清拭の効果」などであり、毎年7～8テーマでチームを編成して取り組んだ。受講生の自己評価の項目毎の平均得点は、〈プロジェクトへの意思〉については3.80、〈自主性とコラボレーション〉4.00、〈情報リサーチとリテラシー〉3.61、〈成果／作品とプレゼンテーション〉3.96であった。この中で受講生が学んだことは、「皆で協力して取り組むことの大切さ・楽しさ・難しさ」「現状の看護を常に進化していく必要性」「疑問を持つことの大切さ」「人の意見を聞くこと、柔軟に受け入れることの大切さ」等であった。また、この学習のできるようになったことは、「文献検索方法」や「パワーポイントを活用した資料の作り方・発表のしかた」「自分の意見を伝え、他人の意見を聞いてまとめること」等が挙げられた。感想として、「とても大変であったが達成感が大きい」「時間が足りない」「施設の情報交換が学会等でできない学びとなった」等が挙げられた。

### 【考察】

受講者はこの学習に対する取り組みを高く評価していた。試みた学習法は、自らの関心に基づいて必要な知識を得ていくノウハウと態度形成、根拠に基づいた意見を効果的に述べること、仲間意識の涵養、他人と協力して取り組み成果を得る力などの育成につながる事が示唆された。一方、達成感の大きさにはチーム化が鍵を握るなどチーム編成のあり方や時間設定および学習法の効果的なセッションの持ち方などに課題が残った。

### 参考文献

1) 鈴木敏恵著：意志ある学び未来教育2 総合的な学習プロジェクト学習，教育同人社，2003.

## 181) 新人看護師の言語的コミュニケーション困難な臥床患者との関係構築の様相

○山口みのり<sup>1</sup>

<sup>1</sup>関東学院大学看護学部

### 【目的】

新人看護師が、言語的コミュニケーション困難な臥床患者と関係を築いていく様相を明らかにする。

### 【方法】

研究デザイン：質的記述的研究。研究参加者：2009年・2010年の4月に就職した新人看護師3名。調査場所：研究者とは調査以外の関係をもたないA病院の内科，内科外科混合病棟の2病棟。データ収集期間：2009年・2010年の5～8月。データ収集方法：参加者1名につき週1日，参加者が援助する様子を研究者が「参加者としての観察者」（佐藤2002）の立場で参加観察した。また援助直後，2週間に1回勤務後に半構成的面接を計72回行い，その場面で感じたことを質問した。そのなかで，意識レベルが低く自ら動くことのできない言語的コミュニケーション困難な臥床患者にかかわった場面データを収集した。分析方法：参加者が一人の患者に1ヶ月以上継続してかかわった場面を再構成し，経時的に記述した。そこで変化の見られた転換点を探り，その期ごとに新人看護師と患者との関係性において共通に見出された特徴にテーマをつけた。倫理的配慮：日本赤十字看護大学研究倫理審査委員会，A病院研究倫理委員会の承認を得た。参加者には研究の参加協力は自由意志であること，参加の拒否や途中辞退が可能であること，その場合も一切の不利益が生じないことを説明して同意を得た。また，新人看護師が受け持った患者の家族，援助に同行する先輩看護師にも研究の趣旨を説明し協力を得た。研究で得られた情報は研究以外の目的で使用せず，データは個人や施設が特定されないよう匿名で処理し，プライバシーの厳守とデータの厳重保管を徹底して，論文としてまとめ公表予定であることを説明した。

### 【結果】

第1期：新人看護師は，患者を受け持った直後は，〈患者さんをこわいと感じる〉と話し，患者に近づけない，触れられない，患者を人として見られないことが続いた。これはコミュニケーションがとれたり声かけに反応があったりする患者とは違う反応であった。第2期：新人看護師は援助を繰り返すことで，患者に近づいて触れることに抵抗がなくなり〈患者に慣れてくる〉様子がみられた。第3期：新人看護師は，患者に援助することがこわくなくなると，〈患者の些細な反応に気づく〉ようになった。すると，患者を人格ある人間としてみるができるようになり，患者に声をかけてみたり思いを寄せたりするようになった。

### 【考察】

新人看護師が抱いた患者への恐怖心は，自分の技術が未熟であるというだけでなく，患者を人としてとらえることができないという思いによるものであった。しかし，援助を繰り返すことによって，一見無反応な患者にもわずかな反応があることがわかると，より患者との距離を縮めようと積極的にかかわり関係を構築しようとしていた。

182) 看護補助者を対象にした学習プログラム作成の試み (第3報) ～介護福祉士と共同での指導を通して～

○櫻井紀子<sup>1</sup>, 灘村昌子<sup>1</sup>, 西島澄子<sup>1</sup>, 木間美津子<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>医療法人社団浅ノ川心臓血管センター金沢循環器病院

【目的】

療養病棟では看護業務を補助する看護補助者が半数を占めており、重症化する病棟における看護チームの一員として更に高度な知識や技術が求められる。第1報では介護福祉士が参画した学習プログラムを1病棟で実践し有効であった結果を報告し、第2報では評価シートを活用した学習プログラムを実践し有効であった結果を報告した。今回は当病院で初めて介護福祉士を講師とし、一般病棟も含めた全看護補助者へ講義した結果を報告する。

【研究方法】

対象：看護補助者44名(介護福祉士12名, 無資格者32名)  
 期間：2012年8月20日～11月30日  
 方法：講師に看護補助者リーダー(以後リーダーとする)として介護福祉士を採用し院内看護補助者研修会を4回実施。1. 看護師が講義内容を作成。講義内容の選択は看護部教育委員会が看護補助者加算の取得に向けて計画。1) 口腔ケア・食事介助, 2) 排泄介助, 3) 清潔・入浴介助, 4) 体位変換・移乗・移動介助。2. 講師となるリーダー全員に資料を渡し、意見を聞き内容の追加修正。師長とリーダーが実際のケア場面の設定とシミュレーションを含む打合わせを行う。3. 3グループに分け5分程度資料に沿った講義の後、リーダーが実際にやって見せ、受講者が演習を行う。演習中はリーダーがアドバイザーとして各グループの指導に当たる。4. 受講後、理解度(4段階)についてアンケート調査を実施し比較検討した。

【倫理的配慮】

研究目的・方法を説明し、本研究で得られた情報の公開は個人が特定できないようにする事、研究以外には使用しない事を書面にて説明し同意を得た。

【結果】

全項目の理解度の平均は療養病棟看護補助者と一般病棟看護補助者ではそれぞれ「わかる」88.75%, 54%「どちらかといえばわかる」11%, 43%「どちらかといえばわからない」0.25%, 3%であった。「わからない」という項目の回答はなかった。受講者からは「すぐに業務に活用できる」、リーダーからは「研修終了後にもっと教えた内容が浮かんできた」などの意見があった。

【考察】

当院ではこれまで看護補助者を対象にした研修会を看護師が開催してきたが、3年前からリーダーを育成する取り組みを行い、2012年度はリーダーによる院内研修を開催するまでに至った。今回は具体的な所まで落とし込んだ状況設定での指導は、院内の看護補助者の知識や技術の向上とともにレベル統一を図る事もできた。リーダーにとっては自分の資格や知識を活かせる機会となり、後輩育成の意欲につながった。介護福祉士の資格を持つ看護補助者の能力を最大限に活用できるシステムを構築する事は、看護師が看護業務に専念でき、看護ケアの質向上につながると思える。

183) 成人看護学実習における手術室実習での学びの構造

○河相てる美<sup>1</sup>, 中田智子<sup>1</sup>, 今川孝枝<sup>1</sup>, 原 元子<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>富山福祉短期大学看護学科

【目的】

A短期大学看護学科では成人看護学実習(急性期)4週間のうち手術室実習を1週間実施している。そこで、本研究は手術室実習における学生の学びを明らかにし、今後の手術室実習の指導の示唆を得ることを目的とする。

【研究方法】

対象：A短期大学看護学科3年次学生69人  
 方法：実習記録の手術室実習を終えての学びの記載内容よりラベルを作成した。KJ法により分析を行った。研究者4名で討議し、合意形成を行いながら集約を繰り返した。  
 期間：2012年10月から2013年1月  
 倫理的配慮：実習記録提出後、学生に研究の趣旨、目的や対象者の権利、匿名性の保持、研究の参加の有無にかかわらず成績には影響しないことを説明し書面で同意を得た。また本研究は、所属機関の倫理委員会の承諾を得た。

【結果】

実習記録の手術室実習を終えての学びの記載内容から151のラベルを作成し、意味内容の類似性により集約を繰り返した。その結果、1段階は59, 2段階で23, 3段階では15の島に集約し、最終的には5つの島(連携, 予測した行動, 知識の宝庫, 安全な医療の提供, 安心できる信頼関係)を形成した。

【考察】

学生は実習経過の中で、手術室看護師は他職種や病棟看護師との連携が大切であり、疾患や術式に関する知識に裏付けられた予測した行動の必要性を感じた。また、安全な医療の提供のため清潔な環境維持や薬品・器材の点検を行い、合併症予防のために工夫し、マニュアルを遵守してミスを予防していることを学んだ。そして、学生は術前・術後訪問を通してコミュニケーション技術の大切さを体験し、手術室看護師が患者や家族の不安の軽減に努め、安心できる存在となり患者と信頼関係を築いていることを学んだ。今後の手術室実習においては、手術室看護師の役割を知り、周手術期看護における術前・術後看護に結びつけた術中の看護について学生の理解が深まる実習支援が大切となることが示唆された。

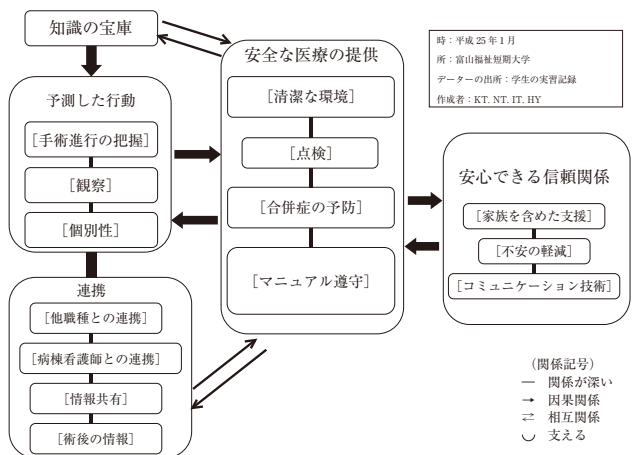


図. 手術室実習での学びの構造

## 184) 高校生対象の講義においてクイズとリモコン式数字入力システムを使用したことによる効果

○坂井恵子<sup>1</sup>, 酒井桂子<sup>1</sup>, 松井優子<sup>1</sup>, 久司一葉<sup>1</sup>,  
岡山未来<sup>1</sup>

<sup>1</sup>金沢医科大学看護学部

### 【目的】

講義法は多人数の受講生に情報伝達できるメリットがあるが、独善的になりやすいデメリットがある。クリッカーは、受講生が授業に積極的に参加する「アクティブラーニング」を目的としたリモコン式の数字入力システムで、受講生が端末に数字を入力すると自動的に集計され画面に表示される。本研究の目的は、講義の発問-回答方法としてクイズやクリッカーを使用した効果を評価することである。なお、高校生を対象としたのは、教員との関係性がなく評価できることから、看護学生の授業を想定したプレ調査とした。

### 【研究方法】

対象：オープンキャンパスの講義に参加し研究趣旨に同意が得られた、高校生80名。データ収集期間：平成24年7～8月。方法：2日間のオープンキャンパスの参加者をそれぞれ無作為に2群に分け、ナイチンゲールの生い立ちと業績について25分間の同じ内容の講義を計4回実施した。群分けは講義形式の群（講義群）、講義形式にクイズ形式の発問-回答とクリッカーを使用した群（クリッカー群）とした。調査項目：講義後アンケート用紙を行い、講義の理解度として生誕地、入学年齢、看護教育、野戦病院の地名、看護の本質、観察の重要性の6項目を○×で、講義の参加度として「参加できた感じが持てたか」に対して「とてもそう思う」「少し思う」「あまり思わない」「全く思わない」の4段階で回答を得た。分析：統計ソフトJMP9で講義群、クリッカー群の正答率で $\chi^2$ 検定、参加度は点数化しWilcoxon検定を算出。倫理的配慮：参加者に口頭及び書面で研究目的と方法を説明し、調査用紙の提出を以て同意とした。研究者所属機関の倫理審査委員会の承認を得た。

### 【結果】

対象者80名の内訳は、高校3年生57名（71%）、2年生17名（21%）、1年生6名（8%）で、講義群39名（49%）、クリッカー群41名（51%）だった。正答率は、生誕地（講義群、クリッカー群の順に以下記載）67%、88%。入学年齢95%、98%。看護教育95%、100%。野戦病院の地名49%、54%。看護の本質95%、90%。観察の重要性87%、85%であった。講義群よりクリッカー群のほうが有意に正答が高かったものは生誕地（ $P = .022$ ）であった。参加度は、講義群（ $3.53 \pm 0.50$ ）より、クリッカー群（ $3.75 \pm 0.43$ ）のほうが有意に高かった（ $P = .040$ ）。

### 【考察】

高校生対象の講義にクイズとクリッカーを使用した結果、理解度の1項目と参加度においてクリッカー群が有意に高かった。顕著な差が認められなかったのは、今回の質問が比較的簡単であったこと、看護系大学への関心が高い参加者であったことが考えられる。クリッカーは授業途中にリアルタイムで集計しフィードバックできることで興味関心を高めることから、授業目標や内容によって活用可能性があり、今後さらに検討を図りたい。

## 185) テキストマイニングによる看護学生の臨地実習中でのヒヤリハットの分析

○藤本ひとみ<sup>1</sup>, 高間静子<sup>1</sup>, 上野栄一<sup>2</sup>

<sup>1</sup>福井医療短期大学看護学科, <sup>2</sup>福井大学医学部看護学科

### 【目的】

看護学生が臨地実習中にヒヤリハットを体験した内容をテキストマイニングを用いて分析し、今後の看護学生の臨地実習における安全行動を指導する上での基礎資料とする。

### 【研究方法】

1. 対象者：A短期大学の3年生に在籍し、平成24年3月から11月に臨地実習に参加した学生53名。2. 調査内容：看護学生が臨地実習中にヒヤリハットした内容、原因、実習場所、領域、患者の特徴等について自記式質問紙法で回答を求めた。3. 分析方法：データの分析は、ソフトウェアText Mining Studio3.1（理数システム）を使用し分析した。4. 調査期間：平成24年12月から1週間の留置き法とした。5. 倫理的配慮：研究者が所属する倫理審査委員会の承認を得た。

### 【結果】

調査の同意が得られた38名（71%）、女性35名、男性3名であった。看護学生が実習中にヒヤリハットした実習領域で多い順にみると「成人（回復）」「老年」「精神」「成人（急性期）」「小児」「統合」であった。またヒヤリハットした場所をみると「病室」「浴室」「ベット上」「廊下」「洗面所」「トイレ」「エレベーター」「ホール」の順で多かった。また、患者の特徴をみると「認知症」、「片麻痺」、「筋力低下」等の順で多かった。頻度分析の単語頻度解析について看護学生が臨地実習中にヒヤリハットした内容、原因についてデータの品詞別出現回数を頻出順にみると名詞：15回、動詞：4回、形容詞：1回等であった。また、最も頻度の多い単語は「患者」「一人」「車椅子」等であった。係り受け頻度解析は、品詞フィルタのイメージを選択した結果「声掛け-不十分」「学生-悪い」「患者-熱い」「帰宅願望-強い」「理解力-悪い」等であった。話題分析は、看護学生がヒヤリハットした内容、原因についての回答中より関連の強い言葉同士をまとめてグループを作成し、このグループを1個づつ話題としてとらえ文章の特徴をより意味論的に分析し共起ルールを抽出し、ことばネットワーク図を示した。その結果「車椅子」、「患者」、「一人」等が関連を多く含んでいた。

### 【考察】

ヒヤリハットの自由記載の分析から患者の特徴として、認知症、片麻痺、筋力低下、脳梗塞、右不全麻痺、左側空間無視、徘徊等の疾患や症状を中心に考えていた。また、共起ネットワーク分析からは、車椅子と患者に係るヒヤリハットの2つの大きな要因について認識をしていた。これらは、看護学生の捕らえた患者の特徴の実態であり、ヒヤリハット予防の視点として臨床、教育側は学生へ指導する必要があると考える。

### 【結論】

ヒヤリハットの原因としては、車椅子と患者への直接的ケアが要因となっていることから、安全教育には、車椅子と移乗にともなうケアや声かけの重要性が示された。

## 186) ME機器の操作と状況判断の修得に向けた行動目標の到達度の検討

○占部美恵<sup>1</sup>, 光木幸子<sup>1</sup>, 毛利貴子<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>京都府立医科大学医学部看護学科

### 【目的】

A大学には、看護実践能力の向上をねらいとした授業「看護の統合と実践」の中に「ME機器の理論と操作」の単元がある。授業の目標に、輸液ポンプ・シリンジポンプ・低圧持続吸引器・人工呼吸器（以下ME機器）の原理・種類と適用の理解および異常時の対処、安全な操作、輸液ポンプのトラブルシューティングにおける観察・状況判断をあげている。授業の内容は、1）講義、2）臨床工学技師の指導によるME機器の操作の体験または見学、3）臨床看護師による輸液ポンプ使用時のトラブルシューティング時の対応の見学を実施した。本研究は、ME機器の操作と状況判断の習得に向け、行動目標の到達度の関連を調査した。

### 【方法】

平成24年11月に本授業を受講した4年生に対して、研究目的及び方法、匿名性の保障、研究に協力しなくても成績に一切関係がなく不利益を被らないことを説明し、書面にて同意が得られた20名（95.2%）を対象にした。授業後に、専門領域の臨地実習におけるME機器の見学および操作の経験、および行動目標に沿ったME機器の「原理・適用」、「安全管理」、「正しい作動」、「輸液ポンプ施行中の観察点」、「輸液ポンプ施行中の状況判断」について、「よくできた」～「できなかった」の4段階の質問紙調査を実施した。分析は、Spearmanの相関係数にて行動目標の達成度の関連を調べた。

### 【結果】

臨地実習にて受け持ちケースがME機器を使用していたのは、輸液ポンプ15名（71%）、シリンジポンプ14名（67%）、低圧持続吸引器16名（76%）、人工呼吸器6名（29%）だった。臨地実習でME機器の操作を体験したのは、輸液ポンプ6名（29%）、シリンジポンプ6名（29%）、低圧持続吸引器3名（14%）だった。人工呼吸器の操作を見学した学生は11名（52%）だった。これらの授業前の経験と行動目標の達成において、相関はなかった。相関がみられた項目は、「輸液ポンプの施行中の状況判断」において「原理、種類と使用適用」、「安全管理」、「正しい作動」（ $R = .471, .538, .524 : p < 0.05$ ）、「観察点」（ $R = .663 : p < 0.01$ ）だった。シリンジポンプ、低圧持続吸引器では、「正しい作動」において「安全管理」（ $R = .524, .503 : p < 0.05$ ）だった。

### 【考察】

ME機器施行時の状況判断ができたと学生が自覚できるためには、輸液ポンプにおける結果が示したように、ME機器の原理や種類、適用などの基本的知識、安全管理、観察点の理解、実際に作動させる体験が重要ただけではなく、臨床看護師の対応の場面を通して観察点や状況判断を問う機会を設けたことにより、講義や演習の学びを統合させることができたと考えられる。（本研究は文部科学省平成21年度助成事業「看護職キャリアシステム構築プラン」の一部である。）

## 187) 基礎看護技術演習に協働した臨床看護師の実習指導への影響

○渡邊郁子<sup>1</sup>, 滝内隆子<sup>1</sup>, 小松妙子<sup>1</sup>, 竹下美恵子<sup>1</sup>, 岡本千尋<sup>1</sup>, 伊藤友美<sup>2</sup>  
<sup>1</sup>岐阜大学医学部看護学科, <sup>2</sup>岐阜大学医学部附属病院

### 【目的】

A大学基礎看護学分野は、平成22年度からA大学医学部附属病院（以下、A病院）の臨床看護師と協働して基礎看護技術演習（以下、技術演習）を実施している。協働の目的は看護基礎教育における看護技術の教育内容・教育方法の理解、指導者としての指導力の向上である。本研究は技術演習を協働で実施した臨床看護師の実習指導に及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。

### 【研究方法】

調査対象：平成23年度に技術演習に協働したA病院臨床看護師28名  
 調査期間：平成24年6月

データ収集：技術演習に協働した体験が実習指導に及ぼす影響を「指導方法」「指導内容」「学生へのフィードバック」「学生をとりまく人々との関係作り」「学生指導者としての自己啓発・自己成長の姿勢」の5項目について自由記述式質問紙を作成し配布した。無記名、留め置き調査法により回答を依頼した。分析：Berelson, Bの内容分析を用いた。臨床看護師が実習指導に影響があったことに対する回答1つを含む分節、文章を記録単位とした。対象個々の記録単位は、内容に共通性のあるものを集約し同一記録単位群としカテゴリ化した。カテゴリの一致率は69%以上であった。

倫理的配慮：個人情報保護の厳守等を文書で説明し質問紙の回収をもって同意が得られたとした。本研究はA病院倫理委員会およびA大学倫理審査委員会で承認を得て実施した。

### 【結果】

回収率は53.6%、対象の平均年齢は33.2±7.9歳、看護師継続年数は10.33±6.5年、A病院での継続年数は8.9年±6.7年であった。形成されたカテゴリを表1に示した。

### 【考察】

臨床看護師が技術演習に協働することは、学生の学習内容や反応を意識した実習指導の実践に活用できることが示唆された。

表1 基礎看護技術演習に協働した臨床看護師の実習指導への影響  
 n = 15

項目 (記録単位数)	カテゴリ名	記録単位数 (%)
指導方法 (20)	学生個々の反応に応じた指導	6 (30.0)
	原則に基づく指導姿勢	4 (20.0)
	計画性のある指導	3 (15.0)
	学習姿勢をふまえた指導	3 (15.0)
	学習内容をふまえた指導	2 (10.0)
指導内容 (7)	教授者の視点に沿った指導内容	4 (57.1)
	学習者の視点に沿った指導内容	3 (42.9)
学生への フィードバック (20)	学習内容に注目したフィードバック	5 (25.0)
	フィードバック方法の工夫	5 (25.0)
	肯定的なフィードバック	4 (20.0)
	学生の反応を意識したフィードバック	4 (20.0)
学生をとりまく 人々との 関係作り (16)	具体性のあるフィードバック	2 (10.0)
	教員との連携	8 (50.0)
	スタッフへの協力依頼	4 (25.0)
	上司・スタッフへの報告	2 (12.5)
自己啓発・ 自己成長の姿勢 (15)	雰囲気形成	2 (12.5)
	指導への関心	6 (40.0)
	学生理解への意識	4 (26.7)
	自己学習への動機づけ	4 (26.7)
	指導者姿勢の提示	1 (6.6)

## 188) がん看護についての講義前の関心の分析

○渋谷えり子<sup>1</sup>, 平野裕子<sup>1</sup>

<sup>1</sup>埼玉県立大学保健医療福祉学部看護学科

### 【目的】

がん看護教育の検討のために、がん看護講義前の関心を調査・分析し、教育的課題を明らかにする。

### 【研究方法】

がん看護講義前の看護系大学2年生121人を対象に、がん看護に関する質問紙調査を実施した。質問内容は、がんのイメージ、がん看護についての関心の有無とその理由、講義で知りたいこと、理解したいことについてである。倫理的配慮は、紙面と口頭で、目的と方法、本人が特定されないように取り扱うこと、研究協力は任意で、成績評価は一切関係ないこと等を説明し、調査用紙提出にて同意を得ることとし、調査用紙の回収には、回収箱を設置した。なお、調査は成績評価と関係のない時期（講義6ヵ月前）に実施した。また、A大学倫理委員会の承認を得て実施した。

### 【結果】

調査協力は、106名（回収率87.7%）得られた。調査時の対象学生の科目履修状況は、解剖学、生理学、病理学、薬理学、看護概論、基礎看護学の一部およびライフサイクル看護論が、1年次に終了しており、内科学、外科学の講義が始まった時期であった。

講義前のがんのイメージでは、「死」46名、「完治困難」34名、「苦痛」26名、「辛い」25名、「怖い」22名などマイナスのイメージが多かった。がん看護についての関心は、「関心あり」101名とほとんどの学生は、関心をもっていた。理由は、「身近な人ががんである。あるいは、がんで死亡」が38名と最も多く、次いで、「死因第一位」24名、「がんは多い病気」21名、「心理状態に関すること」11名などであった。また、講義で知りたいこと、理解したいことについては、最も多かったのは、がんの発生日、機序や症状など「病態に関すること」30名であった。次いで、「患者の心理」21名、「治療」19名、「ホスピス・ターミナルケア」15名、「看護に関すること」13名で、がんとの共存や長期生存者への支援やセルフケアに関する記述はなかった。

### 【考察】

がん医療の進歩により、我が国の全がん5年生存率は約57%で、長期生存が可能になり、がんサバイバー（体験者・生存者）が増加している。がん向き合い、共存していくために支援することが看護に求められている。しかし、学生は、講義で知りたい内容として、病態や治療など医学的側面への関心とターミナルケアへの関心はもっていたが、がんとの共存について記述や長期生存者に対するセルフケアに関する記述はなかった。これは、がんのイメージとして「死」や「完治困難」「怖い」「辛い」といったマイナスのイメージの影響が強いことが考えられ、がんサバイバーとしての概念は、浸透していないことが明らかになった。今回の結果からは、がん看護では、がんサバイバーの視点からの教育の必要性が示唆された。

## 189) モデル・コア・カリキュラムを基盤とした教育課程を受講した学生の学習到達の自己評価の変化

○松本賢哉<sup>1</sup>, 井上 郁<sup>1</sup>, 河原宣子<sup>1</sup>

<sup>1</sup>京都橘大学看護学部

### 【目的】

平成23年3月に、学士課程教育のコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標（大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会）が提示された。A大学は2009年度よりモデル・コア・カリキュラムを基盤としたカリキュラム（本カリキュラムは教育目標と科目群を対応させたマトリックス型カリキュラム（以下、マトリックス型カリキュラム）である。）を作成・導入している。今回、マトリックス型カリキュラムを受講した学生自身の評価について調査・検討し、特に、最終学年である4回生時にどのような学びを得たかを明らかにするために3回生時と比較した。

### 【研究方法】

無記名選択式調査用紙によるアンケート。[1. 調査対象] A大学のマトリックス型カリキュラムの学生 [2. 調査時期] 同一学生3回生終了時と4回生終了時。[3. 調査内容] 文部科学省諮問機関「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会」が作成した「学士課程版看護実践能力と到達目標」に研究参加者の学年の記入欄を追加した調査用紙全8ページ。調査用紙の使用について「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会」から了解を得た。[4. 分析方法] 調査用紙の回答結果より基本統計量を算出し、縦断的データに関しては独立したt検定を用いて分析した。[5. 倫理的配慮] 本研究は発表者所属機関の研究倫理委員会の承認を得た。回収はポストを設置し自由意思とした。

### 【結果】

アンケート回収は3回生終了時37名（回収率38.1%）4回生終了時85名（回収率87.6%）であった。「ヒューマンケアの基本に関する実践能力」と「特定の健康課題に対応する実践能力」と「ケア環境とチーム体制整備に関する実践能力」が3回生終了時に比して4回生終了時で有意に高かった（ $t=1.99$   $p=0.04$   $t=2.02$   $p=0.04$   $t=2.20$   $p=0.03$ ）。しかし「根拠に基づく看護を計画的に実践する能力」「専門職者として研鑽し続ける基本能力」には差がなかった。

### 【考察】

A大学の4回生時到達目標は、「自ら問題や課題を見出しそれを解決できる」「学んだ教養や感性を生かせる」「倫理観に基づいた実践」「人によりそう看護の実践」「文化を考慮した看護の実践」「コーディネート能力・マネジメント能力の向上」「自らの看護実践から看護学的知見を得る」といった、あらゆる看護の場における「人によりそう看護」の実践と創造に向けた統合である。今回の結果は、それぞれの学生が自身の関心が高い看護活動の場で実習や研究を実施することで、より学習を深化させたものと考えられる。しかし、有意差がなかった「根拠に基づく看護を計画的に実践する能力」「専門職者として研鑽し続ける基本能力」については、今後、到達目標や教育内容等を見直していく必要性が示唆された。

## 190) A看護系大学生における職業コミットメントの入学から1年後の変化

○大西修平<sup>1</sup>, 鈴木幸子<sup>2</sup>, 森岡郁晴<sup>2</sup>

<sup>1</sup>和歌山県立医科大学付属病院,

<sup>2</sup>和歌山県立医科大学保健看護学部

### 【目的】

昨年は看護系大学生1年生, 2年生の職業性コミットメントの2年間の変化から, 職業コミットメント, その中でも情緒的コミットメントは入学後に高い値であり, 2年生以降は低値で推移する可能性を報告した。看護系大学生の情緒的コミットメントは入学後から2年間にわたり低下するという報告(矢野ら2006)にもあるように, 情緒的コミットメントは入学してから1年間の変化が大きいと考えられる。しかしその時期の変化について検討した報告は少ない。そこで本研究は, 平成22年度の1年生と平成23年度の1年生の職業コミットメントを1年後と比較し, 職業コミットメントの学年進行に伴う変化を検討した。

### 【方法】

対象は, A看護系大学の平成22年度の1年生83名, 平成23年度の1年生82名であった。これらの対象に対し, 1年生の4月と1年後の4月に調査を実施した。調査は無記名自記式質問紙で行った。調査には, 職業コミットメント尺度(矢野ら, 2006)を用いた。

### 【結果】

有効回答数は, 平成22年度の1年生79名(95.1%), 1年後77名(92.7%), 平成23年度の1年生80名(97.5%), 1年後81名(98.7%)であった。職業コミットメント尺度の平均値を表に示す。職業コミットメント尺度は両年度とも1年後に低値を示したが, 有意差はなかった。下位尺度では, 情緒的コミットメントにおいて, 両年度ともに有意に低下していた。他の下位尺度では, 両年度とも1年後に有意差は認められなかった。

### 【考察】

両年度とも情緒的コミットメントは, 1年後に低下した。情緒的コミットメントは学年の特徴にかかわらず, 入学後1年間で低下する傾向が示唆された。情緒的コミットメントは職業に対する愛着や好意的感情を示すことから, この気持ちを低下させない支援が必要である。

表. 職業コミットメント尺度の平均値の比較

	22年度1年生 n = 79	1年後 n = 77	23年度1年生 n = 80	1年後 n = 81
職業C	66.0	62.7	65.2	64.3
情緒的C	23.7*	19.9	23.3*	20.5
計算的C	23.5	23.0	23.1	23.9
規範的C	10.1	9.7	9.5	9.5
世間体C	8.7	10.1	9.2	10.5

C:コミットメント \*p<0.05 (t検定, 1年後との比較)

## 191) 看護技術演習後の自己学習における動画教材の学習効果

○中垣和子<sup>1</sup>, 船橋眞子<sup>1</sup>, 永井庸夫<sup>1</sup>, 貞永千佳生<sup>1</sup>,

黒田寿美恵<sup>1</sup>, 古屋 泉<sup>1</sup>, 岡光京子<sup>1</sup>

<sup>1</sup>県立広島大学保健福祉学部看護学科

### 【目的】

看護技術演習後の自己学習における動画教材の学習効果を調査し, 今後の課題を明らかにした。

### 【研究方法】

対象者:看護大学3年生。調査時期:平成23年10月。調査方法:輸液ポンプの基本操作の習得に向けた臨地実習前の自主的な技術練習(以下,自己学習)の際に,授業での看護技術演習時に配布した紙媒体資料と同内容の動画教材を,学内LAN経由で配信及び演習室内に設置したパソコンで視聴できるようにした。自己学習終了後に,動画教材の視聴状況(多肢選択法),輸液ポンプの基本操作のイメージ化・習得の自己評定値(Visual Analogue Scale),輸液ポンプの基本操作や動画教材に関する感想(自由記述)について質問紙を使用し調査した。分析方法:輸液ポンプの基本操作のイメージ化・習得の自己評定値について,動画の視聴経験の有無による2群で比較した(t検定)。輸液ポンプの基本操作や動画教材に関する感想は,内容分析を行った。倫理的配慮:研究については,県立広島大学研究倫理委員会の承認を得た。対象者には,研究概要及び成績には影響しないこと,同意をしなくても不利益を被らないこと等を文書と口頭で説明した。

### 【結果】

質問紙の配布数は60部で,回収数51部(85.0%),有効回答数47部(78.3%)であった。動画教材の視聴状況は,学内LAN経由の視聴1名と演習室内パソコンでの視聴27名(59.6%),未視聴19名(40.4%)であった。動画教材を視聴した学生が未視聴の学生より,「自己学習前に知識を確認した」(p<0.05),「自己学習時に輸液ポンプの操作手順を思い出すことができた」(p<0.05)の自己評定値が有意に高かった。輸液ポンプの基本操作に関する感想は31件あり,操作が難しそう(9件),操作手順を思い出せない(9件),操作手順がよくわからない(6件),実施できるか不安(5件),動画がわかりやすかった(1件),わかりやすかった(1件)であった。動画教材に関する感想は35件あり,わかりやすかった(24件),視覚,聴覚による情報が得られるのがよい(3件),学外でも見られるようにしてほしい(2件),説明の間が空きすぎている(1件),動画と実際の機材が異なりわかりにくいところがあった(1件)などであった。

### 【考察】

看護技術の自己学習における動画教材の活用は,技術のイメージ化を促し,構造化された知識の獲得に有効と考えられる。また,自己学習前の多くの学生が,既習の看護技術の実施に対して戸惑いを覚え不安をもっていることが明らかになった。そのため,看護技術演習終了後の早い時期に復習する機会を設けることや動画教材の視聴率の向上を目指した配信方法を検討することが必要であると考えられる。

## 192) 化学療法の副作用に対する不安の強い患者の思いと日常生活指導のあり方

○加藤千恵美<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 公立黒川病院

### 【目的】

化学療法の副作用に対する不安の強い患者の思いとその変化を明らかにし、日常生活指導のあり方について示唆を得ることである。

### 【研究方法】

1. 期間：平成24年7月16日～同年8月10日 2. 対象：化学療法（2クール目）施行目的で入院中の患者。70歳代前半。女性。3. 方法：入院時パンフレットによる退院指導を行い、3クール目入院時にインタビューを行い、内容を記録した。記録内容から「治療に対する思い」の部分を抜き出しデータとした。そこから「指導前の患者の思い」と「指導後の患者の思い」に分類し、分析を行った。

### 【倫理的配慮】

研究対象者に研究の主旨、個人情報守秘、研究協力の任意性及び中断の自由、得られた情報は当研究以外には使用しないことを文書と口頭で説明し同意を得、倫理審査委員会の承認を得た。

### 【結果】

指導前、「吐気、脱毛があると知っていたので恐怖感を抱いていた。これからどんな副作用が出てくるのかも不安」との言葉から〈漠然とした知識によって抱いたイメージからくる副作用に対する恐怖心〉〈今後副作用がどのように現れてくるのかが分からないことによる不安〉〈化学療法を受けた患者から聞いた化学療法に対するイメージからくる不安〉〈副作用が自分だけに現れているという思いからくる不安〉が分類された。指導後では、「一つ一つ説明されて不安が解消された」「体が今どうなっているかという不安は常にある」の言葉から〈一般的な副作用について知識を得ることにより、自分だけじゃないという安心感〉〈対処法が分かることにより、副作用出現時の心の準備ができる〉〈化学療法を進めていくことで身体に現れる変化に対する不安〉が分類された。

### 【考察】

患者は指導前漠然とした副作用の知識を持ち、自分の身体がどうなっていくのか分からず恐怖心を抱いていた。詳細に対処の方法を説明したことで、副作用出現時の行動をイメージすることができた。更にパンフレットにしたことで対処法を振り返ることができ、自ら実践することができていた。よって患者の不安を緩和し、セルフケア行動を促すことにつながった。また患者は他患者と自分を比較し、自分だけなぜ副作用が現れるのかという思いを持っていた。自分の身体が今どうなっているのか不安を常に抱いており、副作用出現時その都度今の状態を知りたいという思いを抱いていた。村田らは「患者の心の変化に気づき、変化に応じた関わりができるように日頃から患者の思いに耳を傾け、理解しようとする姿勢が大切である」と報告している。患者の思いの変化に気づき、その時に患者が必要としている情報を提供できるようにしていくことが必要である。

### 【文献】

村田望、野口峰子、道場啓子、中嶋桂子：入院化学療法をうける肺癌患者の思いについて、第41回日本看護学会誌、p391～394、2010。

## 193) 実習指導者育成に向けた院内研修会の効果

○丸山智子<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 福岡女学院看護大学

### 【目的】

2012年5月にA県の実習施設の実習指導者27名に対し、実習指導について考える機会をつくることを目的に研修会を実施した。本研究の目的は実施した研修会の効果について明らかにすることを目的にした。

### 【研究方法】

研修会の効果について自記式質問紙調査を実施した。調査内容は、基本属性、研修会の効果については、カーク・パトリック「レベル4フレームワーク」を参考に、レベル1（研修満足度）レベル2（学習到達度）に対し質問（10項目、5件法）を独自に作成し、自由記述による意見も求めた。研修内容は、現在実習指導で困っている内容について意見交換を行い、望ましい指導方法について考えた。対象者へ研究の趣旨と倫理的配慮について口頭と文書を用いて説明し、研究協力は自由意志であり、協力しない場合であっても不利益を被らないことを保障し、質問紙の提出をもって同意とみなした。

### 【結果】

有効回答数は23名（有効回答率85%）であった。対象者の平均年齢は32.3（±6.4）歳であった。実習指導者の職位は副主任以上のものが3名（13%）、スタッフ20名（87%）であった。研修満足度に関する結果は「研修を受講してよかったと思う」4.6点、「今後もこの研修を継続していくべきだと思う」4.5点であった。学習到達度に関する結果は「この研修を受講したことによって指導の進め方が改善されると思う」4.1点、「病棟に戻ってから早速に指導を実行しようと思う」「病棟に戻って、学習内容を活用してみようという気持ちになった」4.6点、「学習した内容を活用できる環境が私の病棟には整っている」3.6点、「私の病棟メンバーは学習内容を病棟で実践する際、支援をしてくれると思う」4.2点であった。また、今日の研修の中に意見として上がり、試してみたいと思った自由記載項目では、行動計画発表時間などの工夫、自分がモデルになる、学生がなぜそのような行動をとるのか考えてみるなどの意見があった。

### 【考察】

中小規模実習施設の実習指導者は、院外の指導者講習会に1年に約1人受講する程度であり、院内でも実習指導者に対する研修の企画、実施は困難であることが明らかになっている。今回の研修により自分が所属している部署以外の人たちと意見交換を行い情報共有できたことで受講者は、研修満足度が得られていると考えられる。また、モチベーションの高揚にもつながったようである。実習施設では、受け入れ教育機関との指導者会議は実施されているものの形式的なもので、自由な意見交換ができていない現状であることが考えられる。今後の課題として学んだ内容を実際に行えているかの確認と、病棟実践については環境が整っていないことが明らかになったため管理者への支援が必要と考える。



## 194) 若手看護師のバーンアウトに影響を及ぼすソーシャルサポートとアサーティブネス

○後川宏美<sup>1</sup>, 長谷川智子<sup>2</sup>, 北野華奈恵<sup>2</sup>, 礪波利圭<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 福井大学医学部附属病院,

<sup>2</sup> 福井大学医学部看護学科基礎看護学講座

### 【研究の目的】

本研究の目的は、1から3年目看護師のバーンアウトとソーシャルサポート及びアサーティブネスの現状を明らかにすることである。

### 【方法】

1. 研究方法：質問紙調査法。2. 対象者：全国の国立大学病院30施設で勤務する1から3年目看護師900名。3. 内容：(1) 個人要因：性別, 年齢, 臨床領域, 経験年数, 最終学歴。(2) バーンアウト：Maslach Burnout Inventor：MBI日本語版MBIを使用した。(3) アサーティブネス：Rathus Assertiveness Scale：RAS J-RAS（日本語版RAS）を使用した。(4) ソーシャルサポート：一般的社会的ソーシャルサポートについてSocial Support日本語版：SSJを使用した。また、「上司サポート」の10項目および現在のサポート体制としてプリセプターの有無を確認した。なお、本研究は福井大学医学部倫理審査委員会の承認（倫審24第45号）を得て実施した。

### 【結果】

対象者900名のうち有効回答者数は350名（回収率38.8%）であり、女性319名（91.1%）、男性31名（8.9%）であった。臨床経験年数では、1年目看護師138名（39.4%）、2年目看護師107名（30.6%）、3年目看護師105名（30.0%）であった。全対象者におけるバーンアウトの下位項目をみると【情緒的消耗感】は $11.3 \pm 4.3$ 点と最も高く、次いで【個人的達成感】 $7.8 \pm 3.8$ 点、【脱人格化】は $5.2 \pm 4.0$ 点であった。一般社会的ソーシャルサポートの下位項目では【家族のサポート】 $12.9 \pm 3.2$ が最も高く、次いで【友人のサポート】 $12.8 \pm 3.0$ 、【大切な人のサポート】 $12.4 \pm 3.4$ であった。上司のソーシャルサポートは $25.5 \pm 8.1$ であった。アサーティブネスの質問項目では $45.7 \pm 8.2$ であった。

### 【考察】

1から3年目看護師のほぼ同人数から調査回収することができた。一般的に全国を対象にした郵送調査の回収率は30%前後であると言われており、今回の回収率が38.8%と低かった事は、全国比を反映していたと考える。ソーシャルサポートについては家族や友人、大切な人、上司からサポートを受けており、4つのサポートは、大きな差はなかった。萩野（2004）は、【情緒的消耗感】は、職場の人間関係が良くないと高まることを示しており、このことは職場での悩みが生じた時に職場で相談できないことは、精神的疲労感が増大し、他人に冷たく接してしまうことで、バーンアウトを引き起こす要因になると考えられる。【情緒的消耗感】はバーンアウトで最初に陥る症状であり、久保（1994）の先行研究で、経験年数が短い看護師のほうが高い得点になっており、バーンアウトリスクが高いことが示されている。今回、バーンアウトの下位項目【情緒的消耗感】が最も高くなっており、萩野や久保の研究と同様の結果が得られた。

## 195) 看護学生の認識するケアリング要素に関する文献検討

○佐原玉恵<sup>1</sup>, 細川つや子<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 徳島文理大学保健福祉学部看護学科

### 【目的】

臨地実習は看護学生にとって有意義な学習の場であり、ストレスの多い場でもある。そこで実習グループ内で学生間のケアリングが行われているのではないかと考えた。本研究では学生間ケアリングを進める教育プログラムを作成するため看護学生が認識するケアリング要素について明らかにすることを目的とする。

### 【方法】

医中誌webを使用した。看護学生に関するものを見るためにキーワードを「看護学生」and「ケアリング」とし過去10年間で検索した。

### 【結果】

キーワード「看護学生」and「ケアリング」では58件抽出された。この中で、ケアリング要素について論じられている21件を分析した。結果、1. 学生が講義・演習の中で理解するケアリング5件 2. 対象者との関わりにおけるケアリング9件 3. 学生-教員間の関わりにおけるケアリング6件 4. 個人的体験の中でのケアリング1件に分類できた。これらの文献から看護学生が認識したケアリング要素は1では、人間の尊厳、人権擁護、人間関係の構築、意思の尊重、共感、信頼、希望であった。2では、患者への関心、コミュニケーション、傾聴、共に成長する、その人らしさを支える、愛、感謝、苦痛緩和、安全安楽、環境、専門職間の調整であった。3では、学習成果を認める、ほめる、モデリング、対話、受容、自主性の尊重、支援、指導技術、環境調整、適切な評価であった。4では、共に存在すること、支えることであった。

### 【考察】

21の文献から抽出されたケアの要素は、既存のケアリング理論の中で説明された内容がほとんどであった。学生が講義、演習の中で理解している内容は患者との関係においても重要なケアリング要素になっていた。これらは看護学生間ケアリングにおいても必要な内容である。しかし学生-教員間のケア要素からは、認める、ほめる、指導する、評価するという内容も含まれおり、教員から学生への一方方向のケアリング内容であると推測され、学生間ではケアリングが双方向にあることが望ましい。個人的体験の中でのケアリング要素は、ともに存在し、支えることであり、これは看護学生間の絆を強くする内容であると考えられた。

### 【結論】

看護学生が認識するケアリング要素は、人間の尊厳や人権擁護に関すること、人間関係の構築、意思の尊重、人間理解に関すること、意思の尊重、信頼、共感、希望、愛、感謝、支援、共に成長する、共に存在すること、苦痛緩和、環境や専門職間の調整などであった。患者にとって必要なケアリングは学生にとっても必要な内容であり、特に共に存在する、支える、は学生間の絆を強くする内容であると考えられた。

## 196) 「小児看護学実習関係形成支援教授活動尺度」の開発

○柴 邦代<sup>1</sup>, 山口桂子<sup>2</sup>, 大津廣子<sup>2</sup>

<sup>1</sup>愛知さわかみ看護短期大学, <sup>2</sup>愛知県立大学看護学部

### 【目的】

小児看護学実習における学生と患児との関係形成を支援する教授活動の評価用具となる尺度を開発する。

### 【研究方法】

1. 質問紙の作成: 先行研究を参考に小児看護学実習における関係形成を支援する教授活動の実施状況を7段階評定法で回答する55項目を作成。2. 質問紙の表面妥当性・内的妥当性を小児看護学実習指導経験を持つ看護系大学教員による専門家会議で検討。3. 調査時期: 平成23年8月~11月(再テスト: 平成23年10月~12月)。調査対象: 全国の看護系大学(短期大学を含む)・3年課程看護専門学校で小児看護学実習を担当する教員。施設責任者の承諾が得られた304施設に所属する449名に質問紙配布(再テスト: 協力同意の得られた278名に配布)。4. 調査内容: 1) 「小児看護学実習における関係形成を支援する教授活動」55項目, 2) 基準関連妥当性確認用項目: 中山・亀山(2004)による教授活動自己評価尺度-看護学実習用(以下SCTBとする)36項目, 3) 教員の基本属性に関する質問18項目(再テストは1)2))。5. 倫理的配慮: A大学の研究倫理審査委員会の承認を得て研究実施。対象者へは, 研究目的・研究参加の自由・プライバシー保護等を文書で説明, 返送をもって同意とした。

### 【結果】

1. 探索的因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行い, 因子負荷量 $>0.35$ で抽出された4因子42項目を「小児看護学実習関係形成支援教授活動尺度」として確定, 各因子を下位尺度とし「介入アセスメント」「ケア行動円滑化支援」「接近行動促進支援」「言語的コミュニケーション支援」と命名した。2. 信頼性検討: IT相関では尺度全体のCronbach's  $\alpha$  (以下 $\alpha$ とする) $=0.946$ , 4下位尺度の $\alpha=0.802\sim0.929$ から内的整合性が確認され, 再テスト法では本調査と再テストの尺度合計得点間においてPearson積率相関係数 $r$  (以下 $r$ とする) $=0.829$  ( $p<0.01$ )の有意な相関がみられたことにより安定性が確認され, 信頼性が確認された。3. 妥当性検討: SCTBを外来的基準とした併存的妥当性検討で, 作成した尺度とSCTBの尺度合計得点間で $r=0.711$  ( $p<0.01$ )の有意な相関がみられたことにより基準関連妥当性が確認された。以上より, 信頼性・妥当性の確認された「小児看護学実習関係形成支援教授活動尺度」4下位尺度42項目が作成された。

### 【考察】

教育経験の浅い教員や小児看護臨床経験の乏しい教員が実習指導の際に本尺度の内容を参考にしたり, 自己評価に活用することで, 教授活動の質向上に役立つと考える。本研究は愛知県立大学看護学研究科での博士論文の一部を改編したものである。

### 【引用文献】

中山登志子, 亀岡智美(2004). 看護学実習教授活動自己評価尺度開発-看護教育学における基盤研究発展型応用型研究として. 看護研究, 37(3), 237-251.

## 197) 看護大学生の看護実践力と実習での困難

○武田かおり<sup>1</sup>, 鉢呂美幸<sup>1</sup>, 水野芳子<sup>1</sup>

<sup>1</sup>名寄市立大学保健福祉学部看護学科

### 【目的】

実習での課題は, 学年があがるほどに多様なアセスメント能力や応用力が求められ, 個別的な看護に伴う知識・技術が必要となる。看護実践力と実習での困難な経験との関連を明らかにし, 実習での学びを妨げる要因を検討する。

### 【研究方法】

看護大学生2・3・4年生(155名)を対象に, 基本属性, 看護実践力, 実習での困難で構成した無記名自記式質問紙を実施した。看護実践力は「志向する力」「展開する力」「実施する力」「評価する力」(20項目)で構成され, 尺度開発関係者から使用許諾を得て使用した。実習での困難は「患者家族(に関する)困難」「自分自身(に関する)困難」「実習環境(などに関する)困難」(13項目)で構成し, 5段階評定で質問紙を作成し回答を求めた。2つの尺度の相関はspearman順位相関係数を用いた。

倫理的配慮として, 対象者に研究目的, 任意性・匿名性の確保, 成績には一切影響しないことを文書と口頭で説明し, 同意を得た。本研究は研究者所属機関の倫理委員会の承認を得た。

### 【結果】

有効回答は81名(52.3%)で, 女性76名男性5名, 2年生27名・3年生22名・4年生32名であった。実習での困難のCronbach's  $\alpha$ 係数は.853となった。全学年の看護実践力得点の平均点は, 総得点52.2点, 志向する力8.5点, 展開する力13.0点, 実施する力15.8点, 評価する力14.9点で, 実習での困難は総得点26.9点, 患者家族困難10.8点, 自分自身困難9.1点, 実習環境困難7.0点であった。看護実践力と実習での困難は有意な相関はみられなかった。学年ごと(2・3・4年)の看護実践力では志向する力が53点・37点・33点, 展開する力が50点・38点・36点, 実施する力が16点・16点・15点, 評価する力が15点・15点・15点で, 2つの項目で学年があがるに従い得点は下がった。実習での困難は患者家族困難が53点・37点・33点, 自分自身困難が53点・40点・32点, 総得点が50点・40点・34点で, 学年があがるごとに得点は下がった。

### 【考察】

学年に応じて課題をクリアしていく学生の看護実践力は上昇していると考えられるが, 回答はその傾向を示さない。その要因には学年があがり難易度が高くなる課題への到達感が低いことと, 昨年度の自分自身の能力と比較ではなく, 専門職として活躍する臨床現場の指導者や先輩看護師との比較により自らの実践能力を低く評価したと考えられる。実習での困難は学年を追うごとに低下し, 困難と感じる事態の減少あるいは困難への対処方法を身につけることで, 困難を感じることは減っているといえる。困難感と看護実践力の程度に相関はみられず, 実習での困難感が看護実践力の獲得を阻むとはいえない。臨地での実習は, 自らの能力や困難を自己中心的ではなく客観的に自己評価できるようにする有効な学びの場となっていると考えられる。

## 198) 急性期看護実習における手術室見学実習の学び —学生の記述内容の分析から—

○山本美緒<sup>1</sup>、宮嶋正子<sup>1</sup>、池田敬子<sup>1</sup>、辻あさみ<sup>1</sup>、  
上田伊津代<sup>1</sup>、山口昌子<sup>1</sup>、鈴木幸子<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>和歌山県立医科大学保健看護学部

### 【目的】

急性期看護実習は、2010年のカリキュラム改正により、3週間3単位の实習に変更した。実習目標である周手術期における患者の状況理解を深め、身体的・心理的影響を理解し、また保健医療チームや連携について学ぶという目標に沿い、手術室見学実習を実習初日(半日)に導入した。そこで本研究は、手術室見学の学生の学びを分析し、今後の臨地実習指導方法への示唆を得ることを目的とした。

### 【方法】

対象は、2010年と2011年の2年間に急性期看護実習を履修した看護学生165人。実習最終日、無記名にて手術室見学について「受け持ち患者の看護に役立ったと感じたこと」についての記載を求めた。本調査は、自由参加とし、成績に影響しないことを口頭と書面で説明した。分析は、記述内容をコード化し、意味内容の類似性に基づきサブカテゴリー化した。それらのサブカテゴリーに共通する抽象ラベルを検討し、カテゴリー化した。

### 【結果】

147人から回答を得た(回収率89.1%)。219コードより、12のサブカテゴリー、4つのカテゴリーに分類した。〈手術前の実践的関わりを通した気づき〉〈術前患者の心理状態への気づき〉〈手術後の実践的関わりを通した気づき〉〈家族に対する影響への気づき〉から【術前・術後の患者の理解】、〈手術中の体位〉〈手術にともなう侵襲〉〈麻酔にともなう侵襲〉から【手術室にいる患者の状態】、〈手術室の雰囲気〉〈手術室の構造〉から【手術室の環境】、〈手術室看護師の活動と役割〉〈医療スタッフの連携〉〈安全管理〉から【マンパワーと連携】の4カテゴリーであった。

### 【考察】

学生の学びは、【術前・術後の患者の理解】【手術室の環境】から、手術室がどのようなところであるのかを知り、手術に向かう患者の不安や緊張へ共感できており、見学実習による効果があったと考える。【手術室にいる患者の状態】では、術中体位や手術・麻酔にともなう侵襲の大きさを知り、状態理解が深まり、術後患者の重症度や観察ポイントについて考えることができていた。さらに、患者へのねぎらいの言葉をかけることができ、術後看護を学ぶ機会となっていると考える。【マンパワーと連携】では、1人の患者の手術に多くの医療職が関わり、連携したチームとして動いていること、手術室の看護師の活動・役割の理解が深まっており、手術室で求められる看護の技術・役割や保健医療チームの連携について学ぶことができていたと考える。学生は手術室という場を「知る」ことから多くの学びを得ていた。今後は、これらの学びを具体的に受持ち患者の看護として実践できるような実習指導につなげることが必要である。

## 199) 学生の自己評価をとおしてみえる事例展開の授業の 一考察

○高倉裕美子<sup>1</sup>、井上真弓<sup>2</sup>  
<sup>1</sup>弘前医療福祉大学、<sup>2</sup>横浜創英大学

### 【目的】

看護診断技術の事例展開をとおし、学生の「理解できなかった」という自己評価からみえる授業方法の課題を明らかにする。

### 【方法】

1) 研究対象は看護大学生1年次53名の看護診断技術・事例展開の自己評価2) 自己評価は看護教育論:基礎教育の理念と展開(波多野梗子 1976年)、看護学教育評価の基礎と実際第2版:臨地における看護に関する学修内容(評価視点)(田島桂子 2011年)を参考に評価可能な11項目及び授業目標から降ろした2項目の全13項目からなり、各項目は「大変よく理解できた」から「まったく理解できなかった」の5段階である。研究者の関心は「理解できなかった」と回答した学生の自己評価に着目した。看護診断技術は1年次後期に60時間(2単位)あり、後半の30時間に紙上事例を用いて演習を行っている。

### 【倫理的配慮】

研究への参加は自由意思に基づき、参加しない場合でも不利益は被らないこと、成績には関与しないことを説明した。本研究は筆者の所属する大学の研究倫理委員会の承認を得て実施した。

### 【結果】

学生の自己評価は「看護過程の構成要素の理解」、「アセスメント」7項目、「計画の立案」3項目、「評価」「グループへの貢献度」の13項目中、1~6項目で「理解できなかった」と49%(26名)の学生が回答した。その内訳は「看護過程の構成要素」1.8%(1名)、「情報の解釈・分析・統合、看護問題の抽出」1.8%(1名)、「情報の整理」5.6%(3名)、「期待される結果」3.7%(2名)、「診断リスト作成」「根拠を含んだ具体的な援助計画(観察援助教育)」7.5%(各4名)、「看護問題の優先順位の考え方」16%(9名)、「看護目標の明確化」32%(17名)、「期限設定の考え方」24%(13名)、「評価の考え方(視点)」20%(11名)だった。この結果から、学生は看護過程の授業を前半のアセスメントまではグループワークを活発にしていくなかで、「理解はできた」と評価している。しかし後半、「看護問題の優先順位」「看護目標」「期限設定」「評価」に至る学習過程で「理解できなかった」と自己評価をしている学生が増加した。

### 【考察】

看護過程は、私たちの日常生活に生じる問題を解決するための問題解決法であり、看護の思考過程に応用したものであるが、学生にとってこの思考過程の段階を踏んで学んで行くプロセスがイメージしにくく、授業が進むに従い内容が複雑になっていくため、臨地実習の経験が少ないこの時期の学生に困難性を伴う科目である。したがって授業を進めるうえで学生の主観的な自己評価を教員の客観的評価との分析を加味しながら進めていく必要がある。紙上事例の限界があるなか、学生の自己効力と学習達成感の関連が今後の課題である。

## 200) 看護教育における看護スキル育成の試み ―他職種 の顧客研修による学びの評価―

○川北敬子<sup>1</sup>

<sup>1</sup>川崎医療福祉大学医療福祉学部保健看護学科

### 【目的】

社会体験の少ない看護学生に授業と基礎看護学実習のみで、対象を理解し尊重する看護スキルを指導することは困難であると考えた。そこで、看護のスキルを意識づける目的で医療福祉職種以外のサービス業種に於いて顧客と従業員の体験を内容とする顧客研修を試みとして実施した。本報告では、他職種における顧客研修による看護スキル育成の成果を明らかにする。

### 【方法】

基礎看護学実習前の学生41名にデパート、ホテル、流通企業、公共施設で顧客研修を実施した。研修後の学びのレポートから顧客満足に関する項目を抽出し、内容の類似性に基づき清水滋(1968年)のサービス構成要素の精神的、態度的、業務的に分類した。分類結果を顧客満足構成要素として臨地実習に適用し、実習体験との擦り合わせを支援し、看護提供者に必要なスキルについて考察の機会を与え、学生の振り返りから看護スキルの獲得状況を評価する。

### 【倫理的配慮】

顧客研修参加前の学生に、看護スキル育成のあり方を検討するために、学びのレポートおよび実習後の振り返り会での内容について、資料提供の協力を依頼した。その際、参加・不参加、中断の自由および不参加による不利益を伴わないことおよび、個人の匿名性の確保と結果の学会等での報告について口頭と文書で説明し、文書で承諾を得た。

### 【結果】

顧客研修後のレポート41部から抽出された顧客満足構成要素を清水滋のサービスに分類すると、精神的サービスでは患者との人間関係形成、傾聴、共感であった。態度的サービスでは表情、挨拶・返事、身だしなみであった。業務的サービスでは安心、安全への配慮、環境保持、連絡・報告、プライバシーの配慮であった。これらをサービス提供者のスキルとして基礎看護学実習に臨ませ、臨地体験とサービス構成要素の照合を指導した。

終了後の振り返り会で多くの学生は看護における顧客は患者であり、満足の評価は患者が行うものであることを顧客研修と臨地実習を照合して理解したことを報告した。また、患者を不安からどう解放し元気づけていくのかに視点においた看護実践では、顧客研修で学んだ傾聴、共感の姿勢が役立ったことを報告し、その看護実践には後日患者から感謝とお礼の声が寄せられた。

2つの体験を経て学生は、質の高い看護サービスの要素を、「人格の研鑽」「専門的知識」「確実な技術」「ニーズ対応」「家族への配慮」「保健医療チームの連携」と考察した。

### 【考察】

顧客満足に視点を置き、学生に身近な顧客サービス業種における研修を取り入れた看護スキル育成の試みは、患者の満足を充足するスキルを身に付ける必要性を実感する機会になったと考えられる。

## 201) 看護学生の緩和ケアへの学習意欲に影響を及ぼす要 因の分析

○小濱優子<sup>1</sup>、滝島紀子<sup>1</sup>

<sup>1</sup>川崎市立看護短期大学看護学科

### 【目的】

本研究では、緩和ケアへの学習意欲を高める要因を明らかにすることを目的に、基礎看護教育3年課程の3年次において、「看護の統合」科目におけるテーマのうち、第一希望に「終末期看護」を選択した学生に焦点を当て、そのテーマを選択した理由を明らかにするための調査を実施した。

### 【方法および倫理的配慮】

対象：Y看護短期大学3年課程3年生75名のうち「終末期看護」を第一希望とした学生15名。そのうち同意を得た12名(男子1名、女子11名)。データ収集期間：平成24年2～3月。データ収集方法：アンケート調査(自由記述方式)。アンケート内容は、「看護の統合」科目6領域のうち「終末期看護」を第一希望とした理由、その選択に影響したと思う講義科目・実習科目とその内容について、その他の動機付けとなった出来事についてである。データ分析方法：調査データはエクセルソフトを用いて入力し、意味ある文章ごとに一つのデータとし、その内容からテーマ選択の理由と影響要因を抽出し分類した。信頼性確保のため看護教育研究者2名によるカテゴリ分類を行った。倫理的配慮：研究の趣旨を説明し、個人情報の保護および中途辞退の保証、研究以外の目的で使用しないこと、成績評価に影響しないことを伝え、同意書にて同意を確認できた学生を対象とした。

### 【結果】

1.『終末期看護を第一希望として選択した理由』については、全員、終末期看護への強い興味関心を表す内容が書かれていた。実習で出会った患者のこと、親族や家族の死を体験して強い動機付けとなったという内容の記載もあった。2.『選択に影響したと思う講義科目』についての質問では、緩和ケアや終末期看護について学ぶ「成人看護」の科目であると12名中10名が回答していた。この科目は闘病記や映像を用いて様々な角度から緩和ケアについて学ぶ授業である。他に影響した科目として「在宅看護」や「老年看護」、「生命倫理」等の科目が挙げられ、家族看護、QOLへの援助、死生観などに関する内容を挙げていた。3.『選択に影響したと思う実習科目』では、1年次「基礎実習科目」を挙げた学生が2名、2年次「成人看護実習」が6名、そして1名は「1～2年次全ての実習」と回答しており、学生のがん患者への実際の看護体験が詳細に記述されていた。

### 【考察】

学生が「終末期看護」を選択した理由とその影響因子について分析した結果、選択理由・影響因子ともに、【終末期看護への興味関心】、【講義科目からの学び】、【映画視聴や闘病記の影響】、【実習科目での看護体験】、【親族や家族の死】の5つのカテゴリで構成された。今回明らかになった学生の緩和ケアについての学習の動機付けを大事にしながら、その学びを深められるよう支援していくことが重要である。

## 202) 臨床実践につながるための看護専門職公開講座を目指して -参加者アンケートからの分析-

○中井美鈴<sup>1</sup>, 中村織恵<sup>1</sup>, 今川詢子<sup>1</sup>, 鶴田晴美<sup>1</sup>,  
赤堀八重子<sup>1</sup>, 根岸京子<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 東都医療大学ヒューマンケア学部看護学科

### 【研究目的】

臨床において、看護師が自信を持ってリンパドレナージが実施できるよう、大学内で看護専門職を対象とした公開講座「癒しのリンパドレナージ」を開催している。今回、参加者の講座内容の理解度や臨床での実践の可能性について調査し、看護実践につながるための講座の在り方を検討した。

### 【講座の概要】

講座時間は6時間で、看護師資格を持つリンパドレナージ専門家による基本知識の講義後、全身ドレナージの演習を実施した。

### 【研究方法】

調査対象：講座参加者26名 調査方法：筆者らが独自に作成した質問紙を用いて、講座開始前に対象の特性・受講動機等、終了後に講義内容に対する理解度・今後の実践への思い等の内容を調査した。倫理的配慮：質問紙には調査目的・趣旨・本研究以外で使用しない等を明記し、自由意思での提出とした。調査にあたり所属施設の倫理委員会で承認を得た。

### 【結果】

講座前調査の提出者は19名、終了後24名、平均勤続年数は17.2(±10.4)年であった。講座時間については「適切」10名、「短い」14名であった。講座内容の理解度は「理解できた」11名、「まあまあ理解できた」13名であった。今後、講座内容が実践できるかについては「実践できる」4名、「まあまあできる」19名であった。内容の理解度と実践の可能性についてみると「理解できた」者のうち4名のみが「実践できる」とし、「まあまあ理解できた」13名のうち12名が「まあまあ実践できる」と、自信を持ってできるとの回答が少なかった。今後、内容を実践したいかについては「実践したい」15名、「機会があれば実践したい」9名で、実践については「まずは自分や家族、友人に実施」の意見が多く、「すぐに患者へ実践」は少なかった。

### 【考察】

講座の内容について参加者全員が「理解できた」「まあまあ理解できた」と答えており、目的としたリンパドレナージの理解には貢献できていると思われる。しかし、実践については「まあまあできる」と消極的な意見が多かった。リンパドレナージ講習を6時間という短時間で内容を理解し、即実践することは難しいことが推測される。今回の学びの実践については「自分や家族、友人に実施する」が多かったことから、自信を持って患者に実践できるまでは到達していないことがわかった。スキルを習得するためには、概論から入り、実践論を学んだ上で演習を行い、実践するという過程を要す。講座から内容を理解し、自信を持って知識や技術を習得するには、技術演習の時間を増やす工夫やアドバンスコース等の講座を開講するなどし、学ぶ機会を増やすことが大切である。今後は、技術項目ごとに理解度や習得状況を把握し、さらに分析を進めたいと考える。

## 203) 看護学生を対象とした人体解剖見学実習 -アンケートによる評価-

○井之口文月<sup>1</sup>, 松田和郎<sup>2</sup>, 相見良成<sup>1</sup>, 曾我浩美<sup>3</sup>,  
森川茂廣<sup>3</sup>, 宇田川潤<sup>1</sup>, 工藤 基<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 滋賀医科大学医学部解剖学講座, <sup>2</sup> 京都大学学際融合教育研究推進センター, <sup>3</sup> 滋賀医科大学医学部看護学科基礎看護学講座

### 【目的】

A大学医学部では看護学生を対象とした人体解剖見学実習を毎年行っている。実習の満足度と課題を明らかにするためアンケート調査を行った。

### 【研究方法】

実習の進行は一斉セミナー方式で行われた。見学前に「見学の倫理的配慮と注意事項」と「解剖の基礎知識と学習ポイント」の講義を行った。

学生4, 5人を1班とし虫眼鏡等を用い御遺体に触れて観察した。教員が観察ポイントをリアルタイムで説明した。教員および大学院生が1人あたり2, 3班を担当し巡回して質問に応じた。

調査方法：実習後に4または5択質問のアンケート調査をした。期日は一か月以内とした。

調査の対象：平成23年度にA大学における人体解剖見学実習に参加した基礎課程(1年生)の看護学生492名(4年制大学190名, 看護師養成専門学校288名, 准看護師養成専門学校14名)

倫理的配慮：回答が任意であることおよびその内容が成績等に一切影響しないことを学生および引率教員に口頭で説明し、回答の提出をもって同意と見なした。一部は記名で提出されたが、氏名や学校名を集計の段階で全て記号化し無記名とした。

### 【調査項目と結果】

アンケート回収率：95.5%

質問1 [今回の実習を終えて、学びたいと思っていた部位および構造についてどの程度理解が深められましたか]：「十分に理解できた」29%、「まあまあ理解できた」67%、「あまり理解できなかった」2%、「まったく理解できなかった」0.6%

質問2 [実習を行うにあたり各自で事前学習はしましたか]：「十分に学習した」6%、「まあまあ学習できた」47%、「あまり学習できなかった」41%、「まったく学習できなかった」6%

質問3 [実習へ参加したことにより学習意欲に変化はありましたか]：「かなり高まった」54%、「まあまあ高まった」41%、「あまり変化しなかった」4%、「低下した」0.4%、「かなり低下した」0%

### 【考察とまとめ】

学習意欲の向上について肯定的評価が95%であり本実習は有意義であったといえる。事前学習について「十分に学習」と「まあまあ学習」を合わせて53%にとどまったことは、事前学習の方法や内容に改善を要すると考える。今回の調査では「十分に理解」「まあまあ理解」の自己評価が合わせて96%と高かったが、十分な事前学習を行うことで実習での理解がより深まることが期待される。

## 204) 看護学生における対人的嫌悪感情の特性および自我状態との関連

○岡部泰子<sup>1</sup>, 城賀本晶子<sup>1</sup>, 赤松公子<sup>1</sup>, 吉村裕之<sup>2</sup>

<sup>1</sup>愛媛大学大学院医学系研究科看護学専攻,

<sup>2</sup>NPO法人食品治療学研究所

### 【目的】

対人感情は、特定の他者に対する持続的な感情であるが、とくに、嫌悪感情は否定的な表情・動作・行動に表出される。学生を教育する場でも、看護学生が抱く嫌悪感情は、技術演習や臨床実習を実施する際に、グループを如何に構成し学習効率を高めるかという問題を含む。本研究では、四年制の看護学生を対象に、対人的嫌悪感情の測定尺度を作成し、検証的因子分析により構成概念の妥当性を統計学的に検証した。さらに、嫌悪感情には性格特性が関与することを考慮して、自我状態の型を市販の質問紙（新版TEG）により区分、対人的嫌悪感情の特性との関連を検討した。

### 【方法】

女子学生10人を対象に対人的にどのような態度を嫌と感じるか、予備的調査を行い、抽出された76項目の質問をもとに、210人を対象に5段階SD尺度でその程度を得点化して探索的因子分析を行った。抽出された4因子40項目のモデルの構成概念妥当性を検証的因子分析により解析した。その際、新版TEGを用いて自我状態を次の5型に区分して嫌悪感情得点を比較した：大人（A）、養育的親（NP）、批判的親（CP）、自由な子ども（FC）、順応した子ども（AC）。対象者には、研究の目的、研究参加は自由意思であること、途中でも辞退できること、不参加の場合にも不利益のないこと、個人情報を守秘・保護するためにID番号で取り扱うことなどを文書で配布後、口頭で説明し、研究参加の同意を文書で得た。本研究は、本大学院看護学専攻の研究倫理審査委員会の承認を得て行った。

### 【結果】

探索的因子分析の結果、看護学生の対人的嫌悪感情は、「身勝手な態度」、「感情を制御せず、自己主張する態度」、「容認できない態度」、「不愉快な態度」の4因子が抽出された。この測定尺度は、十分な内的整合性（尺度全体のクロンバック $\alpha$ 係数=0.945）と妥当性（RMSEA=0.066）が確保されていた。嫌悪感情（4因子）と自我状態（5因子）との関連を正準相関分析した結果、有意な正準変数が認められ、「感情を制御せず、自己主張する態度」、「容認できない態度」と自我状態AC型との間に強い正の関連が認められた。対人的嫌悪感情の程度には、部活動やサークル活動の経験、集団行動への苦手意識、構成員へのこだわり、好き嫌いの激しさなどが影響していた。

### 【考察】

看護教育にも人間関係論などの対人的交流を図る科目が導入されてきたが、集団の中で個々人の嫌悪感情を如何に制御するのか、本研究で作成した嫌悪感情の測定尺度を援用しながら、卒業後に医療現場で患者やその家族などと良好な人間関係を築けるような教育方法を開発したく考えている。

## 205) PNSにおける新人看護師の育成 ～PNS導入後のクリニカルコーチの精神的な苦しさの変化～

○濱野陽子<sup>1</sup>, 清水由加里<sup>1</sup>, 早川美津江<sup>1</sup>, 河波清美<sup>1</sup>

<sup>1</sup>福井大学医学部附属病院

### 【はじめに】

X附属病院では平成21年度よりPNS（partnership nursing system）を導入し、教育担当者であるクリニカルコーチが実施することが多かった看護技術のチェックを、新人看護師のパートナーやグループメンバーが実施するという、副看護師長をコアとするグループ全体で支援する体制に変更した。これは、新人看護師の育成を職員全体で支援することに繋がると期待している。

### 【目的】

クリニカルコーチの精神的な苦しさの現状を明らかにすることで、PNSの導入が、新人看護師の育成を職員全体で支援することの強化に繋がっているかどうかを検討する。

### 【研究方法】

1. 対象者：クリニカルコーチ71名（平成22年19名、23年21名、24年23名） 2. 実施期間：平成22年11月、平成23年11月、平成24年9月 3. 調査方法：新人看護師の正式配置前のローテーションが終了した時期に、「精神的な苦しさの有無」「その時期」「その内容」「どのような対処をして乗り越えたか」を二段階評価と自由記載で尋ねた。4. 倫理的配慮：看護部長に調査実施の許可を得て無記名式自記式調査用紙を作成し、研究の趣旨・目的と不参加による不利益が生じないことを説明し同意を得たクリニカルコーチに調査を実施し個別の封筒で回収した。（回収率は平成22年82%、平成23年91%、平成24年100%）

### 【結果】

精神的に苦しかった時期があったと答えたクリニカルコーチは平成22年19名100%、平成23年17名81%、平成24年19名83%であった。その時期は4～6月とローテーション終了前2カ月が多かった。内容は「新人看護師と日々のペアを組むことが多く、指導で大変だった」「技術演習の実施に忙しかった」「自分で全てをしなくてはならないという重圧」等であった。対処方法については、PNS開始前は「ひたすら頑張る」や新人の関わりを工夫した人の合計と「新人教育担当者・スタッフ・上司へ相談、協力してもらった」人はほぼ同数（平成22年各5名、平成23年8名と6名）であったが、PNS導入2年目の平成24年には2倍（6名と14名）となった。

### 【考察】

精神的に苦しかった時期があったクリニカルコーチの数に著大な変化はなかった。その時期も新人看護師と日々のペアを組むことが多く看護技術演習を毎週実施する4～6月と、ローテーション終了前が多く、3年間で大きな差はなかった。しかしPNS導入後に、周囲に協力してもらい乗り越えたクリニカルコーチが増えていることは、周囲とのパートナーシップが、新人看護師の育成に当たるクリニカルコーチを支援していることを示唆していると考えられる。

### 【まとめ】

PNSの導入が、新人看護師の育成を職員全体で支援することの強化に繋がっているかどうかは明らかにならなかった。

## 206) 看護学生の職業アイデンティティに関する文献レビュー

○古市清美<sup>1</sup>, 益子直紀<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 独立行政法人国立病院機構高崎総合医療センター附属高崎看護学校,

<sup>2</sup> 群馬県立県民健康科学大学看護学部看護学科

### 【目的】

看護学生のアイデンティティの形成は重要な発達課題であり, その中で職業的な要因が重要な意味を持つと考えられる。看護職のアイデンティティを確立できるような教育を行うことで, 看護学生は卒業後も職業人として臨床の場で継続して働くことができる。そこで, 看護学生の職業アイデンティティに関する研究の動向を分析し職業アイデンティティ研究における現状と問題点および問題解決への取り組みを明らかにする。

### 【方法】

文献検索エンジンWeb版医学中央雑誌Vor.4および論文情報ナビゲーターCiNiiを使用し1990~2011年に掲載された論文を対象とした。検索ワードは、「看護学生」「職業」「アイデンティティ」とした。本研究は公開情報のみを対象としており, 被験者への倫理的問題は存在しないが, 著作権等の情報の取り扱いには十分に注意した。

### 【結果】

1. 看護学生の職業アイデンティティの現状と問題点に該当した文献は18件であり, 職業アイデンティティと臨地実習との関連5件, 職業モデルとの関連8件, 心理的特徴および性格特性との関連5件であった。臨地実習との関連では, 否定的な感情をもたらすような実習体験は, 学生の自己評価を低下させ看護職の適正への不安につながり, 他の大学生と比較して入学後に職業選択についてアンビヴァレントな気持ちを抱いていることを明らかにした。また, 職業モデルとの関連では, 学生は理想とするモデルの存在を必要としているが他の医学系の大学生と比較して, モデルとなる存在に出会うことが少ないことを明らかにした。

2. 看護学生の職業アイデンティティにおける問題解決への取り組みに該当した文献は15件であり, 臨地実習における問題解決への取り組みでは5件, 講義および職業モデルによる問題解決への取り組みでは10件であった。臨地実習における取り組みでは, 実習前指導が効果的であること, 実習後に適切なリフレクションを取り入れ実習体験の意味づけを行うことが大切であることを明らかにした。講義および職業モデルによる問題解決への取り組みでは, 学生の一番身近である教員が, 学生の理想とする役割モデルを示す臨床能力を身につける必要があり, 学生が努力していることの承認を繰り返す姿勢が重要であることを明らかにした。

### 【考察】

職業アイデンティティに関する研究は尺度を用いている研究が多く, 学年が進むにつれ得点が低下することが特徴であり, その原因を分析し教育的支援について研究されていた。これら文献から, 看護職という職業に関する専門知識を教授するだけでなく, 看護師という職業を自己のアイデンティティに組み込んでいけるようなアイデンティティ形成のための支援が必要であることが示唆された。

## 207) 看護学実習におけるポートフォリオとルーブリックの効果

○小林菜穂子<sup>1</sup>, 三井京香<sup>1</sup>, 吉岡由喜子<sup>1</sup>, 山本純子<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 太成学院大学看護学部

### 【目的】

近年, 注目されているパフォーマンス評価の典型的な方法であるポートフォリオ評価を取り入れた看護学実習を行い, ポートフォリオとルーブリックの効果を確認し, 看護学実習での評価の在り方について示唆を得る。

### 【研究方法】

A大学の看護学部4年生13名を対象とし, 2012年度の老年看護学実習でポートフォリオとルーブリックを用いた実習展開を行い, 実習終了後に質問紙を用いた調査を実施した。記述式質問紙を用いて調査を行い, 従来の実習との違いや実習への取り組みの変化について自由記載から得た内容を意味内容の類似性によりカテゴリー化を行った。〈倫理的配慮〉実習開始前に研究の主旨, 方法, 任意協力, 匿名性の保護, 成績に影響しないことを口頭と文書で説明し同意を得て実施した。またA大学の倫理委員会の承認を得た。

### 【結果】

ポートフォリオについての自由記載から, 「その日の良かったこと悪かったことなどを振り返ることができた」「学習の整理ができる」「自分が今, 何につまづいているのか分かる」「教師とのやりとりが増え, 早めに解決できる」等の意見や「あまり違いは感じられなかった」との意見がみられた。総コードは(24)を抽出し, 〈振り返り〉, 〈自己との対話〉, 〈相談と方向性の整理〉, 〈学習の質と量の変化〉, 〈学習の整理と活用〉, 〈学習の蓄積物〉, 〈達成感〉, 〈疲労感〉, 〈変化なし〉の9カテゴリーで構成された。ルーブリックについての自由記載からは, 「自分の反省点・課題点・成長点があった」「目標や到達度を把握することで自分の分析ができ, もうちょっと頑張らないと, と思えた」や, 「評価が分かりやすい」「評価がしやすかった」等の意見がみられた。総コードは(21)を抽出し, 〈到達度と課題の把握〉, 〈評価への理解と容易性〉, 〈意欲の高まり〉, 〈複合的な評価〉の4カテゴリーで構成された。

### 【考察】

ポートフォリオの効果としては, 振り返りと自己との対話が促進され, 省察を行えること。相談と方向性の整理が促進され, 学習者自らが行動の方向性を決定すること。自己学習の内容が変化し, 学習活動が活発化するという3点が挙げられる。さらに, 実習を成し遂げた結果の産物としての達成感や知の蓄積, また, 負の結果として負担感があると分かった。ルーブリックの効果としては, 評価への理解と容易性を伴う為, 到達度と課題の把握ができ, 自己の成長点や改善点について前向きな自己評価が行える。自らの目標を考え意欲の高まりを生じさせる評価活動となり, このような自己評価が, 看護実践をしようとする動機づけになると考えられる。以上のことから, 学習者自らが評価者となれるように今後の看護学実習における評価のデザインを変容させていく必要性が示唆された。

## 208) 実習での実践を目指したソフトマッサージの直前演習の評価 — 演習終了後の評価 —

○緒方昭子<sup>1</sup>, 奥 祥子<sup>1</sup>, 竹山ゆみ子<sup>1</sup>, 矢野朋実<sup>1</sup>,  
内田倫子<sup>1</sup>, 田村真由美<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>宮崎大学医学部看護学科

### 【目的】

3年前期の成人・老年看護技術で行ったソフトマッサージ(タクテイル&reg;ケアに準じて行う撫でるようなソフトタッチのマッサージ)の手技や特徴を想起し、臨地実習での活用意識を高めることを目的に実習直前の演習に取り入れた。その評価を行い今後の学内演習内容と実施時期を検討する。

### 【研究方法】

A大学看護学科3年生60名に対し、実習直前の学内実習期間の90分1コマに実施した。2人1組となり全員が実施者と受け手となり、研究者らが作成したDVDの動きに合わせて背部10分、手掌・手背10分のソフトマッサージを実施し、終了後に感想と実習での活用についてアンケート用紙に回答を求めた。分析方法は、単純集計および記述については意味類似性により分類した。宮崎大学医の倫理委員会の承認を得、研究の主旨・目的、成績評価と関係しないことを説明し同意書に同意を得た。

### 【結果】

同意が得られた59名のアンケート結果は、実習前の演習に取り入れて良かったと55名(93%)が回答し、うち51名(86%)が実習での活用を考えると回答した。その理由は「思い出せた」「実習に取り入れやすい」などであり、「不眠の対象」「疼痛のある対象」「リラックス」などソフトマッサージが活用できる対象や状況について回答が得られた。ソフトマッサージの演習を行うことが自分にとって良かったかの問いでは57名(96%)が良かったと回答した。手技については、簡単と思う47名(79%)、簡単と思わない8名(13%)であった。簡単と思わない理由は「手順を覚えられなかった」「力加減が分からない」などであったが、その8名中7名が実習で使えると思うと回答した。ソフトマッサージの良い点について、受け手の視点では「リラックスする」「安心感がある」「気持ちいい」など、実施側の視点では「手軽で簡単」「場所や道具がいらない」「コミュニケーション手段となる」などであった。困る点の回答59名中「くすぐったい」が21名であった。実施者としての感想は「相手が喜んでくれてうれしい」「実施者もリラックスする」などであり、受け手の体験では、「リラックスする」「暖かい」「眠くなる」などであった。ソフトマッサージはコミュニケーション手段として使えるかの質問に55名(93%)が使えると思うと回答した。

### 【考察】

今回の実施により学生はソフトマッサージの手技と効果を再認識していた。受け手としてリラックス効果や心地よさなどの体験をしたことで、不眠の患者などへの適応を考えたと思われる。実習直前に実施したことで手技を想起し臨地実習で活用しようという意識は高まったと思われる。臨地実習における実際の活用については、臨地実習終了後のアンケートにて評価する。

## 209) 術後室の準備に関する演習後の自己評価によるブレンディッドラーニングの効果

○高橋由起子<sup>1</sup>, 松田好美<sup>1</sup>, 岩田美智子<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>岐阜大学医学部看護学科

### 【研究目的】

周手術期患者の術後管理には、多くの精密な医療機器(輸液ポンプ、モニター、フットポンプ等)を必要とする場合が多い。これらの機器に囲まれた特殊な環境が患者へのケアを困難にしている。特に学生が術後の観察やケアをする上で、体験的に学習することは、術後の患者をイメージ化するとともに、患者に近寄りにくいという不安感を軽減することにつながる。そこで、術後患者を想定した環境をモデル人形で再現し、医用機器の装着体験、術後室に必要な機器類のセッティングについて体験型演習とe-learningを組み合わせたブレンディッドラーニング形式の授業を実施し、術後室の準備に関する演習後に知識・技術の習得に関して自己評価を行った。本研究の目的は、術後室の準備に関する演習後の自己評価からブレンディッドラーニングの効果を明らかにすることである。

### 【研究方法】

4年制大学看護学科2年生78名を対象とし、急性期看護方法1の授業の中で課題として提出された術後室の準備で使用したレポート課題の自己評価を使用し、同意の得られた72名を対象とした。自己評価の項目は知識に関する6項目(機器の名称や使用目的・注意点等)、技術に関する5項目(セッティング等)の計11項目とした。自己評価は5点(90%以上の到達度)~1点(60%未満の到達)とし、演習直後とレポート提出時(1週間後)の2回の自己評価について単純集計を行った。自己評価の内容は、研究者らで内容の妥当性を確認した。

### 【術後室の準備に関する学習方法】

授業内で術後の看護に関する授業後2週間、術直後の患者を想定したモデル人形とともに術後の病室環境を再現し、いつでも見学およびモデル人形に装着してある医療機器を自由に装着体験できるようにした。演習は術後患者を想定し、1グループ5~6人で術後室の準備を行った後、教員によるフィードバックを行った。また、演習後は知識の確認のためe-learningによるミニテストを課した。

### 【倫理的配慮】

A大学大学院医学系研究科医学研究等倫理委員会で審査・承認を得た。同意を得た時期は急性期看護方法1の単位が確定してからであり、研究使用への同意の有無により成績への影響がないことを説明した。

【結果】知識に関する自己評価については、演習直後は1.84(±0.60)点であり、レポート提出時は3.26(±0.73)点であり、自己評価の伸び率は1.42ポイントであった。技術に関しての自己評価については、演習直後は1.63(±0.58)であり、レポート提出時は2.94(±0.80)であり、自己評価の伸び率は1.31ポイントであった。

【考察】知識に関してはブレンディッドラーニングによる学習効果が示唆されるものの、技術などの繰り返し体験的な学習を必要とする項目についてはe-learning教材の内容とともに効果的な演習プログラムの構築が望まれる。



## 210) 高齢者看護学実習における学生のセルフケア・エージェンシーに対するアセスメントの実態

○今井芳枝<sup>1</sup>，雄西智恵美<sup>1</sup>，森 恵子<sup>1</sup>，板東孝枝<sup>1</sup>

<sup>1</sup>徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部

### 【目的】

オレム看護理論はセルフケアを中心概念とし，その人のセルフケア・エージェンシーの活用と成長を促す理論であり，成熟と衰退の要素を合わせ持つ高齢者看護に有用な理論である。そこで本研究では，学生のセルフケア・エージェンシーのアセスメント部分に着目して，その実態を把握し，看護学生のアセスメント能力育成のための実習指導の検討を行うことを目的とした。

### 【方法対象】

2011年9月～翌年2月の高齢者看護学実習に参加したA看護系大学3年生70名。調査内容：1セルフケア・エージェンシー3操作（評価的操作，移行的操作，生産的操作）のアセスメント内容の充足度，2アセスメントの内容。

### 【分析方法】

1は実習中の第1回目に提出されたアセスメント用紙を用いて，その内容の充足度を高齢者看護学実習に携わる教員3名で〈十分〉，〈普通〉，〈不十分〉とグループ分けした。2は3グループ毎にセルフケア・エージェンシーの内容を分析。

### 【倫理的配慮】

徳島大学病院臨床研究倫理審査委員会にて倫理審査を受け承諾を得た。学生には実習評価には無関係でありプライバシーが確保できていること等を口頭と文書で説明し，同意する者は専用の回収箱で回収結果 同意が得られた学生は65名であった。1のセルフケア・エージェンシーのアセスメント内容の充足度は，〈十分〉22名（33.8%），〈普通〉33名（50.8%），〈不十分〉10名（15.4%）であった。2のグループ毎のセルフケア・エージェンシーの内容では，〈十分〉のグループの内容と比べて〈普通〉のグループは半数が空欄や記述内容の間違いがあった。〈不十分〉のグループでは「先の状態を考えて理解できる」もしくは「今後の自分の状態を理解できない」のような将来の認知状況等に関する記述がないことや，空欄があること，記述内容間違いがあること，3操作の中で1内容しか記載されていない箇所があること，特定のセルフケア要件に応じた3操作の記述になっていないことがあげられた。考察結果より，学生自身がセルフケア・エージェンシーのアセスメント能力において，各操作が十分理解できていないことや内容不足の状況から，ベッドサイドでの意図的な情報収集ができていないことが推察できた。カンファレンスや個人指導時に各操作の説明やアセスメント内容の修正を指導しているが，具体的に各操作と繋ぎあわせて収集する情報の意図を学生が理解できるように指導していかなければならないことが考えられた。

### 【結論】

今回，問題が何から生じているかという情報収集する能力が不足していることが示された。今後は，具体的な例を用いながら，各操作と情報とがどのように関連しているのかを提示して，情報を取る意図を学生に指導する工夫の必要性が示唆された。

## 211) 血液疾患患者を受持った看護学生の臨地実習指導に関する検討 -全領域実習終了後に行った振り返りから-

○原田江梨子<sup>1</sup>，藤永新子<sup>1</sup>，安森由美<sup>1</sup>

<sup>1</sup>甲南女子大学看護学科

### 【研究テーマ】

血液疾患患者を受持った看護学生の臨地実習指導に関する検討-全領域実習終了後に行った振り返りから-原田江梨子 藤永新子 安森由美（甲南女子大学 看護リハビリテーション学部）

### 【目的】

血液疾患患者を受持った学生に対して，全領域終了後に半構成面接を行い，学習過程から目標達成状況を振り返り，成人看護学実習における看護に対する指導方法について検討した。

### 【研究対象・方法】

研究対象：H22年とH23年に成人看護学の臨地実習において，血液疾患患者を受持った学生のうち，本研究について協力が得られたA大学看護学生4名。研究方法：全領域終了後に，1）成人看護学実習を体験した感想，2）実習時の学習状況についての自己評価，3）今後の課題についての半構成面接を行い，逐語録を作成した。逐語録から実習に関する思いや考えが反映された内容を抽出してカテゴリーを作成した。本学倫理委員会の承認を得た後，学生に研究の主旨を書面と口頭で説明後，ICレコーダーで録音して逐語録を作成した。

### 【結果】

実習期間中に受持患者の病態について，主治医から治療方針の説明を受けた学生2名は，身体的・心理的特徴が理解できていないことを自覚し，自らの学習に励んだ。また，看護していく中で一時的に戸惑いを見せたが，受持患者の思いを理解することで身体的・心理的特徴を理解することができた。一方，時間の都合上，主治医からの説明を受けられなかった学生2名は，実習期間中に身体的特徴・心理的特徴を理解することが困難で，実習体験をしんどいと感じて達成感なく実習を終えていた。但，4名とも，全領域終了後に，実習での学習過程を振り返り，自らの目標達成状況を再認識することができ，課題を自覚できていた。

### 【考察】

血液疾患のため身体面の変容は外観に表出されず，患者自身が自覚症状に乏しいことで，実習期間中に身体的・心理的特徴を理解し，ケアを提供することが困難な場合があった。今回，受持患者の病態生理と治療方針について教授を受けたことは，学生が知識不足を自覚して実習に取り組むきっかけとなった。血液疾患に関する知識を得て身体的特徴を理解することは，心理的特徴を把握し，適切な看護を提供する機会となり，健康レベルに応じた看護が提供できる能力を養うことにつながった。既習の知識や技術を統合して，受持ち患者に適切な看護の提供が要求される臨地実習は，学生が未知である臨床現場や患者の置かれている状況をイメージしやすく，技術・態度の育成になる指導体制づくりが重要だとわかった。そして，臨地実習での学習過程を振り返って課題を明らかにすることは，学生自らが実習過程を客観的に評価して課題を自覚することにつながり，臨地実習における指導を見直す機会となった。

## 212) 「看護過程」初学者が継続できる自己学習支援のあり方

○辻 慶子<sup>1</sup>, 小堀ゆかり<sup>1</sup>, 中村恵子<sup>1</sup>, 榊原千佐子<sup>1</sup>

<sup>1</sup>北海道文教大学人間科学部看護学科

### 【はじめに】

看護基礎教育における「看護過程論」は自己学習部分が多いため、予習・復習（以下自己学習支援という）をどのように行うかが課題である。本学の「看護過程論」は講義と演習から構成している。自己学習支援では平成21年度は紙媒体で行っていたが、平成22年度よりeラーニングを活用している。平成22年度は講義時のみeラーニングを活用し、演習では紙媒体を使用しての自己学習支援を行ったが、講義が進み内容の難易度が高くなるにつれ、また自分で事例の展開を行うようになるとeラーニングでの閲覧回数が減少していた。そこで、平成23年度は講義・演習の全てをeラーニングで自己学習支援を行った。本研究では、平成21年度・22年度と23年度の学習効果について比較し、継続性を持たせるための自己学習支援について検討した。

### 【研究方法】

対象：A大学で平成21年（紙媒体での自己学習支援）・22年（eラーニング＋紙媒体での自己学習支援）・23年（eラーニングのみ）の看護過程論を受講した学生。方法：1. eラーニング活用状況、閲覧時間と学習評価の相関を見る。2. 21・22・23年の基礎看護学実習終了後の看護過程に関するアンケート結果を比較する。倫理的配慮：学生に研究の趣旨、成績に影響を及ぼさないことと不利益をこうむらないことを説明し、了承を得た。

### 【結果・考察】

自己学習支援でのeラーニング閲覧状況については、22年度は予習・復習の閲覧率の平均がそれぞれ64.4%・45.0%であり、23年度は予習・復習の閲覧率の平均がそれぞれ95.0%・95.6%であった。活用時間は、22年度の平均予習・復習時間はそれぞれ30分・24分であった。23年度の平均予習・復習時間33分・35分であった。22年度はeラーニングでの自己学習時間と知識の定着に関連は見られなかった。23年度は予習・復習において時間が長い方が知識の定着に相関がみられた。また、授業終了時のレポートの達成度においても予習・復習の時間と相関がみられた。22年度・23年度の両年とも基礎看護学実習での看護過程展開の達成度とeラーニングによる自己学習時間との相関はみられなかった。さらに、基礎看護学実習後の看護過程に関する学生へのアンケート結果から、看護過程展開の自己評価による達成度において、紙媒体・紙媒体とeラーニング・eラーニングのみという自己学習支援の違いによる有意差は見られなかった。以上のことから、毎回の自己学習支援を行うことが継続性にもつながり、学習効果も上がることが示唆された。しかし、看護過程を学ぶことは、臨床において活用できる能力を育成することが目的であることから、さらに自己学習支援内容の検討が必要である。

## 213) 臨床実習指導者講習会を受講した看護師の自律性の変化について

○東 真理<sup>1</sup>, 森川茂廣<sup>2</sup>

<sup>1</sup>第二岡本総合病院, <sup>2</sup>滋賀医科大学基礎看護学講座

### 【目的】

実習指導者講習会（以下講習会）を受講し、実習指導を経験した看護師の専門職の自律性がどのように変化し、どのような要因と関連するのかを明らかにすることを目的とする。

### 【方法】

研究協力で承諾の得られた近畿地区内の看護協会にて実施された「平成23年度臨床実習指導者講習会」の受講生144名に対して、倫理的配慮を口頭と文書にて説明した後に多肢選択式、無記名による自己記入式質問紙調査票（専門職の自律性尺度「小谷野開発DPBS日本語版尺度」と個人属性、実習指導者に関する内容）を用いて、講習会前後と講習後3か月の3回にわたりデータを収集した。3回の自律性の変化と、それらに關係する要因を比較検討した。

### 【結果】

1. 参加者全体の調査では、講習会の受講前後の比較で自律性は有意に向上していた。しかし、受講後と受講後3か月後との間には有意な上昇は認められなかった。2. 受講前後の比較では、勤続年数が長いものと、看護モデルを有していないものが有意に自律性が向上していた。また受講後と受講後3か月の比較で有意に上昇していたものは、書籍をよく読むものであった。3. 受講後3か月の調査で、実習指導を実践した群は、自律性の向上が有意ではなかった。一方、実践していない群は、有意な自律性の向上が認められた。しかし、実習指導実践したものは、しないものに比べて受講前から高い自律性を認め、講習会の受講による自律性の向上も顕著であった。4. 実習指導上の悩みについては、学生や指導要綱の理解は深まり解消されたものの、現場での調整や患者の選定など新たな悩みを持つ結果となった。

### 【考察】

講習会により自律性の向上が認められ、講習会の効果が自律性へも影響する可能性がある。受講後、実習指導を実践することがさらなる向上を果たすと考えたが、有意な向上は認められなかった。しかし実習指導を実践していない群と比較して、受講前より高い自律性を示し、また受講前後で有意な上昇を認めたことから、講習に熱心に取り組み、受講による効果が大きかったと考える。一方担当しないものも、職場に復帰後自律性の向上を認め、講習会の受講は、勤続年数が長くロールモデルを持たないプラトール状態のものにも、モチベーションを刺激し自律性の向上につながったのではないかと考えられた。

### 【結論】

講習会の受講と実習担当の効果について自律性を尺度として検証した。講習会の受講は受講者の自律性を向上させることが検証された。講習会の受講は実際に実習指導を担当しないもの、中堅看護師でプラトール状態のものにも刺激を与え、自律性の向上につながることが示唆された。また実習担当者は、受講以前から高い自律性を有し、講習会受講への意識も高くその効果が大きであることが示された。

## 214) 模擬患者 (simulated patient) 参加型演習の教育効果について

○石原克秀<sup>1</sup>, 青井聡美<sup>1</sup>, 吉田なよ子<sup>1</sup>, 三宅由希子<sup>1</sup>, 池田ひろみ<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 県立広島大学保健福祉学部看護学科

### 模擬患者参加型演習の教育効果

#### 【目的】

コミュニケーション技術習得のため、2回目の模擬患者 (simulated patient), 以下SPと訳す) 参加型演習を行った。本研究では、SP参加型演習における面接実施者と観察者の教育効果を検討する。

#### 【方法】

1. 対象者：看護学科2年次生64名 2. 研究日時：平成24年6月 3. 演習方法：1グループ4～5名構成とし15グループを編成。グループ内1名を面接実施者、その他の学生を観察者とした。1事例に対し2グループを配置し、各グループ異なる3事例を体験した。演習内容は、「身体的側面」、「心理的側面」を主とするコミュニケーションをとる形式とした。面接1セッションを7分とし、その後SP、教員、学生間によるフィードバックを10分とした。教員が5事例を準備しSP5名がそれぞれ1事例を担当した。4. 調査内容：演習終了後、受講者全員にアンケートを配布し、コミュニケーション技術習得に関する満足度について5段階評価尺度を用い調査した。また(1)演習における学び、(2)SPへの感想・要望を自由記載で求めた。5. 分析方法：実施者と観察者の評価の比較は $\chi^2$ 検定を行った。自由記載欄は、質的帰納的分析に基づきカテゴリー化を行った。

#### 【倫理的配慮】

研究目的、参加について自由意思の尊重、プライバシーの厳守、研究以外にデータを使用しないこと、結果の公表について学会等で発表する可能性があることを口頭にて説明した。アンケートは無記名式とし、回答用紙の提出をもって同意が得られたものとした。

#### 【結果・考察】

アンケート回収率は、観察者100% (30名/30名中)、面接実施者100% (34名/34名中)であった。演習内容に対し、実施者・観察者ともに高い満足度が得られた。実施者と観察者の満足度の比較においては有意な差は見られなかった。SP参加型演習の学びは、観察者では〈患者観察の視点について〉〈コミュニケーション技術の効果〉〈自己への置き換え〉〈実践に即した体験〉〈コミュニケーションへの意欲〉の5つのカテゴリーが抽出され、実施者のみ〈自分を振り返る機会となった〉が挙げられた。SPへの感想では、実施者・観察者ともに〈フィードバックが勉強になった〉と学習効果を認識していた。実施者からは〈緊張〉があったものの〈フィードバックを通じ自分の特徴がわかった〉と自己を振り返り、適切な患者との接し方について検討していた。SPからのフィードバックは、学生からどのような影響を受けたかについて言及されており、学生の関心が高い。また、観察者からは〈実施者として参加したかった〉と意欲向上がうかがえた。学生にとって初対面のSPに接するこの演習は、患者を他者として認める初段階の演習として位置づけられると思われ、一定の効果があったと考える。

## 215) 基礎看護技術における自己学習支援のためのeポートフォリオの活用状況

○中山栄純<sup>1</sup>, 小泉雅也<sup>1</sup>, 熊谷奈穂<sup>1</sup>, 石井裕美<sup>1</sup>, 本戸史子<sup>1</sup>, 矢那瀬信雄<sup>1</sup>, 城戸滋里<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 北里大学看護学部

### 【目的】

看護技術の習得は、授業時間内の演習では十分といえず、学生の積極的な自己学習が必要である。今回、インターネット上で、基礎看護技術の習得へ向け、学生が自己学習の取り組みを経時的に振り返るeポートフォリオ教材を作成し学生に活用してもらった。これを用いて、基礎看護技術実技試験前の学生の主体的な利用状況を把握し、学生の自己学習を促進するための基礎的データを得ることを本研究の目的とした。

### 【研究方法】

1. データ収集期間：平成24年6月～平成24年7月 2. 対象：研究参加に同意の得られた看護系大学の2年生。3. eポートフォリオ教材：看護技術の自己学習を、学習項目、練習時間、今回の目標、学習内容についてWeb上で記載するもの。学生のアクセスは自由で、過去の学習記録の振り返りができる。4. データ分析方法：実技試験前1カ月の活用状況、学習項目、練習時間、教材への記載内容等を収集した。毎回の目標が明確か、実施方法に各自の工夫が記載されているか、自己の到達度が評価されているか、活用した感想等を分析した。

### 【倫理的配慮】

本教材内に、本研究への参加は自由意思で良い旨、参加の有無が実技試験等の評価に一切影響しない旨の承諾書を掲載した。学生は自由にアクセスでき、参加の有無を承諾書にサインして提出できるようにした。なお、実施に際し、研究者の所属施設の倫理委員会の承認を得た。

### 【結果】

本教材の利用、および本研究に参加した学生は42名 (33.9%：対象学年学生数124名)であった。この内、学習記録に記入した学生は10名 (8.1%)であり、1名を除き複数回 (2～6回) 記録しており、その内容も前回の練習内容を踏まえたものだった。10名の学生が記載した全記録23件の内、毎回の自己学習に明確な目標を立てて取り組んだ記載は17件 (73.9%)、各自の具体的な工夫の記載は12件 (52.2%)、自己の学習項目に対する評価の記載は17件 (73.9%)であった。記載のなかった学生からは、「毎回の練習に明確な目標を立ててはいないので、このフォーマットでは書きにくい」、「目標を立てて取り組むことは意味があると思って登録したが、練習内容を後で振り返るのは面倒くさい」、などの意見が得られた。

### 【考察】

毎回の自己学習の目標を明確化して取り組んでいる学生に対しては、本教材が有効であったと考える。今後、より多くの学生が活用できるように、主体的な学習に対する姿勢へといかにつなげていくかの検討が必要である。

## 216) 臨地実習でルーブリックによる評価基準を提示した際の看護学生の学習行動

○小川宣子<sup>1</sup>, 志戸岡恵子<sup>1</sup>, 杉田香苗<sup>1</sup>, 竹中 泉<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 星ヶ丘厚生年金保健看護専門学校

### 【目的】

評価基準を具体的に示したルーブリックを活用することは、「指導と評価の一体化」や「自己学習力の向上に向けた評価」をより強固にするとされている。実習目標の達成に向けた主体的な学習を支援するため、実習評価にルーブリックによる評価基準を提示した。本研究では、臨地実習で実習評価にルーブリックによる評価基準を提示した際の看護学生の学習活動を明らかにすることを目的とした。

### 【対象と方法】

対象者は2012年2月時点で3年課程看護師養成学校に在席し、当該年度の実習を終えた学生計80人（2年生44人、3年生36人）とした。ルーブリックによる実習評価をした3週間の病院実習は患者を受け持ち、看護実践を行った。倫理委員会で承認を得たのち、対象者に研究趣旨や参加の自由意思、匿名性の保持、同意をしなくても不利益は受けないことを説明した。無記名自答式の調査票を配付し提出をもって同意を得たものとした。教員の立ち会いない場所に設置した回収箱にて回収した。調査票は「a) ルーブリックによる実習評価の効果についての学生の主観的評価」と「b) 実習目標の達成のための学習活動の変化」を骨子として作成した。実習評価の効果は20項目を1～5段階のリッカート尺度を用いて回答を求めた。学習活動の変化は14項目列挙し、当てはまるもの全ての選択を求めた。分析方法はExcel2010を用いて単純集計した。

### 【結果】

70名から回答が得られ（回収率87.5%）、有効回答70名を分析対象とした。

1. 「a) ルーブリックによる実習評価の効果」：最も平均点が高い項目は「自己評価の重要性の認識（4.5）」、上位の項目は「教員との実習目標の共有（4.4）」、「自分に不足する内容の把握（4.4）」、「実習目標の把握（4.3）」であった。下位の項目は「自己評価後の教員への相談（2.9）」であった。

2. 「b) 実習目標の達成のための学習活動の変化」：最も多く選択されたのは「不足の気づき（92.9%）」であり、以下「目標達成への関心（72.9%）」、「評価基準を意識した学習（65.7%）」であった。一方、「教員への相談（25.7%）」、「実習前学習の準備（27.1%）」は下位に位置した。

### 【考察】

ルーブリックによる評価基準の提示は、実習中に自己の実習達成状況を振りかえる行動を促し、自己評価の重要性の認識を高めることにつながっていた。また評価基準を提示することで実習目標の把握と不足に気づき、教員との実習目標の共有を可能にしていると考えられる。しかし、その気づきは相談や学習の準備という学習活動の変化にはつながりにくい傾向が示唆された。学生はルーブリックによる評価基準を学習の指針として利用し、自身で学習に取り組んでいるので、評価基準の視点や内容を精選し、学生が目標を理解し興味をもって実習に臨めるようにしていく必要がある。

## 217) 基礎看護学実習における対人関係の構築に関する学生の認識とその方法

○小坂信子<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 日本赤十字秋田看護大学看護学部

### 【目的】

看護過程の展開が主目的となる2年次の基礎看護学実習において、対人関係の構築に関する学生の認識とその方法について明らかにする。

### 【研究方法】

1. 対象：E大学看護学部2年生。基礎看護学実習後に協力の得られた87名。2. 調査時期：実習終了2週間後の2012年11月～12月。3. データの収集：1) 対人関係をどう構築したいと考えたか2) 具体的な行動について、無記名自記式質問紙調査。留置法。分析：各項目毎に意味内容をもとに単文節を抽出し共通性と相違性に基づき分類カテゴリ化。教員1名の協力を得て検討し妥当性を高めた。4. 倫理的配慮：本学研究倫理審査委員会の承諾を得た。学生には目的内容、成績には影響しない、研究への中途中止が可能、研究以外に使用しないことを説明し、同意書を得た。

### 【定義】

対人関係とは：看護の目的を達成するために必要な人間関係

### 【結果】

協力者87名中61名が回答（回収率70.1%）

1. 「対人関係をどう構築したいと考えたか」について、記載された文中において「～の関係、～したい、～なるように」の単文節を抽出し語の頻出頻度を算出した。記載件数は総数73件あり、7のカテゴリに分類できた。【話す・相談される関係】35件（47.9%）、【信頼される関係】19件（26.0%）、【理解・共感する関係】10件（13.7%）、その他【心を開ける関係】【援助・介入する関係】【挨拶・声をかける関係】等があった。

2. 「具体的な行動について」の記載件数は総数134件あり、行動・態度に関する内容71件とスキルに関する内容63件であった。それぞれ2のカテゴリに分類できた。行動・態度に関する内容では【対象への自らの関わり】37件（52.1%）は、〈会話する〉〈雰囲気作り〉〈理解する〉などの4からなり、【対象を受け止める関わり】34件（47.9%）は〈傾聴する〉〈共感する〉〈受容的態度〉〈尊重する〉などの4からなる。スキルに関する内容では【基本スキル】35件（55.6%）は〈挨拶・声かけ〉〈積極的に〉などの7からなり、【非言語的コミュニケーション】28件（44.4%）は〈笑顔で〉〈同じ目線で〉〈相づち・うなづく〉〈タッチング〉などの4からなった。

### 【考察】

どのような対人関係を構築したいと考えたかについて、自分からの関わり行動と対象を受け止めようとする行動が記載されており、学生と対象との双方向的な関係を構築しようとする主体的な姿勢がうかがえる。また基本的なスキルと非言語的コミュニケーションを同時に実践し、専門的な認識をもち、対象との対人関係構築に臨んでいることが示唆される。

## 218) 保健医療系学生の放射線に関する気がかり要因とリスク認知

○會津桂子<sup>1</sup>, 井瀧千恵子<sup>1</sup>, 富澤登志子<sup>1</sup>, 扇野綾子<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>弘前大学大学院保健学研究所

### 【目的】

放射線診療を受ける患者は放射線被ばくに対する不安を抱えていることが多く、医療従事者には放射線診療に関する適切なリスクコミュニケーションが求められている。リスクコミュニケーションには、リスクに対する個人の認識が影響するが、2011年に起きた原子力発電所事故（以下「発電所事故」とする）以来、保健医療系学生は大学入学時に放射線リスクを高く認識していた。本研究は、保健医療系学生における「放射線に関する気がかりな要因」と、放射線リスク認知との関連を明らかにすることを目的とした。

### 【研究方法】

対象：2012年度にA大学医学部保健学科に在籍している学部学生846名。

方法：質問紙による調査を2012年5～7月に実施した。

質問項目：1) 基本属性(学年・専攻等)、2) 放射線リスク認知に関する3要因(1. 「恐ろしさ因子」10項目および2. 「未知性因子」5項目(7段階評価, Slovic (1987)を参考)、3. 2011年3月の発電所事故に関する「重大性の認識」(10段階評価)、3) 発電所事故に関して「現在気がかりなこと」(自由記述)。

分析方法：「現在気がかりなこと」の自由記述内容を、テキストマイニングの手法を用いてカテゴリーに分類した。1名分の記述内容に複数のカテゴリーに関する内容が含まれていた場合は、当該者を複数のカテゴリーに分類した。各カテゴリーに分類された群(分類群)と分類されなかった群(非分類群)で、放射線リスク認知3要因の得点を比較した(有意水準5%)。テキストマイニングにはPASW Text Analytics for Surveys 3 Japaneseを、統計解析にはPASW Statistics 18を用いた。

倫理的配慮：A大学大学院医学研究科倫理委員会の承認を得た。

### 【結果】

質問紙の回収数は742部であった。発電所事故に関して気がかりなことの自由記述内容は、《人・被災者(138名)》《今後(121名)》《放射線(113名)》《原発周辺地域(100名)》《原子力発電所(96名)》《生活(80名)》《食品(32名)》《特になし(18名)》等の38カテゴリーに分類された。分類群と非分類群で、放射線リスク認知3要因の得点を比較したところ、《今後》《原発周辺地域》《人体》では「恐ろしさ」と「事故の重大性」で、《食品》では「未知性」と「恐ろしさ」で分類群が有意に高かった。《放射線への過剰な反応》では「恐ろしさ」で、《特になし》では「恐ろしさ」と「事故の重大性」で分類群が有意に低かった。

### 【考察】

医療系学生における放射線リスク認知では、気がかり要因が学生の放射線リスク認知に影響している可能性が考えられた。学生が放射線や放射線事故に関する正確な知識を得て不安を軽減することは、放射線リスクの正確な認識に繋がることが示唆され、放射線に関する専門的な教育の必要性が示唆された。

## 219) 災害時における階段降下時の安全かつ迅速な避難方法に関する検討

○谷岸悦子<sup>1</sup>, 今留 忍<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>前杏林大学保健学部看護学科

### 【目的】

災害はいつ発生するか予測できない。防災に関する正しい知識、災害時の行動や避難の仕方を身につける減災教育の必要性が高まっている。そこで、本研究は校舎内の学生が安全かつ迅速に階段を降下するための列の編隊について検討することを目的とした。

### 【方法】

研究デザイン：準実験研究。実験期間：2011年6月～9月。対象：実験への協力に同意が得られた大学生19名(男性4名・女性15名)。実験方法：実験場所はA大学校舎の屋内階段で、学生が普段使用することが多い1階から4階とした。4階の踊り場を踏んだ時点から1階の踊り場に1歩降りた時点までの時間(先頭・最後尾・列全体)を、1列、2列の2通りの編隊について測定した。2通りの編隊による階段下降の様子をビデオ撮影した。実験は、30分の休憩と列の順番をランダムにすることで疲労と慣れを避けた。実験終了直後、列の編隊によって受ける印象を、1) 安心感、2) 降りやすさ、3) 明るさ・照度、4) 階段の横幅、5) 視野、6) 滑りやすさ、7) 勾配・傾き、8) 蹴上の高さ、9) 手すり高さ、10) 踏面の広さについて質問し、〈全く思わない〉から〈かなり思う〉の4段階で回答を得た。分析方法：各々の列の編隊で要した降下時間を研究者がストップウォッチで測定した。ビデオ映像から先頭が踊り場に足を踏み入れた時点を0秒として、最後尾が踊り場から1歩降りた時点までの間を2秒ごとに人数を数えて、1列と2列の群衆密度を算定した。2通りの編隊と降下時間、群衆密度、点数化した質問回答結果を照合し、安全かつ迅速な列の編隊を検討した。倫理的配慮：本研究は、所属大学保健学部の倫理審査を受けて実施した。

### 【結果】

被験者の身長 $162.8 \pm 8.6$ cm, 肩幅 $40.3 \pm 5.6$ cm, 靴サイズ $24.8 \pm 1.4$ cmであった。階段横幅130cm, 踊り場の横幅2.7m・縦幅1.25m・面積 $3.375$ m<sup>2</sup>, 蹴上16cm, 踏面29cm, 手すり84cm。降下時間は、1列編隊では、先頭38秒, 最後尾37.6秒, 被験者全員が降下するまでに要した時間は58.6秒。2列編隊は、先頭45秒, 最後尾44.2秒で、全員が下降するまでに要した時間は55.6秒で、2列の方が3秒早く降下に至った。平均群衆密度は、1列0.63, 2列1.05で、2列の方が高く、踊り場にいる人数の平均値は1.8～3.9であった。列の編隊による階段の印象は、点数2.4以上を印象が良いと評価した結果、1列・2列ともに2.4を下回った項目はなく、滑りやすさ3.2, 蹴上の高さ3.1, 手すり3.1は同値であった。他の7項目は1列の方が評価としては高かった。

### 【考察】

降下時間は、1列の方が時間を要する。その差は3秒である。災害時は一刻一秒を争う迅速さが要求されるが、最優先すべきは安全である。群衆集中度および階段の印象結果を勘案すると、今回の研究結果から編隊としては1列の方が安全な避難方法と考える。

220) 肢体不自由児の発達節目での進路選択に対する親の考えと関与

○泊 祐子<sup>1</sup>, 竹村淳子<sup>1</sup>, 山地亚希<sup>1</sup>

<sup>1</sup>大阪医科大学看護学部

【目的】

障害児教育は、特別支援学校と通常学校に別れ必ずしもインテグレーションできていない。学校選択や義務教育を終えた後の肢体不自由児の進路について、親は、どのように考え、かかわっているのか。進路選択にあたっての親の考えを明らかにする。

【研究参加者と方法】

研究参加者は成人した肢体不自由のある子どもを育てた母親3人である。母親への半構成面接による質的記述的分析面接内容：「学校等進路選択をするときにどのように決めたのか」「きょうだいのかかわり」「子どもの進路の決定への父母の話し合い」など親の考えや体験を自由に語ってもらった。

【倫理的配慮】

母親には、文書と口頭で研究の趣旨と内容及び学会発表等について説明し同意を得た。

【結果】

対象の子どもは2組が双子であった。一人っ子はいなかった。双子の1組は2人に障がいがあったが、1組はひとり健常であった。全員男性であった。全員が脳性麻痺による肢体不自由があり、その程度は4人のうち、1人は筆記する場合にも鉛筆をホルダーに付けて持たせてもらう必要がある全面介助、2人は緊張はあり筆記や食事は時間がかかるが自分で可能である、移動は、3人は電動車いすを使用し、1人は左麻痺が強いが、クラッチによる自立歩行が可能であった。知的障がいは、2人は相手の話は理解はでき、5、6歳程度であり、2人は軽度の知的障がいであるが、緊張による構音障害がでるが会話は可能であった。就学プロセスは、2人は、小・中学校と地元学校に通学。大学への進学希望があり、高等学校に進学したが、途中で1人は特別支援学校後頭部に転校し卒業した。現在はPC操作で可能な会社に就職し、希望する大学の通信制で学んでいる。もう1人は、高等学校卒業後、大学に進学し、ボランティアの介助により通常の授業を受けている。2人は、地域の幼稚園から特別支援学校に就学した。卒業後はそれぞれ作業所に通所している。

2人の親の進路選択基準は、きょうだいと同じみんなの行く学校が基本的考えであった。親は《本人の意向を応援する》姿勢であった。

ある親の選択基準は、子どもの介護状況や知的レベルを考慮して後で転校しなくてよいことを基本に決めた。高等部卒業後は、親の希望とは異なったが子どもたちそれぞれが気に入った場所という《子どもの意向を尊重する》姿勢であった。親の考えとは異なっても子どもが楽しく過ごせる場所であれば親は考えていた。

【考察】

対象となった子どもの障がいの種類や程度が異なっていたが、子どもの進路については子どもの意思を大事にしていたが、しかし、進路の選択の仕方は、地理的環境や学校状況に影響を受けていると思われた。

221) 臨地実習指導者のマスク着用が看護学生へ与える影響

○武井 泰<sup>1</sup>, 奥百合子<sup>2</sup>, 長屋江見<sup>3</sup>

<sup>1</sup>順天堂大学保健看護学部, <sup>2</sup>城西国際大学看護学部,

<sup>3</sup>三重県立看護大学大学院

【目的】

臨地実習中の看護学生には、一部の病院において感染制御の観点から手指衛生の徹底、業務中のマスク着用を義務付けている。一方、マスク着用時は口、鼻など顔の大部分が覆われるため初対面の場合に親近感を抱きづらく、コミュニケーション時に互いの声が相手に伝わりにくい可能性が考えられる。そこで病院で臨地実習を行った看護学生に対し、ケアの指導に従事した臨地実習指導者（指導者）のマスク着用が、実習を行う看護学生に影響を及ぼす要因となりえるのか調査し明らかにする。

【方法】

調査日：2010年7月30日 調査対象：同意の得られたA大学看護学科3年生43名（男9名、女34名）対象者の条件：基礎看護実習を終え成績評価確定済みの学生 調査方法：無記名自記式質問紙調査を実施 質問内容：基礎看護実習時に指導者のマスク着用について学生が感じた違和感、恐怖感、質問のしづらさ、指導の聞きづらさなどを尋ねた。

【倫理的配慮】

研究参加者へは口頭で依頼を行い協力を求めた。参加は自由意思であり参加しないことで不利益を負うことはないこと、いつでも拒否する権利があることなどについて説明した。また質問紙を配布する際、文書で研究目的や匿名性の保持などを具体的に説明し、質問紙の提出をもって同意を得たものとした。

【結果】

質問紙の回収率は50%であった。指導者のマスク着用時の違和感は11.6%（男性11.1%、女性11.7%）、恐怖感は30.2%（男性11.1%、女性35.2%）であった。また、質問をしづらいと感じた学生は30.2%（男性22.2%、女性32.3%）、指導を聞きづらいと感じた学生は60.4%（男性66.6%、女性58.8%）を占めていた。学生が感じた違和感に比して恐怖感、質問をしづらいと感じた学生は2.6倍、指導を聞きづらいと感じた学生は5.2倍であった。

【考察】

指導者のマスク着用について、学生が感じた違和感が約1割と少なかったのは、大半の学生は感染制御の観点からマスク着用慣れていることが推測される。臨地実習では、実際の医療場面での看護業務を体験し学習する。このような学習の特殊性から学生は実習中、過度の緊張を強いられることにより、マスク着用時の指導者の発声に対して聞きづらいと感じたり、顔の大部分が覆われているため表情が読み取れず恐怖感を感じたりしたことが推測される。性別では指導者のマスク着用時の恐怖、質問をしづらさ、指導を聞きづらさを感じた学生は男女で性差が確認できた。理由としては男子・女子学生とも同じように指導を受けていると思われるが、男女の考え方、観点、行動および積極性の違いなどから男女の学生間に性差が生じたと思われる。また、指導を聞きづらさの項目では主観的なものもあり、今後被験者を増やし検討する必要がある。

222) メーヨー板に関連した感染対策の検討 —メーヨー板の滅菌および消毒の必要性について—

○小松千賀子<sup>1</sup>, 浅沼義博<sup>2</sup>, 堀口 剛<sup>3</sup>

<sup>1</sup>秋田大学医学部附属病院看護部, <sup>2</sup>秋田大学医学部保健

学科, <sup>3</sup>秋田大学医学部附属病院手術部

【背景と目的】

手術室では、医療従事者、空調を含む手術室環境、手術器械や医療材料などが、手術部位感染の原因となりうる。当院では、器械台は器械展開の前に除菌用ウェットクロスで清拭し、器械台カバー（吸水・防水性フィルム・親水性レベル4オイフ）を用いている。メーヨー板は滅菌して使用している。このような現状において、空間的および時間的なコスト削減に向けて、メーヨー板の滅菌を省略し、器械台と同様に除菌用ウェットクロスまたはアルコールで清拭する方法に変更可能か明らかにしたいと考え、術中にメーヨー板に掛けたオイフに穴があくか否かを検討した。

【研究方法】

1. 対象：2012年10月に行った手術例のうち、無作為に選んだ49例。2. 方法：滅菌メーヨー板の上に器械台カバー（レベル4オイフ）を1枚被覆する。レベル4は、ANSI/AAMI（米国規格協会）が定める、医療用途に使用されるドレープ類の液体に対するバリアー性能と分類（PB70）のレベル最高位である。レベル4オイフにメーヨー板の印をつけ通常通りオイフを被覆する。器械出し中は、メーヨー板の上にメス用固定型ホルダーを準備し、メスは直接置かないようにする。使用後のレベル4オイフ回収後、ディスプレイ（白）の上に敷き、メーヨー板の印が印がついている範囲に色水（水性絵の具水）をかける。ディスプレイ（白）に色水のシミがないかを2名で確認する。シミがあった場合を、陽性群とする。3. 分析方法：単純集計の後、陽性群と陰性群との間で、手術時間、麻酔時間、出血量を比較した。Mann-Whitney U検定を行い、p値0.05以下を有意差ありとした。数値は平均値±標準偏差を示す。また陽性群でシミの位置と数を調べた。

【倫理的配慮】

本研究は、院内倫理審査委員会の承認を得て行なった。

【結果】

49件中13件（26.5%）で色水のシミを認めたので陽性群とした。陽性群（n=13）と陰性群（n=36）を比べると、手術時間は、各272±183分、194±140分（p=0.21）、麻酔時間は、各362±204分、266±157分（p=0.15）、出血量は、各527±634mlと429±845ml（p=0.30）であった。いずれも有意差はなかった。シミの位置は中央のみが7例、端のみが4例、中央と端が2例だった。シミの数は、1つ5例、2つ6例、3つ1例、4つ1例であった。

【考察】

49件中13件（26.5%）で色水のシミを認めた。しかし陽性群と陰性群の間で、手術時間や出血量に差を認めなかった。今回我々は、メスの刃先がオイフに直接接触する事態を極力防止するように心がけた。しかしシミの位置や数から、手術中にメス以外の縫合針など鋭利なものがオイフに当たり、オイフに穴があいたことが考えられ、メーヨー板の滅菌は必要であることが示唆された。

## 223) 療養環境における接触感染予防に関する看護師の認識調査

○東野督子<sup>1</sup>，藤井徹也<sup>2</sup>，渡邊順子<sup>2</sup>

<sup>1</sup>日本赤十字豊田看護大学，<sup>2</sup>聖隷クリストファー大学

### 【目的】

療養環境を経由する細菌汚染の接触感染を遮断する効果的な感染予防行動について，拠点病院の一般病棟で働く看護師の認識と行動の特徴を明らかにする。

### 【方法】

対象：平成24年8月～平成25年2月，A県内の500床以上の3病院に勤務する看護師のうち経験年数2年目から4年目までの100名。対象病院の基準は，政令指定都市を除いた地域の拠点病院であり，感染対策チームが存在し，専任の感染看護認定看護師が従事していること，加えて院内感染対策マニュアルの整備がされていることとした。質問紙は研究者が独自に作成した。質問項目は，【気道分泌物の吸引（開放式）】【おむつ装着患者の排泄ケア】の実施時の手袋の着脱のタイミング，手指衛生の実施に関連する項目，療養環境の汚染部位の予測と清掃の状況に関して「行く」「どちらかといえば行く」「どちらかといえば行かない」「行かない」の4項目，または「行く」「行かない」の2項目でたずねた。さらに療養環境に生存する *methicillin-resistant Staphylococcus aureus* (MRSA) の生存期間に関する知識や，看護師が日頃行っている行為内容の順序を穴埋め形式でたずねた。倫理的配慮は聖隷クリストファー大学研究倫理審査委員会の承認（承認番号 11075）を得て実施した。分析は，病院別および看護職の経験年数別の単純集計および，対象者の背景と行為の穴埋めにおいて正当した得点の合計をマンホイットニー検定により平均値の差の検定， $\chi^2$ 検定を行った。統計処理にはSPSS ver.19を使用した。有意水準は $<0.05$ とした。

### 【結果】

回答は，100名から得られた。看護職の経験年数の範囲は2年目が16.0%，3年が53.0%，4年が31.0%であった。排泄ケアを終了した後に，直ちに手袋を外すと回答したものは「行く」「どちらかといえば行く」を合わせて98.0%であった。一方で，実際に行っている手順を記載する穴埋め設問では，35.0%となった。療養環境に生存するMRSAの生存期間に関する知識に関しては，ワゴンなどに数分から数時間生存すると回答したものは15.2%（15/99名）であった。気管吸引後の手袋の扱いに関しても同様に，回答者全員が直ちに手袋を外すと回答したが，実際に行っている手順の記載では60名60.0%であった。

### 【考察】

今回の2場面に関しては，98%～100%の看護師が直ちに手袋を外すことを理解していたが，日頃行っている手順では手袋を外すまでに療養環境に触れていることがわかった。このことは，ケア時に手袋に付着したMRSAなどの病原微生物を療養環境に付着させ，感染のリスクを増大させる。したがって，感染リスクを軽減するためには，看護師に対する手袋を外すタイミングなどの感染予防行動についての教育の必要性が示唆された。



224) 基礎自治体の保健活動に対する住民評価“健康に関する事業は必要なところに提供されている”の背景

○吾郷美奈恵<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 島根県立大学看護学部看護学科

【目的】

海とともに漁業や商業の発展を目指してきた市と、豊かな自然の恵みあふれる緑の大地を持つ郡が平成17年に合併した。保健活動は、旧自治体単位の自治区体制により、平成20年度に策定した健康増進計画に基づき展開してきた。平成24年度は住民参画により健康増進計画を見直す基礎資料を得るため、市民にアンケートを行った。その結果、“健康に関する事業は必要なところに提供されている”は、「そう思う」37.6%、「どちらとも言えない」16.3%、「そう思わない」11.3%、「わからない」23.9%、「無回答」10.9%であった。今回の目的は、“健康に関する事業は必要なところに提供されている”について「そう思う」と回答した者の背景を明かにし、サービス提供の公共性について検討した。

【方法】

18歳～80歳の住民から地区と年齢構成に配慮して無作為抽出した4,315名に、対象の背景と健康状態や生活習慣など、無記名の郵送調査を行った。今回は、回答した2,201名（回答率51.0%）のうち、“健康に関する事業は必要なところに提供されている”について「わからない」と「無回答」を除いた1,433名を分析対象とした。

【倫理的配慮】

調査は無記名で行い、研究の主旨や方法、公表の際に個人が特定されることなく投函を持って同意と見なすなど、倫理的配慮について文書で説明し、自由意思による協力を求めた。この研究は、島根県立大学出雲キャンパス研究倫理審査委員会の承認を得、基礎自治体と協働で行った（承認番号78）。

【結果】

“健康に関する事業は必要なところに提供されている”について57.6%が「そう思う」と回答しており、女性63.1%・男性51.9%で（ $p < 0.01$ ）、平均年齢も高かったが（ $p < 0.01$ ）、現在の健康状態による差は認めなかった（n.s.）。職業では、家事従事者69.9%・無職65.3%・自営業64.6%・農林水産業63.6%に多く、会社員45.0%・団体職員48.6%は少なかった（n.s.）。また、グループ活動に参加している者67.7%や健康づくりに関心がある者60.4%が多く（ $p < 0.01$ ）、自治区により76.3%～55.7%と差が大きかった。一方、“健康に関する情報は広報やホームページで周知されている”は73.0%が「そう思う」と回答しており、健康づくりに関する情報は、市役所の窓口や広報誌59.2%、次いでチラシ・ポスター23.6%、ケーブルテレビ11.4%、公民館9.9%、から得ており、地区により特徴があった。

【考察】

住民評価“健康に関する事業は必要なところに提供されている”の背景として、性・年齢による違いはあったが、自治区による影響が大きいことが推察された。引き続き、地域特性の視点から分析・検討するとともに、見直した健康増進計画に基づき、質の高い保健活動を展開する必要がある。

225) 臨地実習における看護学生の看護倫理的な面での指導の現状 ～教員の立場から～

○菅沼澄江<sup>1</sup>, 岩沢純子<sup>2</sup>, 上星浩子<sup>3</sup>

<sup>1</sup>群馬医療福祉大学看護学部看護学科, <sup>2</sup>東都医療大学ヒューマンケア学部看護学科, <sup>3</sup>群馬パース大学保健科学部看護学科

【研究目的】

臨地実習において、看護学生の看護倫理的な面に関して、教員はどのようなことを指導しているかを明らかにする。

【研究方法】

対象はコンピューターで抽出した関東甲信越の看護系大学、短期大学の40教育施設の看護責任者に1名の専任教員(准教授または講師)の回答依頼をした。同様、看護系専修学校40教育施設の専任教員の計80名。無記名自記式郵送法による質問調査。質問内容は「臨地実習で看護学生の看護倫理的なことに関しての指導での関わり」「重要にしている指導」の2質問を自由記載した。分析方法:質問紙に記載している文書から、看護倫理的指導の内容を文節毎にカード化、研究者3名または2名が共通したカードを取りだし、コード化した。類似性・相違性のあるものを分類し、コードをサブカテゴリー、さらにカテゴリー化した。倫理的配慮はA大学の研究倫理委員会の承認を得た。対象者には研究目的・内容、個人名が特定されないことなどを文書で説明、質問調査票の返信を持って研究の同意とした。

【結果】

対象者80名のうち、回答者は20名。属性は看護大学の教員8名、看護専修学校の教員12名であった。1. 教員が臨地実習で看護学生に行っている看護倫理的な指導での関わりは54コードであり、6サブカテゴリーと3カテゴリーが抽出された。カテゴリー【人間として尊重】では、「患者の権利」守秘義務」の2つのサブカテゴリーが形成された。カテゴリー【看護専門職としての基本姿勢】では、「態度」「知識、技術」の2つのサブカテゴリーが形成された。カテゴリー【思考への教育】では、「認識へのはたらきかけ」「指導の関わり方」の2つのサブカテゴリーが形成された。2. 教員が臨地実習で看護学生に行っている看護倫理的な指導で重要に指導していることは33コードで4サブカテゴリーと2カテゴリーが抽出された。カテゴリー【患者の思い】では、「学生の感性を大切にする」「患者の気持ちに沿う言動」の2つのサブカテゴリーが形成された。カテゴリー【看護を深める教育的かかわり】では、「考えさせる教育」「患者中心の指導」の2つのサブカテゴリーが形成された。

【考察】

教員は臨地実習において、看護学生に看護倫理的な指導として、患者に対して人間としての尊重、学生の看護専門職者としての育成及び考えさせる教育であった。中でも特に重要にしている指導は患者の思いを感じ取り、患者に対する丁寧な対応の仕方と患者を中心とした看護の提供に対する考えさせる教育であった。教員は看護学生に、常に、看護の質を深めるための考える教育を行っていた。

226) 抗がん剤治療継続をめぐる倫理的問題への検討

○本多昌子<sup>1</sup>

<sup>1</sup>渋川総合病院看護部

【目的】

臨床現場では、患者の意思決定を支えることが看護目標の1つである。私達は患者の意向にできるだけ添う看護ケアを行おうとする。しかし、医療者が考える患者の最善の利益と患者自身の意向との間にズレが生じた時、そのズレをいかにして埋め最善の方針を導き出すかに悩む。本研究の目的は、臨床の現場で遭遇した倫理問題について事例の解析を通して検討を加えることである。倫理的配慮として所属機関の倫理審査の承認を得た後、対象者へ研究への参加は自由意思であることを説明し同意を得た。

【事例1】

A氏, 50代男性。膵臓がんで化学療法を10クール施行後「治療しないで緩和ケアを受けたい」と希望した。治療可能な状態にあるにも関わらず、治療を受けずに症状緩和を希望するA氏に対し医療者は、A氏の希望通りに治療をせず緩和ケアを勧めてよいのか疑問を抱いた。

【事例2】

B氏, 70代女性。乳がん、多発骨転移、肺転移。抗がん剤の効果は奏功せず全身状態が徐々に悪化するB氏に対して主治医は、治療することで命を縮めてしまう可能性の方が高いと判断した。しかし、B氏は「抗がん剤をしてほしい」と希望した。全身状態はさらに悪化し医療者はB氏の希望を支えるべきかどうか悩んだ。

【結果】

上記2事例の倫理的問題の明確化として、現在のA氏、B氏が持つ治療への考え方や情報は、十分な情報を得た上での治療選択なのか、A氏、B氏の『知る権利・自己決定の権利』が守られない可能性を有した。研究者は、A氏、B氏が希望した理由とその意味について焦点を当てながら介入した。そして、治療を継続すること、しないことによって生じる身体への影響について情報提供した。さらに、多職種カンファレンスで十分な治療への理解を得た上でのA氏、B氏が決定した選択を尊重していくことを今後の方針として話し合った。

【考察】

本2事例では、A氏、B氏が十分な情報提供を受けないまま治療の選択をしてしまう可能性を孕んでいた。私達看護師は患者の十分な情報を得る機会や決定を保証するように介入していくことが必要である。患者の希望に沿った医療の提供が重要視される中で、看護師はその希望の奥にある理由や患者の思いに関わりによって深く掘り下げて把握していくことが求められる。日常業務の中に潜む様々な倫理的問題に対し目を向けることができるように倫理的感受性を高めていきたい。

## 227) 看護師の倫理的行動に影響を及ぼす要因

○堀美紀子<sup>1</sup>

<sup>1</sup>香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科

### 【目的】

本研究の目的は、看護師の看護実践における倫理的行動の実態を把握し、倫理的行動に影響を及ぼす要因を明らかにすることである。

### 【研究方法】

質問紙を用いて実態調査を実施し、量的、関連要因探索型の研究デザインを活用した。研究協力の承諾の得られた病院で勤務する患者の看護に直接携わる看護職約1,800名を対象とし、研究協力依頼書、自記式無記名の質問紙、返信用封筒を配布した。回答された質問紙は返信用封筒にて個別に投函された。調査内容は本研究の枠組みに従い、看護師の経験年数や教育背景等の個人特性と看護師の倫理的行動 (Ethical Behavior Test : EBT 日本語版)、看護実践能力 (Six Dimension Scale of Nursing Performance 日本語版)、看護師の仕事に対する価値のおき方と満足度、バーンアウト (日本版バーンアウト尺度)、仕事の継続意思に関する内容とした。統計処理はSPSS (ver19) を用い、記述統計、判別分析等を行った。検定の有意水準は5%とした。

### 【倫理的配慮】

A大学看護研究倫理審査委員会での審査及び承認を得て実施した。研究目的・方法・研究協力の自由意思の尊重、匿名性の厳守等について文書で説明し、質問紙の返送をもって同意とみなした。また、使用する測定道具は、原著者や日本語版の著者に使用の許可を得た。

### 【結果および考察】

887名から回答が得られた (回収率49.8%)。そのうち男性61名 (6.9%)、女性820名 (92.7%) で、平均年齢は36.9 (±9.9) 歳であった。EBTの5つの場面のうち、診断結果の告知場面では、94.5%が真実を伝えない選択をしており、患者の妻から患者に真実を伝えないよう依頼されている場合は、いくら患者に誠実な返事を求められても看護師は真実を伝えないほうが望ましいというコンセンサスが得られていた。しかし、他の4つの場面では、約7:3の割合で、患者の強い要求があっても、患者の害を避けたり、患者に有益になると思われるために行う専門的な看護行為を優先する行動を選択する傾向にあった。各場面での解決策別におけるグループ間にある特徴を見分けるために判別分析を行ったところ、解決策選択に関連するのは、倫理的推論、家族との関係や医師、看護管理者との関係、それらを構築するための看護実践能力としての人間関係/コミュニケーション、教育/協力であり、倫理的推論と仕事上の人間関係性に左右される特徴がみられた。また、患者に大きなリスクを負わず可能性がある選択では、仕事への満足度が低いという特徴があった。以上より、特に職場の人間関係性を改善することが倫理的な行動変容へとつながり、さらに職務満足度を高める可能性があることが示唆された。

本研究は、科学研究費補助金基盤C (20592508) の助成を受けて実施した。

228) 中国広西省で働く臨床看護師の生活援助技術の実施状況

○李 秀<sup>1</sup>, 大津廣子<sup>1</sup>, 曾田陽子<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>愛知県立大学大学院看護学研究科

【目的】

中国広西省の公立総合病院で働く看護師の生活援助技術の実施の実態を明らかにする。

【研究方法】

1. 対象：研究協力に承諾が得られた中国広西省の7ヶ所の公立総合病院で勤務する看護師660名。2. 研究方法：質問紙調査による量的記述的研究。3. 調査期間：2012年6月。4. 調査内容：1) 属性, 2) 質問項目：日本と中国の看護教育で使用される看護技術書と中国衛生部による「入院患者に対する基礎看護の項目」を参考に精選した生活援助技術28項目。選択肢は「実践する機会は無かった」～「実践する機会があったのでいつも行った」の5段階評価。日本語で作成した質問紙は、中国語及び日本語に堪能な医療に関係している中国人にback-translationを依頼し質問紙の内容の整合性と妥当性を確保した。5. 分析方法：統計解析はSPSS20.0for Windowsを用い単純集計とt検定を行った。6. 倫理的配慮：質問紙に個人情報保護などの倫理的配慮を記載した。回答用紙は厳封の上、鍵つきの回収ボックスに投函をしてもらい、回答をもって研究協力の同意とみなした。本研究は愛知県立大学研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した。

【結果】

有効回答は無回答を除く402部。対象者の属性は女性が90%以上で、年齢は20歳代(62.4%)、経験年数は3～5年(32.3%)、職位は護士(44.8%)、雇用形態は臨時職員(74.4%)が最も多かった。生活援助技術の平均実施率は72.9%であり、実施する機会があったと回答した中で最も多くの者が実施していた項目は「輸液ラインが入っている臥床患者の寝衣交換(89.5%)」「ベッドからストレッチャーへの移乗(89.4%)」「ストレッチャー移送(89.3%)」であった。反して、実施する機会があったが実施していない項目は「シャワー介助(50.5%)」「足浴(46.8%)」「自然排尿への援助(44.7%)」「洗髪(44.6%)」「全身清拭(38.9%)」であり、清潔援助に関する項目に多く見られた。属性別に実施項目数をみると、1,000床未満病院では19.8(SD7.44)項目、1,000床以上病院は17.5(SD7.26)項目であり、1,000床以上病院の実施項目数が有意に少なかった( $t=2.97, p<.01$ )。また、正職員は21.2(SD6.33)項目、臨時職員は18.0(SD7.61)項目であり、正職員の方の実施項目数が有意に多かった( $t=4.26, p<.001$ )。

【考察】

中国の大規模病院では、患者の大規模病院志向により患者数の増加や、難病や重症患者が多く急性期患者への対応が急務という現状がある。このことから、患者数に対して看護師不足となり、看護師は診療上の援助の実施を優先するために生活援助技術の実施項目数が少なくなったと考えられる。また、正職員の実施項目数が有意に多かったことは、正職員看護師の専門職としての役割意識が影響しているのではないかと考える。

229) 看護職者の二次的外傷性ストレス尺度の開発  
—第二次調査による尺度の改良と信頼性・妥当性の検討—

○和田由紀子<sup>1</sup>, 小林祐子<sup>1</sup>, 河内浩美<sup>1</sup>

<sup>1</sup>新潟青陵大学看護学部

【目的】

全国の看護職者を対象とした第二次調査を通じ、試作版：二次的外傷性ストレス尺度（以後試作版とする）およびその信頼性・妥当性を検討する。

【方法】

全国の病院に勤務する看護職者996名を対象とし、2012年2月～10月に各施設の看護部を通じた託送調査法による無記名・自記式の質問紙調査を実施した。本稿ではその中の試作版、および追加尺度の日本版GHQ精神健康調査票28項目版（以後GHQ28とする）・日本語版バーンアウト尺度（以後バーンアウト尺度とする）の2尺度を検討した。分析は、試作版のI-T相関分析・探索的因子分析・信頼性分析を実施し、各項目や因子を検討した後、追加尺度との相関分析を行い並存的妥当性を検討した。倫理的配慮は、使用した尺度の作成者・販売元に使用許可を得、所属機関の倫理審査委員会の承認を得た後に調査を実施した。

【結果】

質問紙の有効回収率72.2%、看護職の平均経験年数は14.2年（SD=9.4）であった。

I-T相関分析では、全ての項目に $r = .66 \sim .83$ の高い正の相関がみられた。探索的因子分析では、各因子の固有値の変化や因子行列から3因子構造が考えられた。因子1は麻痺に高い因子負荷量を示す9項目、因子2は過覚醒・再体験に高い因子負荷量を示す7項目、因子3は回避に高い因子負荷量を示す4項目で構成され、3因子で全分散を説明する割合は70.6%であった。この因子分析における各項目の因子負荷量は全て.40以上、因子相関行列は $r = .75 \sim .76$ を示した。尺度全体の点および各因子を下位尺度とした点を算出し信頼性分析を行ったところ、 $\alpha$ 信頼性係数は尺度全体が.96、各因子が.89～.94を示し、項目間の相関行列・項目統計合計量にも問題はなかった。以上の結果より、改善すべき項目は特にないと判断した。

尺度全体・各因子を下位尺度とした点数と、GHQ28・バーンアウト尺度との相関分析では、バーンアウト尺度の個人的達成感の低下とは全てで相関がなかったが、他の全体尺度・下位尺度間では $r = .23 \sim .58$ の正の相関があった。

【考察】

本稿では、全国調査を通じ、試作版の項目や尺度の信頼性・妥当性のさらなる検討を行った。一定の使用には耐えうる試作版であったが、今回の検討により全国規模でも信頼性・妥当性があることが示唆された。The Secondary Traumatic Stress Scale 1) の下位尺度とは構造が異なり、麻痺が独立し過覚醒・再体験が一つの下位因子となったが、二次的外傷性ストレスの特徴的な症状を示すものであり妥当といえる。

今後はさらに識別性妥当性のための追加調査や、データの確認的因子分析・共分散分析等を行い尺度の充実を図るとともに、二次的外傷性ストレスの関連要因・構造について検討し、予防策・対応策を講じられるようにする必要がある。

230) 泌尿器科病棟看護師のコンチネンスケアに対する意識  
—術後排尿障害患者へのケアに着目して—

○小野寺敦子<sup>1</sup>, 及川紳代<sup>2</sup>, 小澤尚子<sup>2</sup>

<sup>1</sup>盛岡市立病院, <sup>2</sup>岩手県立大学看護学部

【目的】

看護師の術後排尿障害に対する意識とケアの実際を明らかにし、コンチネンスケアに関する課題を検討する。

【研究方法】

対象者：A県内の総合病院泌尿器科病棟に勤務しており、術後排尿障害患者のケアを実施したことがある臨床経験3年以上の看護師5名。研究期間：2012年8月～9月。調査方法：研究協力者の属性に関する自記式質問紙・半構成的質問紙を用いた面接を行った。分析方法：研究協力者の語りを逐語録にし、研究目的に関する逐語をコード化、それらを統合するカテゴリーを生成した後、相互の関係を検討した。倫理的配慮：研究目的・方法、個人情報保護、研究の参加・中止は任意であること、研究目的以外にデータを使用しないことを文書および口頭で説明し同意を得た。面接は業務等に差し支えない日時とした。

【結果】

研究協力者は女性看護師5名、平均年齢37.2歳、看護師経験年数は平均12.8年、泌尿器科病棟の経験年数は平均1.8年であった。看護師の排尿障害に対する意識では【術後排尿障害患者の回復に対する切なさ喜び】【患者が術後に直面する排尿障害の厳しさ】【家族の援助を得る大変さ】【術後排尿障害患者のセルフケア確立への期待】【術後排尿ケアに対する看護師の意欲の向上】【排尿ケアに対する看護師のジレンマ】の6カテゴリーが抽出された。排尿障害患者に対するケアの実際では【排尿障害の対応策の指導】【排尿ケアに関する情報提供】【術後排尿障害の経過に関する説明】【羞恥心への配慮】【チームによる排尿ケア】【患者の視点から考える排尿ケア】【退院後生活を見据えたケア】の7カテゴリーが抽出された。

【考察】

看護師は、術後排尿障害の回復に悩む患者に対する切ない気持ちと、患者の回復に対する喜びの気持ちを抱いていた。このような気持ちを認識することは、患者の気持ちに気付き、患者が必要としているケアを考えるきっかけとなり得る。また看護師は、コンチネンスの理論的な認識には至っていない現状にありながらも、排尿障害について学びたいという意欲を持ち、患者の退院後生活を見据えるケアを行うなど看護師が持つ理想のケアに向かって実践を重ねていた。しかしながら、術後排尿ケアに対する意欲が高まる一方で、多忙な業務をこなさなければならない状況などからケアの不全感が存在しており、このような状況は看護師にジレンマを生じさせていると考えられた。排尿ケアの更なる質の向上をはかるためには、看護師一人ひとりがコンチネンスケアへの認識を高め、日頃実践している排尿ケアの成果を意味づけていくことが必要と考える。専門看護師および認定看護師等の能力も活用しながら、病棟全体におけるコンチネンスケアの実践が期待される。

## 231) ストーマを造設した患者のボディ・イメージに関する文献検討

○湯浅敦子<sup>1</sup>，大森美津子<sup>2</sup>，越智百枝<sup>2</sup>，西村美穂<sup>2</sup>

<sup>1</sup>香川大学大学院医学系研究科看護学専攻，

<sup>2</sup>香川大学医学部看護学科

### 【目的】

ストーマを造設することは，排泄部位と排泄処理方法の変更を余儀なくされ，それまで持っていたボディ・イメージを大きく修正する必要に迫られる。患者は，ストーマを知覚することによって，自らの身体を意識するようになり，ボディ・イメージの変化に伴って，新たな身体を経験をするのではないかと考えた。そこで本研究の目的は，ボディ・イメージに焦点を当て，ストーマを造設した患者がボディ・イメージをどのように捉えているのかを先行文献から明らかにすることとした。

### 【研究方法】

医学中央雑誌WEB版を用い，1993～2012年で検索語「人工肛門造設術」に「心理」または「適応」または「受容」または「体験」を掛け合わせ，看護文献，原著論文に限定した。検索された文献117件のうち，消化管ストーマ造設患者を対象とし，対象者の言葉で，身体表現に関する記述内容がある文献13件（事例研究4件，質的研究9件）を選定した。文献から，身体表現に関する記述箇所を抽出した。さらに，現象学的視点を踏まえ，抽出した記述内容に表れていることを中心に，研究者が感じられたことや，記述内容の解釈と合わせて具体的な身体イメージを表した。そして，具体的な身体イメージの同類性により類型化し，ストーマを造設した患者のボディ・イメージとした。分析過程において共同研究者と検討し，真実性の確保に努めた。本研究でのボディ・イメージは「身体に関する自己の像」とした。倫理的配慮は，文献からの引用は原典から行い，文献の出典を明らかにした。

### 【結果】

ストーマを造設した患者のボディ・イメージは，《違和感を生み出す身体》，《拒みたいが拒めない身体》，《閉ざされる身体》，《ストーマに縛られる身体》，《ストーマで区別される身体》，《脆さを感じさせる身体》，《女性性が脅かされる身体》，《生を感じられる身体》であった。

### 【考察】

ボディ・イメージが，ストーマを造設した患者にとってどのような意味を持つのかについて考察する。ストーマが造設されることで，《違和感を生み出す身体》を持ち，身体が自分を刺激し，身体を意識するようになる。また，《拒みたいが拒めない身体》，《閉ざされる身体》，《ストーマに縛られる身体》，《ストーマで区別される身体》を持ち，自分を身体に引き込む。また，《脆さを感じさせる身体》，《女性性が脅かされる身体》を持ち，自分に直面することで苦難を認め，それが身体から離される。そして，《生を感じられる身体》を持ち，自らの命を実感できることがあると考えた。このように，ストーマを造設した患者のボディ・イメージは，ストーマを通して身体と自分をつなぎ，命を感じることができるものと考えられた。